

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

令和5年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和6年9月19日

## はじめに

令和5年度（2023年度）の国立国語研究所の業務実績に関する外部評価報告書をお届けします。

令和5年度は、第4期中期目標期間（2022-2027年度）の2年目にあたります。第3期中期目標期間の最後の2年間で新型コロナウイルス感染症に大きく影響されたことは昨年度の本欄でも触れたとおりですが、幸い、第4期に入ってからはその問題も解消に向かいました。令和5年度には、国内外でのフィールドワークが再開され、種々の研究会も対面ないしハイブリッド形式で開催されるようになってきました。研究所内の会議も、主要なものは原則対面形式に戻して実施するように変更しました。幸い、本稿の執筆時点まで、おおきな揺り戻しを経験せずに済んでいます。

いまふりかえれば、コロナ禍の2年間で研究所に（そして日本の社会全体に）与えた影響には正負両面で大きなものがあったように思います。プラス面として、コロナ禍は、われわれの業務のどこまでがリモート化が可能かを見極める貴重な社会実験の機会となり、いわゆるワーク・ライフバランスの改善を真剣に検討する機会となりました。国語研究所の場合、管理部においても、従来想定されていたよりも広い範囲でのリモート化が可能であったというのが私の感想です。職員の勤務形態を改めるには人間文化研究機構本部での規定改定が必要であり、国語研究所だけの判断でことを進めることができませんので、今後、人間文化研究機構と協議を進めていきたいと考えています。

他方、マイナス面として指摘できるのは、連続的な在宅勤務によって研究所員どうしの日常コミュニケーションの機会が極端に減り、それが研究部、管理部を問わず、コミュニケーションの問題を引き起こしていると感じられることがあります。特に初めて社会に出る若者の場合、必要な研修の機会が奪われることのないよう、研究所の運営にあたって配慮を要する問題だと考えています。

令和5年度は、総合研究大学院大学日本語科学コースが第1期学生を迎え入れた年でもありました。博士後期課程だけという特殊な大学院でありながら、多くの志願者を得ることができ、4名を受け入れることができました。優れた大学院生の存在が研究所の活性化に大きく寄与することは言うまでもありません。その一方で、今後、教職員が大学院に割くエフォートの増加が研究所本来の業務である研究開発にどのように影響してくるかにも目配りが欠かせません。

以上、今回は研究以外の活動に焦点をあてて所感を述べました。私ども所員一同、今後とも、国立国語研究所のより一層の発展のために努力を重ねていく所存ですので、ますますのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

末筆となりましたが、本報告書の作成に貴重なお時間を割いていただきました外部評価委員会の先生方に心より御礼申し上げます。

令和6年9月

国立国語研究所長 前川 喜久雄

## 目 次

評価結果報告書 .....	1
令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告 .....	3
令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果 .....	13
令和5年度基幹型プロジェクトの評価 .....	15
機関拠点型基幹研究プロジェクトを構成する基幹型プロジェクトの一覧 .....	15
「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検評価報告 .....	16
「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価報告 .....	44
「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検評価報告 .....	46
「実証的な理論・対照言語学の推進」評価報告 .....	69
「消滅危機言語の保存研究」自己点検評価報告 .....	71
「消滅危機言語の保存研究」評価報告 .....	77
「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検評価報告 .....	79
「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」評価報告 .....	84
「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検評価報告 .....	86
「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」評価報告 .....	94
「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」自己点検評価報告 .....	96
「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」評価報告 .....	127
「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検評価報告 .....	129
「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価報告 .....	133
令和5年度 センターに関する評価 .....	135
「言語資源開発センター」自己点検評価報告 .....	136
「言語資源開発センター」評価結果 .....	140
「共同利用推進センター」自己点検評価報告 .....	142
「共同利用推進センター」評価結果 .....	147
「令和5年度管理業務」に関する評価 .....	149

資料 .....	154
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿 .....	155
2. 国立国語研究所令和5年度業務の実績に関する評価の実施について .....	156
3. 国立国語研究所外部評価委員会規程 .....	158
4. 国立国語研究所外部評価委員会【令和5年度実績評価】（第1回）議事次第 .....	160

## 評価結果報告書

令和5年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

令和6年9月19日 国立国語研究所外部評価委員会【令和5年度実績評価】(第1回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会  
委員長 片桐 恭弘

## 国立国語研究所令和5年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」の令和5年度分実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) プロジェクト全体、(2) 7つの共同研究プロジェクト（「語彙資源」、「理論対照」、「危機言語」、「言語問題」、「多世代会話コーパス」、「言語運用」、「通時コーパス」）、(3) 2つのセンター（言語資源開発センター、共同利用推進センター）、(4) 「管理業務」である。

令和5年度のプロジェクト全体に対する評価は「計画を上回って達成した」であり、(1) 研究体制、(2) 共同利用・共同研究、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値する。7つの共同研究プロジェクトの総合評価は、A（計画を上回って実施した）が5、B（計画どおりに実施した）が2であり、全体的に充実した研究が行われている。2つのセンターの評価はいずれもB（計画どおりに実施した）で、センターの多方面の活動とデータベース構築の成果が見られた。管理業務については、全体的にきわめて良好な業務運営が行われている。

以上のように、外部評価委員会は、令和5年度の本プロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、順調に伸展していると評価した。令和5年度も、前年度に続き工夫を凝らして研究活動を進め、学術書籍出版に加えて、コーパス・ソフトウェアの普及・若手研究者育成を積極的に進めて、言語資源による日本語研究の基盤強化に貢献するなど、高い水準の研究活動を行ったことは賞賛に値する。

本プロジェクトは、オープンデータ・オープンサイエンスに根差し、先進的なケース・スタディ、多様なコーパス開発、人材育成、国内外の研究共同体制構築を含む、日本語研究を大きく発展させる力を有する、国際的にも最重要な日本語研究プロジェクトと位置づけられる。外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを意識し、高い研究水準を維持し、プロジェクトの完遂に励むことを強く希望する。

令和6年9月

外部評価委員会  
委員長 片桐 恭弘

# 令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告

## 機関拠点型基幹研究プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

代表者：前川 喜久雄

### 1. 第4期中期計画

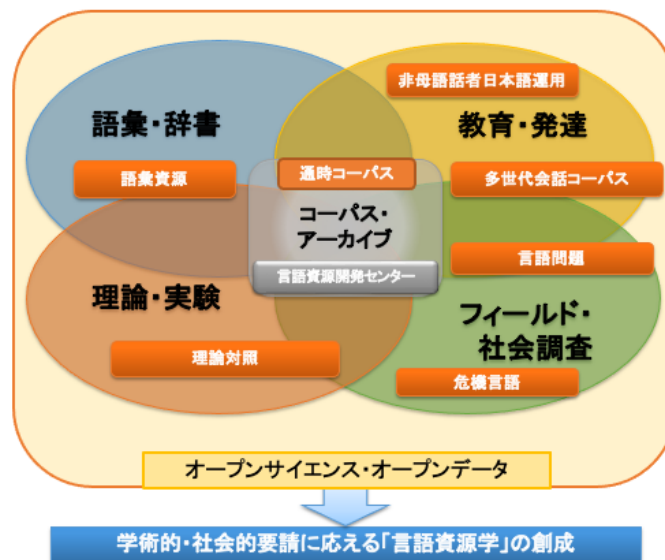
国立国語研究所は、機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画及び評価指標として以下を掲げている。

日本語・日本語教育分野における基幹研究の推進：学術的・社会的要請に対応した大規模な言語資源開発や言語調査を実施し、その実証的データに基づく理論的・応用的日本語研究を国内外の研究者や大学等研究機関と連携して推進するとともに、研究所が有する研究資料・言語資源等を活用した公募型共同研究及び異分野融合による公募型共同研究を実施する。これにより、新たな研究領域を創出し、日本語研究及び日本語教育研究を先導する国際的学術研究拠点としての機能を強化する。

- 評価指標
- ・国語研究所が提供する言語のデータベース（言語資源）の利用登録者数，検索クエリ数，言語資源を活用した論文数を，第4期中に，5万人以上，1,200万件以上，3,000本以上とする。
  - ・新領域「言語資源学」の創出に関わる研究シリーズを立ち上げ第4期中に4冊以上刊行する。

### 2. 機関拠点型プロジェクトの構成

上記の計画を達成するために、「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」という4つの研究領域を設定し、領域ごとに次に示す6つの研究班を構成して機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」を実施するとともに、言語資源開発センターのプロジェクトとの連携によりコーパス・アーカイブ化を推進することで、オープンサイエンス・オープンデータの体制を強化する。



## 機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

- ・「語彙資源班」多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創（小木曾智信）
- ・「理論対照班」実証的な理論・対照言語学の推進（浅原正幸）
- ・「危機言語班」消滅危機言語の保存研究（山田真寛）
- ・「言語問題班」多言語・多文化社会における言語問題に関する研究（朝日祥之）
- ・「多世代会話コーパス班」多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究（小磯花絵）
- ・「非母語話者日本語運用班」多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究（石黒圭）

## 言語資源開発センター 基幹研究プロジェクト

- ・「通時コーパス班」開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張（小木曾智信）

### 3. 令和5年度の研究体制

#### (1) 研究班の体制

令和5年度は6年計画の2年目にあたる。上記計画を達成するために、7つの研究班では次の計画で令和5年度の研究を進めた。

- ・語彙資源班：サブグループ「辞書使用調査」「空間接続」「学習者辞書」「語彙資源ポータル」「基本語機能語バンク」を組織し、各種語彙資源のデータ整備を継続するとともに、形態素解析用辞書UniDicや関連ツールを更新する。
- ・理論対照班：サブグループ「アノテーション」「イントネーション」「計算言語学」「体言化」「述語の意味文法」を組織し、各種アノテーションの整備、諸言語の動詞や日本語・琉球諸語のイントネーションに関する調査、民間企業との共同研究などを継続して進める。
- ・危機言語班：危機言語のフィールド調査を進めるとともに、危機言語データベース・談話資料データベースを拡充する。また危機言語サミットや市民科学者育成のための研修会など地域と連携したイベントを開催する。
- ・言語問題班：社会調査データの実施とデータの整備などを継続するとともに、研究発表会・シンポジウムを開催する。
- ・多世代会話コーパス班：子どもの日常会話や小学校での話し合い活動を対象とするコーパスなどの整備を進めるとともに、30時間のデータを共同研究員に限定公開する。またコーパス活用のための講習会を開催する。
- ・非母語話者日本語運用班：サブグループ「学習者作文」「学習者談話」「作文教育支援」「生活者談話」「生活者識字」を組織し、海外作文・談話データの収集、作文教育支援システムプロトタイプの構築、定住外国人の談話縦断調査、よみかき実践調査を継続して行う。
- ・通時コーパス班：『日本語歴史コーパス』増補データを整備して公開するとともに、『昭和・平成書き言葉コーパス』完成版を公開する。またコーパスを活用した日本語史研究に関する書籍を刊行する。

これらの研究班は、(1)異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融合型共同研究3件や、(2)研究所の共同利用性を高めるために令和2年度から開始した、研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する3種の共同利用型共同研究計28件（令和5年度新規採択15件）、(3)人間文化研究機構・共創先導プロジェクト4件、(4)人間文化研究機構・広領域連携型2件と連携して調査・研究を推進した（「機関拠点型R5\_別添資料.xlsx」シート「プロジェクト一覧」参照）。各班は、研究者ネットワークを構築するため

に、689名だった共同研究員を771名に増やし共同研究体制を強化した上で研究を推進した（表1）。

表1 共同研究員数 (人)

研究班	共同研究員数	所外共同研究員 (内数)	PD, 大学院生数 (内数)	海外 (内数)
語彙資源班	150	131	6	22
理論対照班	174	154	20	17
危機言語班	75	62	7	4
言語問題班	59	47	7	8
会話コーパス班	130	118	12	4
日本語運用班	133	118	12	52
通時コーパス班	52	46	5	3
計(延べ数)	773	676	69	110

### (2) 進捗状況の管理や評価の体制

各班の進捗状況を管理するために「共同研究プロジェクト推進会議」を毎月開催し、各班の活動報告、データベース構築計画・公開状況、合同シンポジウムの企画などを行い、相互に連携して研究活動を進めるとともに、自己点検・評価委員会を設置し、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。また言語資源開発センターを中核とする体制のもと、コーパス構築を担当する各班のメンバーが参加する「プロジェクト横断コーパス会議」を毎月開催し、コーパス構築法の共有化や問題の検討、コーパス講習会の企画など、計画的・体系的に言語資源開発を進めた。

### (3) 共同利用・共同研究拠点の強化の取り組み

研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する公募型プロジェクト「共同利用型」について、今年度は新規に15件（継続を含めて計28件）を採択し、共同利用・共同研究拠点の強化につとめた。また共同利用型プロジェクトや利用可能な研究資料等の周知を目的に「2023年度共同利用セミナー」を9月8日にオンラインで開催し、共同利用型プロジェクトの成果発表と研究所の収蔵資料群の紹介を行った。

また言語科学と統計科学の融合を主眼においた新しいセンター「次世代言語科学研究センター」の設置に向けて準備を進めた。

### (4) プロジェクト間の連携体制

コーパス構築に関わる5つの班が連携してNINJALシンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」を11月5日に開催し、国語研を代表する8つのコーパスを正しく使う方法を具体的に紹介するなど、コーパスの適切な利用法の普及につとめた。シンポジウムの発表動画を国語研公式YouTubeチャンネルにて公開するとともに、成果を書籍としてとりまとめ、今期新たに立ち上げた言語資源学シリーズの1冊として刊行する予定である。

## (5) 大学・研究機関との連携体制

既存の協定 32 件（国外 16 件，国内 16 件）に加え，消滅危機にある宮古島の言語の整備及び地域文化の保全・振興に関わる活動を推進するために沖縄県宮古島市と学術交流協定を，日本語学習者の談話・作文調査を進めるために福建師範大学外国語学院（中国）・ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）・フエ大学外国語大学（ベトナム）・ドンア大学（ベトナム）と学術交流協定を新たに締結し，連携体制を強化した。

## 4. 令和 5 年度の活動内容

### 4. 1. 調査研究活動・研究成果の公開

#### (1) 各班の活動の概要

各班は，3(1)に示した令和 5 年度計画に従い次の通り活動した（詳細は各班の自己点検評価報告書参照）。

- ・語彙資源班：各種語彙資源については，複数短単位対応の分類語彙表対応表や古典用 UniDic 11 種類の整備・公開，国内言語地図 12 冊のスキャン画像データ・ジオタグ付き画像データの整備・公開，『日本語基本語辞典（試行版）』の電子テキスト化，学習者用「日本語機能語バンク」の構築など，概ね計画通り進めた。また中国・台湾・韓国・ベトナム・英国・ドイツ・日本の学生計 110 名を対象に実施した辞書検索行動調査のデータ整備を各大学と共同で進めた。
- ・理論対照班：「日本経済新聞記事オープンコーパス」に対する各種アノテーション，『広島大学日本語電話会話コーパス』の形態素情報の再解析，方言形態素解析用辞書の構築作業などを概ね計画通り進めた。また日本語，英語，中国語を中心とした状態変化に関する表現のデータ収集や八重山諸島・宮古諸島のイントネーション調査を行った。更に民間企業 5 社との共同研究を継続して進めるとともに，シェルパ・アンド・カンパニーとの共同研究を新たに開始した。
- ・危機言語班：計画通り共同研究員が各自の担当地点でフィールドワークを行い，語彙・文法・談話データを収集した。語彙データベースを改良し，プロジェクトのウェブサイトで公開しているオンライン辞書の機能を拡充するとともに，田皆方言のデータを音声付きオンライン辞書として整備し語彙データベースで公開した。また危機言語サミット（与那国島大会）や地域言語の記録と継承を行うことのできる市民科学者の育成を目的とする研修会・講座を開催した。
- ・言語問題班：調査会社に委託することによる調査として「コロナ関連用語の意識調査(全国)」 「プロソディ変異調査（札幌，東京，鹿児島）」 「アクセント実態調査（広島）」を実施するなど概ね計画通りに調査を進めた。また令和 3 年度，令和 4 年度に実施した大規模社会調査（3 件）のデータ整備を継続して実施し，「日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査」「現代日本語における外来語使用実態調査」については報告書を刊行した。
- ・多世代会話コーパス班：子どもの日常会話や小学校での話し合い活動の収録・コーパス整備を計画通り進め，令和 6 年度に一般公開予定の 50 時間の日常会話データを共同研究員に限定して先行公開するとともに，『日本語日常会話コーパス』リレーショナルデータベースや，同コーパスに対するアノテーション等 4 種を新規に構築・公開することにより，共同利用基盤を強化した。また若手研究者や大学院生を主対象とする講習会・チュートリアルを 2 回開催した。
- ・非母語話者日本語運用班：海外の 19 大学及び 3 大学と連携した学習者の作文縦断データ・談話縦断データの収集，作文支援システムプロトタイプの予備実践，定住外国人の談話縦断調査，よみかき実践調査などを計画通り進めた。また北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）を整備して一般公開した。作文・談話の縦断調査に際しては，すでに学術交流協定を締結している海外 3 大学に加え，今年度は新たに 5 大学と協定を結び，連携した調査体制を築いた。

- ・通時コーパス班：『昭和平成書き言葉コーパス』完成版の公開，『日本語歴史コーパス』増補版の公開，「上方絵入狂言台本」「古今集遠鏡」の整備，OpenCHJ 構築支援ツールとしての「Web 茶まめ」の改修，能楽研究所との協定に基づく「謡曲百番」コーパス整備の準備など，概ね計画通りにコーパス整備・公開を進めた。また成果をまとめた『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』を刊行するとともに，若手を対象とするコーパス講習会を2回開催した。

## (2) 研究成果の発信

- ・令和5年度は25件の共同研究発表会（参加者延べ1310人）を開催してプロジェクトの活動を推進するとともに，14件の国内シンポジウム・ワークショップ等（同2012人），2件の国際シンポジウム・ワークショップ等（同53人）を開催して研究成果を広く発信した（「機関拠点型R5\_別添資料.xlsx」シート「シンポジウム等」参照）。このうちEvidence-based Linguistics Workshop（9月14・15日）は神戸大学人文科学研究科との学術交流協定に基づき共同開催されたものであり，発表の公募も行うなど大学と連携して運営した。
- ・研究成果をとりまとめ，4冊の書籍（うち1冊は国際会議プロシーディングス集）を国際出版，3冊の書籍（研究書）を国内出版，1冊の教科書を国際出版，1冊の教科書を国内出版，2冊の報告書を国語研究所のリポジトリで公開した（「機関拠点型R5\_別添資料.xlsx」シート「書籍」参照）。国際出版4冊のうち3冊は，De Gruyter Mouton社との出版協定に基づくシリーズで刊行されたものである（詳細は4.4「国際連携・国際発信」参照）。
- ・共同研究員を含む国語研の研究者を中心として，研究活動・成果を報告し情報交換を行う場であるNINJALサロンを22回（参加者延べ725人），国内外の優れた研究者による講演会であるNINJALコロキウムを10回（同928人）開催した。
- ・プロジェクトを中心とする研究所の研究活動の活性化と成果の発表及び所内若手研究者の育成を目的として『国立国語研究所論集』第25号（7月）・26号（1月）を刊行した。

## (3) 言語資源・ツール等

- ・外部機関と連携して言語資源・検索ツール等の整備を行い，①コーパス2件，データベース2件，アノテーション9件，辞書・語彙表5件，画像データ29件の新規公開，②コーパス3件，データベース2件，アノテーション1件，画像データ1件の追加公開，③コーパス2件，データベース1件，ツール等1件の更新，④コーパス1件の再公開，データベース1件の機能拡張を行った（「機関拠点型R5\_別添資料.xlsx」シート「言語資源・ツール等」参照）。

- ・コーパスの一部は言語資源開発センターが管理するオンライン検索システム「中納言」で公開されており，ユーザ総数50,952人，うち令和5年度の新規登録ユーザ数は9,066人，年間検索数は272万件（前年度比124%）と，広く研究に活用された（図2）。

なお，機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画の評価指標を「言語資源の利用登録者数・検索クエリ数を第4期中

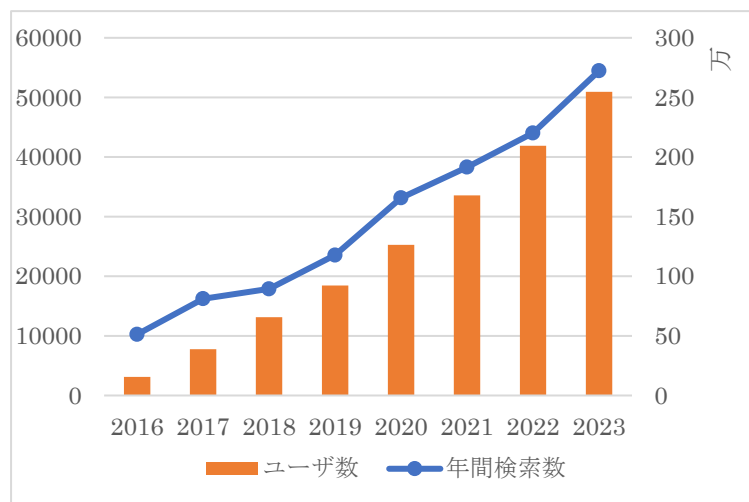


図2 「中納言」登録ユーザ数(左軸)・年間検索数(右軸)

に5万人以上、1,200万件以上」としている。この数値は、第3期令和2年度までの5年間の実績を踏まえ、第4期の6年間で2倍以上にすることを目標に設定したものであるが、令和4年度と令和5年度の2年間で、利用登録者数5万人は達成、また検索クエリ数1,200万件のうち4割以上を達成した。今後も同様にコーパス関連の講習会や授業、コーパス関連書籍等を通じてユーザ層の拡大を続けることで、検索クエリ数の目標も余裕をもって達成することができる見通しである。また言語資源を活用した論文数について、第3期の1.4倍に相当する3,000本（年500本）を指標に掲げている。論文数については現在集計中だが、令和5～6年の2年間で1,124本となっており、達成が見込まれる。

#### (4) 共同利用性向上の取り組み

共同利用推進センターが中心となり各班と連携しながら以下の取り組みを実施した。

- ・国語研の研究成果のオープンアクセスを加速するため、オープンアクセス方針に沿って研究成果の公開を推奨し、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での登録・公開を推進した。今年度追加183件、総数3,203件となった（ダウンロード回数45.3万）。
- ・日本語研究・日本語教育研究の共同利用に供するため、当該分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し、オンラインで一般公開している「日本語研究・日本語教育文献データベース」に6,409件を追加登録し、総データ件数は286,835件となった（セッション数9.2万）。
- ・国語研が所蔵する貴重図書等のデジタル化を進め、オンラインで一般公開している「日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕」に18件を追加した（セッション数2.4万）。
- ・研究資料室収蔵資料の利活用のため、収蔵資料目録の整備を進め、オンラインで一般公開している「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は13件、収蔵資料目録試行版の追加登録は5,469件となった（セッション数6,700）。
- ・研究資料室収蔵資料の目録データ「収蔵資料群概要」「収蔵資料目録」「言語地図草稿目録」の3種について、人間文化研究機構が運営する機関横断検索 nihuBridge の統合検索用メタデータを構築して nihuBridge に登録した。

#### (5) 異分野融合研究

- ・IU-REAL 異分野融合・新分野創出プログラム 2023年度スタートアップ「素粒子実験のデータ解析技術を応用した日本語テキストの数理的解明」において、高エネ研の研究者らと共同で、素粒子実験でデータと物理モデルの一致度合いを評価するために用いられている統計的手法を日本語テキストの数理的分析に応用するための研究を進め、国際会議発表を行った。同内容は科研費挑戦的研究（萌芽）23K17512にも採択された。
- ・国立障害者リハビリテーションセンター研究所と連携し、『日本語日常会話コーパス』に付与した自閉症スペクトラム指数調査に基づき自閉傾向と終助詞使用との関係に関する研究を実施し、その成果発表にて第48回社会言語科学会研究大会大会発表賞を受賞した。また同センター及び昭和大学発達障害医療研究所と協力し、自閉症者の会話データの収録を開始した。

## 4. 2. 教育・人材育成

### (1) 大学との連携による教育

- ・一橋大学大学院言語社会研究科との協定に基づき教員3人が授業を行い、博士学位論文審査の主査3件、副査3件を担当した。また東京外国語大学大学院国際日本学研究院とのクロスアポイン

トメント制度により教員2人が授業を担当したほか、国際日本学研究院 NINJAL ユニット講演会2件を開催した。

- ・総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」を今年度新たに開設し、4名の学生を受け入れた（定員：3名程度）。また、新入学生を確保するためにコース案内冊子を作成し、国内の関連分野の修士課程を設置している国公立の184大学に送付するとともに、9月18・19日に開催した所内での大学院説明会や言語処理学会などの学会で配布を行った。

## (2) 若手人材の育成

- ・若手研究者のキャリアパスとして特任助教4人とプロジェクト非常勤研究員68人を雇用したほか、日本学術振興会の特別研究員PDを4名受け入れ、プロジェクトへの参画などを通して実践的に日本語研究を推進できる人材の育成につとめた。
- ・日本語研究の振興及び優秀な若手研究者の奨励・育成のために、令和4年6月に創設した宮地裕日本語研究基金の事業として「宮地裕日本語研究基金学術賞」「宮地裕日本語研究基金学術奨励賞」を公募し、令和5年7月に第1回学術奨励賞2名の授賞を行った。続いて10月に第2回の募集を開始し選考を行っている。また「総研大日本語言語科学コース特別奨学金」を7月に1名、「総研大日本語言語科学コース学生学会発表支援金」を3月に3名支給した。
- ・若手人材育成を目的に、大学院生延べ72名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、共同研究を推進したところ、言語処理学会第30回年次大会において大学院生筆頭著者の発表が委員特別賞を受賞した。また学振特別研究員1名が2023年度日本言語学会論文賞を受賞した。
- ・若手研究者を育成するために、各班の研究テーマに即した若手研究者向けのチュートリアル・講習会を16回開催し、合計で741人が参加した（「機関拠点型R5\_別添資料.xlsx」シート「講習会」参照）。このうち5回は、東呉大学、インド工科大学、デカン・カレッジとの学術交流協定に基づいて開催されたものである。また5回はコーパス利用のための講習会とした。こうした取り組みにより、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを131件、計4,019人の学生等に発行するなど、コーパスが授業で広く活用された（「機関拠点型R5\_別添資料.xlsx」シート「中納言授業用アカウント」参照）。
- ・学生や若手研究者を対象にした音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー「第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」を言語資源開発センター主催（共同利用推進センターほか共催、日本音声学会協賛）で開催し、33名が参加した。また同セミナーの講義動画を国語研公式YouTubeチャンネルにて公開した。
- ・新領域「言語資源学」に関する研究シリーズを研究社から無償配布のデジタル版（オープンアクセス版）と有償頒布の印刷版（商用版）で出版することが確定し、7巻の企画がまとまった。令和5年度は先行して刊行する予定の4冊について執筆を進めた。
- ・大学生・大学院生向けに動画教材「言語学レクチャーシリーズ」を新たに8本作成して国語研公式YouTubeチャンネルにて公開し、既公開分とあわせ年間60,292回再生された。
- ・若手研究者のモチベーションを高めるために、「言語資源ワークショップ2023」において若手研究者向けの賞を設置し、優秀発表賞を1人に授与した。

## (3) 社会人の学び直しへの貢献

- ・日本語教師等を対象とするNINJAL日本語教師セミナーとして、「日本語教育と異文化理解：理論と実践」を9月25日にジャカルタ国立大学・オンラインのハイブリッドで、「考える市民を育て

る言語教育：問い生成先行型の読解/聴解と、複数テキストの認知的統合」を2月26日にオンラインで開催し、延べ263人のスキルアップに貢献した。

#### 4. 3. 社会連携・社会貢献

##### (1) 研究成果の社会への普及

- ・研究成果を分かりやすく一般に向けて発信するため、第18回 NINJAL フォーラム「国語研の言語生活研究の75年：生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」を12月16日にハイブリッド開催し、対面・オンライン併せて190名の参加があった。また大学共同利用機関協議会主催の大学共同利用機関シンポジウム2023「現代の社会問題に挑む日本の科学」（10月22日、日本科学未来館）の主担当機関として、シンポジウムの企画・運営を実施した。各大学共同利用機関に所属する10名のパネリストが登壇したシンポジウムであり、対面で68名、ニコニコ動画によるオンライン視聴者数延べ31,352名（コメント数3,218件）の参加があった。
- ・令和6年1月に書籍『日本語の大疑問2』（幻冬舎新書、初版発行部数10,000部）を刊行した。これは令和3年11月に刊行した『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（累計発行部数74,000部）の続編にあたるもので、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した「ことばの疑問」の記事を改訂の上、書籍化したものである。
- ・国語研ポータルサイト「ことば研究館」において、ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」25本及び各種催し物、メディア掲載情報など、ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』Vol.13を3月に刊行した。
- ・ことばの研究を通じて学問の楽しさを知ってもらおう中学生・高校生対象のNINJAL 職業発見プログラムを、捜真女学校中学部の生徒150名（6月21日）、京都市立日吉ヶ丘高校の生徒11人（12月26日）など、合計8件185名を対象として、出前授業や研究所訪問受入の形で実施した。また、小学生向けのNINJAL ジュニアプログラムとして、青梅市立第五小学校5年生48名を対象に、語彙をテーマとした出前授業（1月12日）を実施した。

##### (2) 地方自治体との連携

- ・言語・方言の保存・継承活動のネットワーク的機能をもつ「危機的な状況にある言語・方言サミット（与那国島大会）」を文化庁や地方自治体等と共催で10月14、15日に開催した。昨年度に引き続き、来場者と情報交換を行う機会として「ブース発表」を設け、日本各地で継承保存を行っている11組（デモンストレーション含む）が普及に係る取り組み事例を紹介した。国語研からは、危機方言の現況報告に関する講演やパネル協議に参加したほか、昨年度オーキッドバウンティ賞を受賞した「言語復興の港」の活動についてブース発表を行った。
- ・鹿児島県大島郡和泊町・知名町（沖永良部島）との協定に基づき、知名町中央公民館講座町職員研修会「しまむにサロン」を毎月1回、計11回開催したほか、沖永良部島の継承文化・言語イベントである中高生対象のヘリテージ・キャンプや、島ことばと絵本制作トーク「星の話をみんなで語り継ごう」などを通して、延べ380名を対象に、地域言語コミュニティ内で地域言語の記



録と継承を行うことのできる市民科学者の育成を行った。このうち知名町中央公民館講座は、国内では先例のない消滅危機言語活動の先進的な取り組みにつながった。研修会で言語の記録訓練を学んだ受講生が中心となり自主的に調査チームを組織した上で、国語研作成の基礎語彙リストを活用して自ら約 1000 語の音声データを収集し、国語研のサイトからオープンデータとして公開するなど、住民の自発的・主体的な活動と研究所との実質的連携を産み出した。

### (3) 産学連携

- ・コーパスを活用した産学連携研究として、SB Intuitions 株式会社、株式会社リクルート、ホンダリサーチインスティテュート社 (HRI) など、6 社と共同研究を行った。HRI と共同で構築した位置情報参照表現データベースについて言語処理学会第 30 回年次大会で発表し、優秀発表賞を受賞した。また SB Intuitions 社と共同で行った研究について情報処理学会 NL 研究会で発表し、第 1 著者 (SB Intuitions) が若手奨励賞を受賞した。
- ・小学館出版局との連携協定のもとで『日本国語大辞典』から形態素解析用辞書 UniDic のデータベースに見出し語 (15,575 語彙素, 18,406 書字形) を追加・整備した。
- ・作文の自動評価システム開発のため、富士通研究所を中心とした AI の専門家と連携して研究を進めた。

## 4. 4. 国際連携・国際発信

### (1) 国際的協業

- ・海外機関に所属する研究者延べ 110 人を共同研究員に加え、海外の研究と連携を図りながら共同研究を推進した。また、海外の研究者 4 人を外来研究員として受け入れ、共同研究を推進した。
- ・次の通り海外の機関・研究者と連携して調査を進めた。
  - ・作文データ調査：中国 7 大学、台湾 2 大学、韓国 2 大学、ベトナム 3 大学、タイ 2 大学、フランス 1 大学、スロヴェニア 1 大学、英国 1 大学の計 19 大学との共同調査体制を構築して日本語学習者の作文データの調査を行い、令和 5 年度は計 1,691 本の作文データを収集した。国際的な研究拠点を形成して調査の連携を高めるために、既に学術交流協定を締結している天津外国語大学 (中国)、東呉大学 (台湾)、韓国外国語大学校 (韓国) に加え、福建師範大学 (中国)、フエ大学外国語大学 (ベトナム)、ドンア大学 (ベトナム) と新たに学術交流協定を結んだ。
  - ・談話・作文のオンライン縦断調査: 西安外国語大学 (中国)、ハノイ国家大学外国語大学 (ベトナム)、チュラーロンコーン大学 (タイ) と連携し、大学の学生を対象に談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。令和 5 年度は 97 時間の談話データと 252 本の作文データを収集した。更に連携を強化するために、西安外国語大学及びハノイ国家大学外国語大学と学術交流協定を新たに締結した。
  - ・辞書ツール使用実態調査: 学術交流協定を締結した大学等と連携して実施した中国、台湾、韓国、ベトナム、英国、ドイツ、日本の計 10 大学、110 名の学生を対象とする 1 週間の辞書検索行動調査のデータ整備を共同で進めた。
  - ・学術交流協定を締結したデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート及びインド工科大学マドラス校と連携してインドにおける体言化・類別詞・性標示に関するフィールドワークを 2 回実施した。その際、若手人材育成のために、協定先の大学の若手研究者 2 名 (修士課程、修士課程修了者) を調査に参加させ、フィールドワークの手法やデータの整理・分析などを実践的に学ぶ機会を提供した。

## (2) 研究成果の国際的発信

- ・研究成果を国際発信するために、De Gruyter Mouton 社から3冊の書籍をオープンアクセスで出版した(表2)。これらはいずれもDe Gruyter Mouton 社との協定に基づくシリーズ Mouton-NINJAL Library of Linguistics (MNL)によるものである。また同社との協定に基づく Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ (HJLL)のうち、残る1巻と7巻も来年度出版予定である。

表2 国際出版の書籍一覧

著者・編者	書名	出版社
Masatoshi Koizumi (Ed.)	Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives, Vol 1, Cross-Linguistic Studies	De Gruyter Mouton
Masatoshi Koizumi (Ed.)	Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives, Vol 2, Interaction Between Linguistic and Nonlinguistic Factors	De Gruyter Mouton
Hideki Kishimoto, Osamu Sawada and Ikumi Imani (Eds.)	Polarity-Sensitive Expressions Comparisons Between Japanese and Other Languages	De Gruyter Mouton

- ・コーパスを活用した国際的な日本語研究促進のために、言語資源の欧州を中心とする頒布に実績のある ELDA (Evaluations and Language resources Distribution Agency) と協定を結び、「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」(有償版コーパス)の配付を開始した。

<https://catalog.elra.info/en-us/repository/browse/ELRA-S0488/>

## 4. 5. その他

- ・令和5年度外部評価委員会にて指摘を受けた研究所ホームページについての意見を踏まえ、共同利用推進センターのページを新設したほか、言語資源開発センターのページに同センターのミッションなどの記載を行った。

共同利用推進センター：

<https://www.ninjal.ac.jp/info/aboutus/organization-chart/cpcr/>

言語資源開発センター：

<https://www.ninjal.ac.jp/info/aboutus/organization-chart/clrd/>

## 令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果

プロジェクト名：「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

### 令和5年度の評価

#### 《達成状況の評価結果》

計画を上回って達成した

#### (判断理由等)

国立国語研究所は、機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画に、日本語・日本語教育分野における大規模言語資源開発や言語調査の実施、国内外研究者・大学等研究機関との連携による理論的・応用的日本語研究の推進、異分野融合による公募型共同研究の実施、新たな研究領域の創出、日本語・日本語教育研究の先導的国際的学術研究拠点機能強化を掲げ、言語資源の利用、言語資源を活用した論文成果に関する定量指標および新領域「言語資源学」の創出に関わる研究書籍刊行を評価指標として設定している。

上記計画の下に「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」の4研究領域を設定し、7つの研究班を構成してプロジェクトを実施し、言語資源開発センターとの連携によりコーパス・アーカイブ化を推進するとともに所内外の連携を積極的に推進した。

その結果として、言語資源利用、論文成果、「言語資源学」に関わる研究書籍刊行に関して設定した目標を上回るレベルの成果を達成している。共同利用型共同研究プロジェクト、人間文化機構との連携プロジェクトの実施、共同研究員の増員を通じた所内外の共同研究の拡大、シンポジウム開催、動画コンテンツ公開などを通じた言語資源利用者の拡大、国内外の大学・研究機関との連携による調査・研究の拡大を通じて、言語資源構築、言語資源の利用促進、言語資源を活用した研究成果創出のサイクルが回る優れた体制を構築している点を高く評価する。

### 【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

#### (1) 研究体制について

機関拠点型プロジェクトおよび言語資源開発センター基幹研究プロジェクト実施のために、語彙資源班、理論対照班、危機言語班、言語問題班、多世代会話コーパス班、非母語話者日本語運用班、通時コーパス班の7班を構成し、共同研究プロジェクト推進会議、プロジェクト横断コーパス会議を定期的に開催して研究進捗管理を行うとともに、研究班間の連携と言語資源の計画的・体系的開発を図り、自己点検・評価委員会を設置してプロジェクト全体の自己点検・評価を行うなど、優れた研究推進の仕組みが整備されている。

既存の32件の国内外の大学連携に加えて、新たに中国・ベトナムの4大学と学術交流協定を結び、日本語学習者の調査研究を通じて大学の日本語教育活動に貢献している。一橋大学をはじめとする三大学との連携により、大学院生研究指導及び授業を実施、国語研言語資料アクセスアカウントを発行して大学授業の支援を行うなど大学の機能強化に貢献している。

#### (2) 共同利用・共同研究について

書籍については英語4冊、中国語1冊を含む20冊を発行しており、今後も調査・研究の成果を元に着実な書籍発行が見込まれる。言語資源・検索ツールについても47件の新規公開を含む60件の新

規公開・追加公開・更新を行っており、言語資源・検索ツールの整備を通じて今後も着実なアウトプットが期待できる。

日本語学の諸側面に関する研究報告書出版による着実な学術的貢献に加えて、教科書・一般書の出版、地域展示や市民科学活動への積極的参画、一般人を対象としたNINJALフォーラムのハイブリッド実施などは日本語に対する人々の意識を高める活動として社会的意義が高い。

国内外の大学などとの学術交流協定は国内17件、国外20件に上る。新たに沖縄県宮古島と学術交流協定を結び消滅危機言語の整備・文化保全活動を共同実施、中国・ベトナムの大学と学術交流協定を結び日本語学習者調査研究を共同実施、神戸大学人文科学研究科との学術交流協定に基づきEvidence-based Linguistics Workshopを共同開催するなど、組織的な連携の下に着実に活動が進められている。

高エネルギー加速器研究機構の研究者と共同の新分野創出プログラム2023年度スタートアップ研究、国立障害者リハビリテーションセンター研究所との連携による自閉傾向と終助詞使用に関する研究など、異分野研究者との共同研究が積極的に進められている。前者は科研費採択に、後者は学会発表賞受賞および会話データ収録の拡大につながっており、異分野協業の拡大は高く評価される。

### **(3) 教育・人材育成について**

一橋大学、東京外国語大学、総合研究大学院大学の大学院において、授業担当あるいは大学院生指導を行う体制が構築されており、国語研における日本語研究の教育的普及が進められている。また国内外の延べ131の大学等で中納言授業用アカウントを発行し、言語資源普及を通じて大学・大学院教育に貢献すると同時に日本語学研究者の裾野拡大を図っていることは高く評価できる。

特任助教4人、非常勤研究員68人の雇用、日本学術振興会PD4名の受け入れなどによって若手研究者のキャリアパス提供を図っている他に、延べ72名の大学院生を共同研究員としてプロジェクトに参画させている。若手研究者対象の講習会・セミナー開催、動画教材の提供、日本語教師等を対象としたNINJAL日本語教師セミナーのオンライン開催などを合わせて行った結果として、学会賞の受賞や言語資源を活用した多数の論文成果に結びついていることは評価される。

### **(4) 社会連携・社会貢献について**

コーパスを活用した企業との産学連携共同研究を6社と実施、出版社との連携による辞書の拡充など、言語資源整備と自然言語処理応用の連携が進んでいることは高く評価できる。AI技術の浸透に伴い両者の連携の重要性はさらに高まるため、今後も一層の発展を期待する。

一般人を対象としたNINJALフォーラムの開催、一般向け書籍出版、国語研ポータルサイト「ことば研究館」の運営、中高生を対象としたNINJAL職業発見プログラムの開催などは研究成果の社会普及活動として高く評価される。

### **(5) 国際連携・国際発信について**

海外からの研究者の共同研究員・外来研究員としての受け入れに加えて、20件の海外大学・研究機関との国際交流協定を基盤として、作文データ調査、談話・作文データ調査、辞書ツール使用実態調査などを体系的に実施し、データ収集を進めたことは高く評価される。研究成果の国際発信ではDe Gruyter Mouton社からのオープンアクセス書籍出版が評価される。

### **(6) その他特記事項**

特になし。

## 令和5年度 基幹型プロジェクトの評価

### 機関拠点型基幹研究プロジェクトを構成する基幹型プロジェクトの一覧

プロジェクト名 (略称)	サブプロジェクト名	代表者 (プロジェクトリーダー)	サブプロジェクトリーダー
多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創	学習者の辞書資源使用の実態調査	小木曾智信	石黒圭
	言語資源の空間接続		大西拓一郎
	学習者用辞書資源の構築		柏野和佳子
	語彙資源ポータル拡張		高田智和
	学習者用「日本語機能語バンク」の構築		ブラシャント・バルデシ
実証的な理論・対照言語学の推進	アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学	浅原正幸	浅原正幸
	日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究		五十嵐陽介
	計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓		窪田悠介
	体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—		ブラシャント・バルデシ
	述語の意味と文法に関する実証的類型論		松本曜
消滅危機言語の保存研究		山田真寛	
多言語・多文化社会における言語問題に関する研究		朝日祥之	
多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究		小磯花絵	
多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究	日本語学習者の作文の縦断コーパス研究	石黒圭	石黒圭
	日本語学習者の談話の縦断コーパス研究		石黒圭
	日本語学習者の作文教育支援研究		山口昌也
	定住外国人の談話の縦断研究		野山広
	定住外国人のよみかき研究		福永由佳
開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張		小木曾智信	

# 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検評価報告

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

## 令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合		A
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
	3. 地域・社会との連携に関する計画	B
	4. グローバル化に関する計画	A

## I. 計画期間内の概要

### 1. プロジェクト全体の6年間の計画

日本語の語彙データを扱う下記のサブプロジェクト群を統括し、その全体を結びつけるキーとなる語彙資源の整備を行うとともに、合同でシンポジウムやチュートリアルを開催し、共同研究を行う。

- ・学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・言語資源の空間接続
- ・学習者用辞書資源の構築
- ・語彙資源ポータル拡張
- ・学習者用「日本語機能語バンク」の構築

各サブプロジェクトではさまざまな日本語語彙に関わるデータを構築する予定であるが、これらがばらばらで互換性のないものにならないように、相互接続性を持つ統一的な枠組みの中で扱えるようにするため、これまで国語研のコーパス構築に利用されてきた UniDic の見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合 ID を共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

プロジェクト全体で、年1回以上、語彙資源の活用に関するシンポジウムを開催（サブプロジェクト持ち回り）、また年1回以上、サブプロジェクトとともに語彙資源活用チュートリアルを開催する。最終年度までに「言語資源学シリーズ」の1冊として語彙資源を活用した研究論文集をサブプロジェクトと合同で1冊以上刊行する。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算総額 40,658千円

語彙資源プロジェクト全体で行う語彙資源に関するシンポジウム・講習会は、今年度は日本語学会秋季大会のワークショップ「コーパスと語彙資源の連携」（2023年10月）として実施し、プロジェク

トで構築する語彙資源について利用法とともに発信した。

[https://www.jpling.gr.jp/taikai/2023b/2023b\\_program/](https://www.jpling.gr.jp/taikai/2023b/2023b_program/)

サブプロジェクトでは、計画にそって語彙資源の整備を順調に進めたほか、特に重要なものとして次のような成果があった（※詳細は各サブプロジェクトの報告書を参照）。

#### ●語彙資源統括

- ・『日本国語大辞典』と UniDic の対応付けを行い UniDic データベースに見出し語を追加・整備を行った（15575 語彙素，18406 書字形を追加）
- ・複数短単位対応版の分類語彙表を構築して公開した（2024 年 3 月）
- ・古文用の UniDic 11 種類を整備・公開した（2023 年 9 月）
- ・「Web 茶まめ」を更新し、新しい UniDic に対応したバージョンを公開した（2024 年 3 月）。また DH2023（2023 年 7 月，グラーツ）でこれに関する研究発表を行った。

#### ●学習者の辞書資源使用の実態調査

- ・予定を前倒して、2022 年度末に、中国 48 名，台湾 11 名，韓国 22 名，ベトナム 10 名，英国 3 名，ドイツ 3 名，日本 13 名の合計 110 名の学生を対象に 1 週間の辞書検索行動調査を完了し，データを収集した。
- ・海外の共同研究員を中心とする分科会を本年度 7 回行い，論文集出版に向け，執筆内容にかんする検討等を行った。
- ・韓国，中国，台湾，ベトナム，英国，ドイツの大学や機関に属する研究者とも連携をとりながら調査を実施し，データ整備を進めた。とくに，ハノイ国家大学外国語大学と 2024 年 1 月に学術交流に関する協定書を締結し，すでに締結済みの天津外国語大学と合わせて 2 校となった。

#### ●言語資源の空間接続

- ・国内言語地図 12 冊のスキャン画像データを作成した。
- ・国内言語地図 12 冊のジオタグ付き画像データを作成した。
- ・語彙資源ポータルへ言語地図データベースのデータを提供した。
- ・物類称呼データ作成作業として全 5 巻の粗入力を行った。

#### ●学習者用辞書資源の構築

- ・科研費「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 ―日本語教育・国語教育への応用―」と共催で「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会（2024 年 2 月 27 日）を開催し，報告 2 件，発表 2 件，招待講演 1 件を行った。
- ・島村直己（編）（2009）『日本語基本語辞典―初級 500 語―（試行版）』国立国語研究所日本語教育基盤情報センターを電子化し，DB 化した。
- ・『分類語彙表』に欠けている多義語のブランチを増補するため，『IPAL』の意味に『分類語彙表』番号の付与を進めた。

#### ●語彙資源ポータル拡張

- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」中の単語を取り上げた記事データの整備を行った。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成として，十巻本和名類聚抄，和英語林集成の整備を行った。

- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続して実施した。

●学習者用「日本語機能語バンク」の構築

- ・「日本語格助詞データベース」はR4年度で執筆・校閲が完成した176見出し(1056語義)の用例に含まれる格助詞に意味役割のアノテーション作業を進めた。また、新たに和語動詞210語を選定し、見出し執筆作業が年度末に完成した(496語義)。
- ・「日本語文型バンク」は、R4年度で執筆した文型342見出し(初中級284見出し、中上級の文型58見出し)の校閲作業を進め、完成させた。また、新たに250文型を選定し、見出し執筆作業を進め、完成させた。

本年度は各サブプロジェクトが連携した研究が十分にできなかった点が反省点であるが、この点は来年度にNINJALシンポジウムを開催し、「言語資源学シリーズ」の書籍の準備を進めることでカバーしたい。

各サブプロジェクトの語彙資源の構築は概ね計画通り順調に進んでいる。特に「学習者の辞書資源使用の実態調査」サブプロジェクトが海外での調査、グローバル化に関する計画で予定を上回っているほか、共同利用・共同研究では前倒しで研究を進め、予定を大きく上回る成果を上げている。「語彙資源統括」や「空間接続」でも共同利用・共同研究については、予定を上回る成果を上げていることから、プロジェクト全体の総合評価としてはAと自己評価した。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：語彙資源統括

サブプロジェクトリーダー：小木曾 智信

### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合		B
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
	3. 地域・社会との連携に関する計画	B
	4. グローバル化に関する計画	B

## I. 計画期間内の概要

### 1. 目的及び特色

国語研のコーパス構築に利用されてきた UniDic の見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合 ID を共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

### 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

#### 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022 (R4) 年度	UniDic-日国見出し語対応表の整備  分類語彙表を中心とした成果発表	<ul style="list-style-type: none"><li>● 語彙資源統合 ID の設計</li><li>● 辞書見出し語データの入手</li><li>● UniDic-日国見出し語対応表の整備</li><li>● UniDic 見出し語の追加</li><li>● 合同シンポジウム（分類語彙表関連）開催</li><li>● 分類語彙表番号データの整備・公開</li><li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施（分類語彙表番号）</li><li>● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開</li><li>● UniDicExplorer の開発</li></ul>
2023 (R5) 年度	サブプロジェクトの語彙資源との連携	<ul style="list-style-type: none"><li>● UniDic 見出し語の追加（方言語彙の整備）</li><li>● UniDic 付加情報の整備</li><li>● 以前の国語研語彙資源の整備</li><li>● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID の活用</li><li>● 合同シンポジウム開催</li><li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施</li><li>● UniDicExplorer の公開</li></ul>

2024 (R6) 年度	サブプロジェクトの語彙資源との連携強化	<ul style="list-style-type: none"> <li>● UniDic 見出し語の追加</li> <li>● UniDic 付加情報の整備</li> <li>● 以前の国語研語彙資源の整備</li> <li>● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID 活用</li> <li>● 合同シンポジウム開催</li> <li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施</li> <li>● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開</li> <li>● 書籍刊行の準備</li> </ul>
2025 (R7) 年度	語彙資源統合 ID の運用	<ul style="list-style-type: none"> <li>● UniDic 見出し語の追加</li> <li>● UniDic 付加情報の整備</li> <li>● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID 活用</li> <li>● 合同シンポジウム開催</li> <li>● UniDicExplorer の改修</li> <li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施</li> <li>● 語彙資源活用に関する書籍の刊行</li> </ul>
		● 暫定評価
2026 (R8) 年度	語彙資源統合 ID の利用促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>● UniDic 見出し語の追加</li> <li>● UniDic 付加情報の整備</li> <li>● サブプロジェクト語彙資源での語彙資源統合 ID 活用</li> <li>● 合同シンポジウム開催</li> <li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施</li> <li>● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開</li> </ul>
2027 (R9) 年度	とりまとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● UniDic 見出し語の追加</li> <li>● UniDic 付加情報の整備</li> <li>● 残る成果物の公開</li> </ul>

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 11,382 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 『日本国語大辞典』から UniDic データベースに見出し語を追加・整備した（15575 語彙素，18406 書字形を追加（2024/03/31 まで））。
- (2) 語彙資源統合 ID の仕様原案を策定し（日国見出し語 ID と UniDic 語彙素 ID 連鎖），複数短単位から成る分類語彙表に応用した
- (3) 複数短単位対応版の分類語彙表を構築して公開した（2024 年 3 月）

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国立国会図書館との連携による UniDic 見出し語データ等の整備を行う予定であったが，先方の都合（大規模言語モデルを前提としたデータ提供条件の整備が必要となったこと）により連携はペンディングとなった。

### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」からUniDicデータベースに見出し語を追加・整備した（布哇日本語教科書から75語彙素・648書字形，天草版金句集から74語彙素，273書字形ほか）。
- (2) 「方言UniDic 科研」で整備中の「関西弁コーパス」から方言の見出し語を追加・整備した（55語彙素，135書字形）。
- (3) 言語資源開発センター・「通時コーパス」プロジェクトと合同で，古文用のUniDic 11種類を整備・公開した（2023年9月）。<https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/>
- (4) 言語資源開発センター・「方言UniDic 科研」と合同で，関西方言用のUniDicを整備し「Web 茶まめ」で公開した（2024年3月）。

### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ）

- (1) 自然言語処理分野の研究者と学際的な研究を実施し，共著の査読付き論文を刊行し（自然言語処理20(2)，2023年6月），言語処理学会で発表を行った（2024年3月）。

### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) ウェブ版UniDicExplorerについては，来年度から始まる現代語コーパス整備事業の一環としてより高度なウェブアプリケーション整備を行うこととして，プロジェクトでの整備を中止した。
- (2) 「Web 茶まめ」を更新し，新しいUniDicに対応し，大納言インポート形式に対応したバージョンを公開した（2024年3月）。
- (3) 古文用のUniDic 11種類，関西方言用のUniDicを公開した。【重出】【オープンデータ】

### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 共同研究員による語彙資源を活用した研究成果を学会発表24件，論文19件発表した。

### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 日本語学会秋季大会のワークショップ「コーパスと語彙資源の連携」で語彙資源の利用法を解説した。（2023年10月）[https://www.jpling.gr.jp/taikai/2023b/2023b\\_program/](https://www.jpling.gr.jp/taikai/2023b/2023b_program/)

### データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 「Web 茶まめ」のアクセス履歴は，7万表示，3.5万セッション，1.5万ユーザー（10月～3月（google analyticsのエラーのため半年間））

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 特別共同利用研究員の受け入れ

- (1) 特別共同利用研究員については今年度は受け入れなし（学振PDを1名外来研究員として受け入れた）。

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大「言語資源学」「言語資源学演習」の授業で語彙資源に関する講義・演習を行った。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員4名を雇用して語彙資源の構築と研究を実施した。

### 大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生1名をプロジェクト非常勤研究員として雇用しプロジェクトに参加させた。

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 若手研究者（共同研究員）の研究発表の費用の支援を行った（日本語学会，言語処理学会）。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 日本語学会秋季大会のワークショップ「コーパスと語彙資源の連携」で語彙資源の利用法を解説した。（2023年10月）【重出】

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

#### 産業界との連携

- (1) 小学館出版局との連携協定のもとで『日本国語大辞典』から UniDic データベースに見出し語を追加・整備した。(15575 語彙素, 18406 書字形を追加 (2024/03/31 まで))【重出】

#### 地域・社会との連携

- (1) 語彙資源の辞書編纂への活用に向け出版社との意見交換を行った。

#### 社会人を対象とするスキルアップの計画等

- (1) 日本語学会でのワークショップとして語彙資源の利用法に関する講習会を行った。

#### 研究成果の社会への還元

- (1) 「Web 茶まめ」を更新し, 新しい UniDic に対応し, 大納言インポート形式に対応したバージョンを公開した (2024 年 3 月)【重出】

### 4. グローバル化に関する計画

#### 英語による研究成果の発信等

- (1) DH2023 (2023 年 7 月, グラーツ) で Web 茶まめに関する研究発表を行った。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：学習者の辞書資源使用の実態調査

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	S
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	A

## I. 計画期間内の概要

### 1. 目的及び特色

#### 【目的】

近年、国内外ともに日本語学習者の数は増え続け、母語や学習環境などの点で多様性を増している。とくに辞書ツールの使用において、学習者の間で紙の辞書や電子辞書の使用は減り、辞書アプリやWEB上の辞書の使用が広まっている。

しかし、辞書ツールのコンテンツには課題が多く残されているのも事実である。たとえば、自分の調べたい意味や、適切な例文にたどり着けなかったり、コロケーションや文体情報など、学習者が必要としている情報が説明されていなかったりする。このため、学習者による辞書ツールの使用実態を把握し、それに沿って辞書ツールのコンテンツを充実させる必要がある。

そこで、本プロジェクトでは、次の二つの調査・研究を実施する。

- ・第一段階：学習者による辞書ツール使用の調査を行い、使用実態とその困難点を明らかにする
- ・第二段階：困難点解決につながる学習者用辞書ツールに必要な基礎語オープンソースを試作し公開する

基礎語オープンソースに収録する語は、日本語初級および中級前半レベルの基礎語を想定している。また、サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」と連携しながら、学習者用の辞書ツール開発につながる基礎語オープンソースの構築を試みたい。

#### 【特色】

本プロジェクトの特色は、以下の3点である。

#### ■特色1：学習者によるオンラインでの辞書ツールの使用実態の解明

学習者の辞書ツール使用に関する従来の研究は、学習者にたいするアンケートによる意識調査や、調査者から示された課題をこなす辞書ツール使用の実験調査が主であり、そもそも学習者がどのような場面・目的で辞書ツールを使用しているのかという実態は明らかにされてこなかった。本プロジェクトは、スマートフォンの画面収録機能を用いてオンラインでの語彙検索行動を観察することで、場面・目的と紐づけた辞書ツールの使用実態と困難点を明らかにできる点に特色がある。

## ■特色2：学習者用辞書ツールに必要な情報の解明

現行の学習者用辞書ツールは、学習者目線で見ると、例文や文体情報などの記載が不足している場合や、記載されていても当該の情報にたどり着けない場合があるなど、多くの課題を抱えている。本プロジェクトは、辞書ツール使用の実態調査の結果から、学習者がどのような場面でどのような情報を必要としているのか、また、情報をどのように掲載すれば必要な情報に確実にたどり着けるのかを明らかにする点に特色がある。

## ■特色3：学習者用辞書ツールに必要な基礎語オープンソースの試作・公開

本プロジェクトは、辞書ツール使用の実態調査から明らかにした学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法をもとに基礎語オープンソースを試作し、それをCCBYで公開する点に特色がある。意味記述や記述項目において質の高いコンテンツが開発され、それが制限なく利用できるようになれば、世界各地の学習者の細かいニーズに合わせてカスタマイズされた辞書ツールが開発され、多様な学習者に使用されることが期待される。なお、辞書ツールに掲載が必要な語数についても、本プロジェクトの実態調査の結果から分析し導きだすことを目指したい。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	2022	2023	2024	2025	2026	2027
実態調査	韓国語話者	中国語話者 越国語話者	DB 公開			
オープンソース				検討	試作	公開
論文集		準備	刊行			
シンポジウム			開催			開催
ワークショップ						開催

### 【2022(R4)年度】

- 韓国語話者の辞書ツール使用の実態調査を行う。韓国国内の大学の JFL 環境で学ぶ初中級学習者 6 名、中上級学習者 6 名、計 12 名を対象に 1 週間の辞書検索行動を記録する。

### 【2023(R5)年度】

- 中国語・ベトナム語話者の辞書ツール使用の実態調査を行う。中国・ベトナム国内の大学の JFL 環境で学ぶ初中級学習者各 6 名、中上級学習者各 6 名、計 24 名を対象に 1 週間の辞書検索行動を記録する。
- 韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査をもとに、研究成果を論文集として刊行する準備に着手する。

### 【2024(R6)年度】

- 韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査のデータベースをインターネット上に公開する。
- 国際シンポジウムを開催し、韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査に基づく研究成果を発表する。
- 韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査に基づく研究成果をまとめ、論文集として刊行する。

### 【2025(R7)年度】

- 第四期前半における辞書ツール使用の実態調査から明らかにした、学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法を検討する。

### 【2026(R8)年度】

- 2025 年度に検討した、学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法をもとに、基礎語オープンソースを試作する。

## 【2027(R9)年度】

- ・2026年度に試作した基礎語オープンソースを改良し、インターネット上に公開する。
- ・基礎語オープンソースの内容を紹介する国際シンポジウムを開催し、研究成果を社会へ発信する。
- ・基礎語オープンソース活用のためのワークショップを開催し、学習者用辞書ツールの開発に役立てる。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 6,336千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 予定を前倒して、2022年度末に、中国（天津外国語大学、澳門大学）48名、台湾（政治大学）11名、韓国（ソウル大学、高麗大学）22名、ベトナム（ハノイ国家大学外国語大学）10名、英国（2大学…国際交流基金経由）3名、ドイツ3名（トリア大学）、日本（岡山大学）13名の合計110名の学生を対象に1週間の辞書検索行動調査を完了し、データを収集した。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 実態調査で収集したデータを整理し、外国語で記入された箇所については適宜、翻訳した。
- (2) 必要なタグ付け（学習者の日本語レベル、検索で入力した言語など）を行い、データベースを整備した。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 韓国、中国、台湾、ベトナム、英国、ドイツ、および国内の大学と連携してデータの収集、精査を行った。
- (2) 海外の共同研究員を中心とする分科会を本年度7回（6月（1回）、7月（2回）、8月（2回）、9月（1回）、10月（1回））に行い、論文集出版に向け、執筆内容にかんする検討等を行った。
- (3) 国内の共同研究員を中心とする全体会を本年度1回（8月）に行い、論文集出版に向け、スケジュール調整、執筆テーマ確認等を行った。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」（リーダー：柏野和佳子）と会議（8月）を設け、調査および研究の進捗について情報を共有しながら、活動した。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 第13回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（2023年11月19日）にて、「スマホ「辞書」による語彙検索行動の実態と問題点—マカオの初級日本語学習者を事例に—」を口頭発表。  
[https://www.japanese-edu.org.hk/PDF/Abstract\\_final.pdf](https://www.japanese-edu.org.hk/PDF/Abstract_final.pdf)
- (2) 第64回語彙・辞書研究会（2023年11月18日）にて、「日本語学習者によるオンライン辞書活用の可能性」を講演。
- (3) 専門日本語教育学会大第26回研究討論会（2024年3月2日）での口頭発表に採択され、「日本語学習者はどのような語を検索しているのか—語彙検索行動データの語種に着目して—」を発表。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 『社会言語科学』（2023年9月 Vol. 26 No. 1）に論文「世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」を発表  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jajls/26/1/26\\_5/\\_article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jajls/26/1/26_5/_article/-char/ja)
- (2) 次年度の刊行に向けて研究成果を論文集として刊行する準備を進めた。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習において、本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した研究発表を行った。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 本プロジェクトの研究推進のために、2名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習等の機会を利用して、本プロジェクトに参画する大学院生を募り、1名の大学院生が論文の執筆準備を進めた。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

- (1) 韓国，中国，台湾，ベトナム，英国，ドイツの大学や機関に所属する研究者を共同研究員とし、連携をはかった。

### 海外の大学との連携等

- (1) 韓国，中国，台湾，ベトナム，英国，ドイツの大学や機関に属する研究者とも連携をとりながら調査を実施し、データ整備を進めた。また、学会発表や論文集の刊行のための準備を進めた。とくに、ハノイ国家大学外国語大学と2024年1月に学术交流に関する協定書を締結し、すでに締結済みの天津外国語大学と合わせて2校となった。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創  
 サブプロジェクト名：言語資源の空間接続  
 サブプロジェクトリーダー：大西 拓一郎

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

言語地図・古典籍・方言古辞書に対し空間情報を付与することで、言語情報と地理空間の接続を目的とする。

言語地図は言語情報の空間上の位置を視覚的に表示するが、それ自体は画像であり、空間データを持つものではない。古典籍には多くの地名が含まれるが、コーパス化されてもそこに空間データは含まれない。江戸時代の全国方言辞典『物類称呼』が提示する個々の方言形が使われる地名も同様である。本研究課題は、これらに空間情報を付与して、広く提供し、特に言語地理学の発展に寄与することをねらうものである。

1. 言語地図データベース

国立国語研究所研究図書室は、国内で作成された言語地図のほとんどすべてを所収している。そこには劣化の進む資料も少なからず含まれ、電子化が急務である。加えて、国外の言語地図集も多く収蔵している。これらを言語地図データベースとして整理し、公開する。

a. 国内言語地図

以下をデータベース化し、公開する。

- (1) 書誌目録・地図項目・語形目録のデータベース化・公開
- (2) スキャン地図画像：全画像データ化・許諾データの公開
- (3) ジオタグ付き地図画像：許諾データの公開
- (4) ポイント情報（地点-語形対応）：公開許諾データのうち対応可能なデータに付与し公開

b. 国外言語地図

- ・書誌目録・地図項目等をデータベース化・公開

2. 古典籍地名データベース

- ・空間情報付き地名語彙素データ・万葉集東歌出身地データの作成

NIHU（人間文化研究機構）による歴史地名データ（吉田東伍『大日本地名辞書』を中心にして、地名に経度緯度を付与）と古典籍 CHJ（通時コーパス）の地名語彙素・万葉集東歌防人歌出身地を結びつけることができるようにする。

3. 方言古辞書（物類称呼）データベース

- ・物類称呼が提示する語形使用地域（地名）への空間情報付与

江戸時代の方言集『物類称呼』に提示された各地方言の語形と場所の対応表を作成し、場所を表す地名は歴史地名データと接続できるようにする。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022 (R4) 年度 2022. 4 ～2023. 3	データベース設計 データ作成開始	データベースの設計を行う。 データ作成に着手する。 研究会を開催し、意見交換を行う。
2023 (R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	国内言語地図 DB の公開開始	データ構築を継続し、国内言語地図データ公開を開始する。 データベースについて学会で発表する。 研究会を開催し、活用方法を発表する。
2024 (R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	国内言語地図 DB の公開継続	データ構築・国内言語地図データ公開を継続する。 データベースについて、国際学会で発表する。 研究会を開催し、活用成果を発表する。
2025 (R7) 年度 (前半) 2025. 4 ～2026. 3	国内言語地図 DB の公開継続 国外言語地図 DB β 版公開 古典籍地名 DB β 版公開 古辞書方言 DB β 版公開	データ構築を継続し、国内言語地図データの公開継続、国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB のβ 版公開を行う。 データベースについてのワークショップを開催する。 研究会を開催し、研究成果を発表する。
	暫定評価	
2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	国内言語地図 DB の公開継続 国外言語地図 DB 修正公開 古典籍地名 DB 修正公開 古辞書方言 DB 修正公開	データ構築を継続し、国内言語地図データの公開継続、国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB の修正を行う。 研究会を開催し、研究成果を発表する。
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	国内言語地図 DB 完成・公開 国外言語地図 DB 完成・公開 古典籍地名 DB 完成・公開 古辞書方言 DB 完成・公開	データ修正を継続し、国内言語地図 DB・国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB を完成させ、公開する。 研究会を開催し、研究成果をとりまとめる。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 2,782 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 国内言語地図 12 冊のスキヤン画像データを作成した。
- (2) 国内言語地図 12 冊のジオタグ付き画像データを作成した。
- (3) 画像公開地図の見出しデータを作成・更新した。
- (4) 古典籍地名データを 100 件追加作成した。
- (5) 物類称呼データ作成：全 5 巻の粗入力を行った。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 語彙資源ポータルへ言語地図データベースのデータを提供した。

<https://goshidb.ninjal.ac.jp/goshidb/>

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 国内言語地図 12 冊のスキヤン画像データを公開した。

福嶋秩子『出雲飯石郡中央部言語地図』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/210/210\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/210/210_index.html)

福嶋秩子『三刀屋町の方言』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/212/212\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/212/212_index.html)

福嶋秩子『吉田村の方言』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/213/213\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/213/213_index.html)

福嶋秩子『佐田町の方言』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/214/214\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/214/214_index.html)

大橋勝男『関東地方方言事象分布地図 第1巻／音声篇』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/132/132\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/132/132_index.html)

大橋勝男『関東地方方言事象分布地図 第2巻／表現法篇』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/148/148\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/148/148_index.html)

大橋勝男『関東地方方言事象分布地図 第3巻／語彙篇』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/162/162\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/162/162_index.html)

加藤和夫『南川・北川流域言語地図集』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/169/169\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/169/169_index.html)

外山正恭『東頸言語地図集』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/231/231\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/231/231_index.html)

柴田武『人口急増地帯としての埼玉県における言語接触とその問題点に関する総合的研究』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/240/240\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/240/240_index.html)

熊取町教育委員会『熊取町の方言』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/246/246\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/246/246_index.html)

大阪府南河内郡千早赤阪村教育委員会『大阪府南河内郡千早赤阪村言語地図』

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/400/400\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/400/400_index.html)

- (2) 国内言語地図 12 冊のジオタグ付き画像データを公開した。

対象地図集と URL は (1) に同じ。

- (3) 画像公開地図の見出しデータを更新して、公開した。

言語地図データベース

[https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb\\_index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html)

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 後期に言語地理学に関する2時限分の授業を担当した。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 学振PDがプロジェクトに参加した。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 月例研究会で1名、公開研究発表会で1名、若手研究者が発表した。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20240222a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240222a/)

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 公開研究発表会の参加旅費を支援した。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 月例研究会、非常勤集中講義、科研費研究会で、若手研究者向けにGISの活用方法を教授した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

特になし

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：学習者辞書用語彙資源の構築

サブプロジェクトリーダー：柏野 和佳子

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

本プロジェクトは、統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」(小木曾)のもと、サブプロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査」(石黒)と緊密に連携し、活動する。また、基幹型プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」(小磯)とは、話し言葉のレジスター分析において連携する。さらに、基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」(浅原)とは、分類語彙表データの活用において連携する。

#### 【目的】

学習者用辞書構築に必要な語彙データベースを構築し公開することを目的とする。国語教育、日本語教育において、日本国内はもちろん、海外の学習者にも利用してもらえるものを目指す。

国立国語研究所には『分類語彙表』というデータベースがあるが、これを学習者用の辞書資源として活用するためには情報を付加し再構築する必要がある。①学習目的に応じた学習レベル別の情報の付与、②話し言葉的な語であるか、書き言葉的な語であるかといった位相情報の付与に順次取り組む計画である。

さらに、語釈や用例の付与も必要である。ただちに利用できる語釈や用例の資源として、オープンソースである『計算機用日本語基本辞書 IPAL』(和語動詞 861 語、和語形容詞 136 語、名詞 1,081 語)がある。その情報を活用するために『IPAL』を整備したのち、初級レベルの語の語釈・用例付与に取り組む。

本プロジェクトでは、主に次の3つの作成・公開を目標にする。

- (1) 学習目的に応じた学習レベル別の語彙リスト
- (2) 『分類語彙表』の語に、学習レベル別・目的別の情報や位相情報・語釈・用例を付与したデータベース
- (3) 『計算機用日本語基本辞書 IPAL』をもとにした辞書情報のデータベース

具体的には、次のとおり計画する。

- (1) 学習目的に応じた学習レベル別の語彙リストの設計と作成
  - 必要な学習のレベル別・目的別の語彙リストを設計する。
  - ◇ 学習レベルと語数は、初級(1,000～2,000 語)・中級(5,000～10,000 語)・中上級(10,000～30,000 語)・上級(50,000～100,000 語)の4段階を想定するが、必要があれば変更する。
  - ◇ 目的別として、国語教育、日本語教育、それぞれにおける、読解、作文を目的とする場合や、学校生活、日常生活、国内、国外、といった状況別などを検討する。
  - ◇ 「国語教育・日本語教育における読解・作文のための初級語彙リスト」優先的に作成する予定。
  - ◇ そのほか、優先度の高い目的のものからレベル別の語彙リストを作成する。
  - 『日本語教育のための基本語彙調査』[国立国語研究所 1984]の「基本六千語」「基本二千語」などの

- 語彙調査結果や、コーパスの頻度表を参考に、学習レベル別・目的別の語彙を選定する。
- (2) 『分類語彙表』に、学習に必要な語の増補および、学習レベルや位相情報・語釈・用例の付与
- 『分類語彙表』にない、学習に必要な語（多義語の場合はブランチ）を増補する。
  - (1)で優先して作成した語彙リストに基づく学習レベル別情報は、今期中に全語（多義語の場合は全ブランチ）に付与予定。
  - 今期中に初級(1,000～2,000語)への位相情報・語釈・用例の付与を目指す。
- (3) 『計算機用日本語基本辞書 IPAL』の情報のデータベース化
- 2022年度の1年間に実施する。

### 【特色】

#### ■特色1：学習目的に応じた学習レベル別語彙リストへの高いニーズにこたえる

国語教育、日本語教育において、多義語の意味（ブランチ）レベルまで考慮した、学習レベル別・目的別の語彙リストが所望されている。これらを本研究の背景と考え、順次こたえていくよう、研究を進めていく。

#### ■特色2：研究利用・公開に支障がないDBを語彙資源として再構築し公開する

・国語研所有の『分類語彙表』及び、オープンソースの『IPAL』をベースに作成することにより、研究利用・公開に支障がない。再構築したDBはCCBY-NC（表示-非営利）にて公開を予定。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

### 2022年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・語彙リスト設計</li> <li>・語彙リスト作成</li> <li>・『分類語彙表』アノテーション</li> <li>・データ公開</li> <li>・若手育成・海外</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計開始</li> <li>・学習レベル：初級語選定開始</li> <li>・学習レベル：初級情報付与開始</li> <li>・位相：付与すべき情報の検討開始</li> <li>・『計算機用日本語基本辞書 IPAL』DB公開</li> <li>・講習会：1回開催</li> </ul>
---	--

### 2023年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・語彙リスト設計</li> <li>・語彙リスト作成</li> <li>・『分類語彙表』アノテーション</li> <li>・データ公開</li> <li>・若手育成・海外</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計継続</li> <li>・学習レベル：初級語選定継続，中級語選定開始</li> <li>・学習レベル：初級語に情報付与継続，中級語に情報付与開始</li> <li>・位相：付与すべき情報の検討継続</li> <li>・初級語彙リスト公開</li> <li>・講習会：1回開催</li> </ul>
---	--

## 2024 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・語彙リスト作成</li> <li>・『分類語彙表』アノテーション</li> <li>・データ公開</li> <li>・報告書刊行</li> <li>・成果発表</li> <li>・若手育成・海外</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習レベル：中級語選定継続</li> <li>・学習レベル：中級語に情報付与継続</li> <li>・位相：付与すべき情報の検討継続</li> <li>・語釈・用例：初級語に付与開始</li> <li>・中級語彙リスト公開</li> <li>・語彙リスト設計の報告書：1冊</li> <li>・国際シンポジウム：1回開催</li> <li>・講習会：1回開催</li> </ul>
--	--

## 2025 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・語彙リスト作成</li> <li>・『分類語彙表』アノテーション</li> <li>・データ公開</li> <li>・若手育成・海外</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習レベル：中上級以上語選定開始</li> <li>・学習レベル：中上級以上語に情報付与開始</li> <li>・位相：初級語に付与開始</li> <li>・語釈・用例：初級語に付与開始</li> <li>・別分類の中級語彙リスト公開</li> <li>・初級語位相情報公開</li> <li>・講習会：1回開催</li> </ul>
---	---

## 2026 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・語彙リスト作成</li> <li>・『分類語彙表』アノテーション</li> <li>・データ公開</li> <li>・若手育成・海外</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習レベル：中上級以上語選定継続</li> <li>・学習レベル：中上級以上語に情報付与継続</li> <li>・位相：中級語に付与開始</li> <li>・語釈・用例：初級語に付与継続</li> <li>・中上級以上語彙リスト公開</li> <li>・講習会：1回開催</li> </ul>
---	--

## 2027 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・『分類語彙表』アノテーション</li> <li>・データ公開</li> <li>・論文集刊行</li> <li>・成果発表</li> <li>・若手育成・海外</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・位相：中級語に付与継続</li> <li>・語釈・用例：初級語に付与継続</li> <li>・中級語の位相情報公開</li> <li>・初級語の語釈・用例公開</li> <li>・研究論文集：1冊</li> <li>・国際シンポジウム：1回開催</li> <li>・講習会：1回開催</li> </ul>
--	--

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 5,883千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計するために、[科研費基盤研究 (A)23H00072] 文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 ―日本語教育・国語教育への応用―（リーダー：松下達彦）と連携し、「初級から日常生活，就労・ビジネス，学術などの目的に応じた語彙モジュールにすべきである」という議論を進め，共著論文（筆頭：松下達彦）を日本語教育学会誌に投稿した。

- (2) 学習レベル初級語の選定を継続し中級語の選定を進めるために、参考資料となる島村直己（編）（2009）『日本語基本語辞典—初級 500 語—（試行版）』国立国語研究所日本語教育基盤情報センターを電子化し、DB化した。また、従来の教育用の語彙表に十分に立項されていないカタカナ語を選定するために、小学生の作文を収集し、使用されているカタカナ語のリストの作成を開始し、進めている。
- (3) 『分類語彙表』に欠けている多義語のブランチを増補するため、『IPAL』の意味に『分類語彙表』番号の付与を進めている。
- (4) 日本語教育、国語教育での利用を想定し、付与すべき位相情報の検討を継続した。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（小木曾）やサブプロジェクト「日本語学習者の辞書資源使用の実態調査」（石黒）の会議に参加し、連携を図った。
- (2) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究」（小磯）と、言語資源開発センターとの共催で講習会を1回、チュートリアルを1回、開催した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。
- (3) 基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（浅原）と作成された『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』短単位語彙表（分類語彙表番号つき）（BCCWJ-WSD-frequency version 2024.01）』の提供を公開前より受け、データ確認に協力した。
- (4) 科研費 基盤研究（A）23H00072「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 —日本語教育・国語教育への応用—」と共催で、「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会（2024年2月27日）を開催した。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 日本語教育・国語教育の研究者へ成果データを提供した。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 島村直己（編）（2009）『日本語基本語辞典—初級 500 語—（試行版）』国立国語研究所日本語教育基盤情報センターをDB化まで終えた。公開は次年度の予定。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 国語研のWSでのポスター発表2件、国語研の共同研究発表会での報告2件、発表2件、言語処理学会のWSでの口頭発表1件を行った。また、『国立国語研究所論集』に論文2本を掲載した。

#### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究」（小磯）と、言語資源開発センターとの共催で講習会を11月5日に、チュートリアルを12月2日に開催した。

オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】 | 国立国語研究所 (ninjal.ac.jp)

登録109名（うち、国外20、学生42）。

NINJAL チュートリアル 『日本語日常会話コーパス』の活用 — 『中納言』の使い方 — | 国立国語研究所

登録139名（うち、国外31、学生55）。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大において「言語研究基礎論」と「言語資源学」を担当した。【若手支援】
- (2) 一橋大学においても国語研で構築した言語資源を活用する演習を行った。また2023年度は修士論文2本の主査を担当した。【若手支援】

#### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生3名をプロジェクト非常勤研究員として雇用し、プロジェクトに迎え、学習者に必要な語の収集、検討に参加する機会を与えた。【若手支援】

#### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 『国立国語研究所論集』に若手研究者2名の論文、2本を掲載した。【若手支援】
- (2) 科研費 基盤研究 (A) 23H00072「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 ―日本語教育・国語教育への応用―」と共催の「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会（2024年2月27日）において、学生2名による研究報告2件と、学生4名を含む研究発表1件の機会を提供した。【若手支援】

#### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究（小磯）と、言語資源開発センターとの共催で講習会を11月5日に、チュートリアルを12月2日に開催した。【若手支援】

オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】 | 国立国語研究所 (ninjal.ac.jp)

登録109名（うち、国外20、学生42）。

NINJAL チュートリアル 『日本語日常会話コーパス』の活用 ―『中納言』の使い方― | 国立国語研究所  
登録139名（うち、国外31、学生55）。

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

### 4. グローバル化に関する計画

#### 海外の研究者の受入

- (1) 海外の研究者を共同研究員として加え、海外の動向も踏まえながら研究を実施したとともに、講習会、チュートリアル、共同研究発表会をオンラインで開催し、海外からも延べ62名の参加があった。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：語彙資源ポータル拡張

サブプロジェクトリーダー：高田 智和

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	—

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

コーパス、辞書類（主に古辞書）、言語地図、言語記事は、それぞれ個別の目的で研究利用され、データベース等の言語資源がそれぞれ構築されている。単語や語彙の歴史を解明する上で、これらは有益な資料であるが、横断的に扱う環境は未だ整っていない。そこで、本プロジェクトでは、「日本語歴史コーパス」等から得られる語彙素統計情報、辞書類のデータベース、言語地図データベース、言語記事データベース、語彙研究文献情報を集積し、日本語語彙の歴史を一望できるような「語彙資源ポータル」を整備拡張する。これによって、単語使用の変遷、語形バリエーションの消長、意味拡張を記述し、その変容の原理を探究する語彙研究基盤が整う。また、研究の入口となる情報が整備され、言葉に関心を持つ多くの人々を日本語史研究に引き込み、研究の活性化につなげることも期待できる。

本プロジェクトでは、計画期間内において、以下の4点についてデータ整備を行い、「語彙資源ポータル」を拡張する。

- (1) コーパス統計情報： 第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」の室町時代編Ⅱキリシタン資料、江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃などの語彙素（短単位）統計情報を「語彙資源ポータル」に収録する。
- (2) 辞書類見出し情報： 近代以前の辞書類から代表的なものを10点程度選定し、見出し情報（見出し語、所在、UniDic 語彙素 ID など）をデータベース化する。見出しデータは「語誌情報ポータル」に収録するだけでなく、オープンデータ（テキスト形式）としての公開も検討する。なお、辞書類見出し情報の整備は、国文学研究資料館が主導する人間文化研究機構広領域連携機関型研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」との連携により実施する。
- (3) 言語地図目録情報： 「言語地図データベース」（「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」のサブプロジェクト「言語資源の空間接続」において作成）の収録地図名に対してUniDic 語彙素 ID 付与を行い、「語誌情報ポータル」に収録する。
- (4) 言語関連記事情報： 1949～2009年を対象とする「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」の記事名のうち、単語を取り上げた記事に対してUniDic 語彙素 ID 付与を行い、「語誌情報ポータル」に収録する。また、大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ整備を行う。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

### 2022 年度

- ・第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」語彙素統計情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から単語を取り上げた記事の抽出を行う。
- ・見出し情報を整備する近代以前の辞書類の選定を行い、データ作成に着手する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成に着手する。

### 2023 年度

- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」中の単語を取り上げた記事についての情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・「言語地図データベース」による言語地図目録情報の整備を行う。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

### 2024 年度

- ・言語地図目録情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

### 2025 年度

- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続するとともに、2024年度までに整備したデータを「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

### 2026 年度

- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。

### 2027 年度

- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続するとともに、2027年度までに整備したデータを「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・シンポジウムを開催し、研究成果を取りまとめる。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 4,320 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」中の単語を取り上げた記事データの整備を行った。
- (2) 「言語地図データベース」による言語地図目録情報の整備を行った。
- (3) 近代以前の辞書類の見出し情報データ作成として、十卷本和名類聚抄、和英語林集成の整備を行った。
- (4) 大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続して実施した。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 人間文化研究機構広領域連携機関型研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」との連携により、古辞書類の見出し語データ等の作成を行った。

## 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター等との共催により「東洋学へのコンピュータ利用第37回研究セミナー」を開催した。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20240119b/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240119b/)

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大において「日本語史」を担当した。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生1名をプロジェクト非常勤研究員として新たに雇用した。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター等との共催により「東洋学へのコンピュータ利用第37回研究セミナー」を開催し、若手研究者の発表の機会を提供した（筆頭発表1件、共同発表1件）。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

特になし

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創  
 サブプロジェクト名：学習者用「日本語機能語バンク」の構築  
 サブプロジェクトリーダー：プラシヤント・パルデシ

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

日本語は、英語や中国語などとは異なった語彙的特徴をもつ言語である。例えば、日本語には豊富な自動詞と他動詞の対があり、また、他動詞（二項述語）において、多様な格の枠組み（「が～を」「が～が」「が～に」「に～が」など）が存在する。また、時間、場所、道具などを表す付加詞は格助詞を伴い、その多くは多義的であることも日本語の語彙項目の大きな特徴となっている。このような日本語の語彙的な特徴を海外で自由に利用できる辞書が存在せず、日本語教育や日本語の学習における大きな課題となっている。

語彙の学習と並ぶ日本語学習における重要項目として、いわゆる文型（機能表現）の学習が挙げられる（例：「～なければならぬ」「～なくてはならない」「～する時・～した時」「～する前に」「～した後」「～だけあって～」「～だけに～」など）。文型（機能表現）は実質的な意味の希薄な語からなる表現がほとんどで、それぞれの表現を構成する個々の単語の意味を辞書で調べ、組み合わせせてみても、その表現全体がどのような意味や機能を持ち、どのような文脈で使用されるかを理解することはできない。日本国内で日本語を学ぶ者であれば、文型の意味や使い方を調べるための辞書や参考書が手に入りやすいが、残念ながら、これらの参考資料は海外で入手しにくく、世界の多くの日本語学習者の手に届いていないのが現状である。また、多くが紙媒体であるため、様々な文型を含む豊富な用例を耳で聞いて、アクセントやイントネーションを学習するには使えない。国外のみならず国内の学習者にとってもウェブ上で手軽に使い、音声を確認できる辞書の開発は待たれるところである。

日本語学習教材が手に入りやすく、日本語母語話者の教師が少ない海外の教育現場では、以上のような事情から日本語の自他動詞、格助詞や文型の教育・学習は大きな困難を抱えている。この課題を解決すべく、本研究は、日本語の自他動詞、格助詞や文型の教育・学習に役立つオンライン辞書「日本語機能語バンク」を開発し、研究所のホームページを通じて無償公開し、国内外の日本語教育と日本語教育に資する日本語研究に貢献することを目標とする。

上記の最終目標を達成するために、本プロジェクトでは、「日本語機能語バンク」の傘下で、以下の二つのオンライン版リソースを開発・拡充し、研究所のホームページを通じて無償で公開する。

(1) 「日本語格助詞データベース」：和語動詞約 1200 語の必須項および付加詞を含む用例（音声付用例のみ）、用例に含む格成分に意味役割を格納したデータを構築し、静的コンテンツとして公開する。

(2) 「日本語文型バンク」 (<https://bunkeibank.ninjal.ac.jp/>)：第3期において文型バンクのプロトタイプとして約 200 件の文型を意味、接続情報、音声付用例とともに公開している。この 200 件を再検討・改良を行い、第4期で新たに約 1000 件を追加し、最終的には計約 1200 件規模の文型バンクを公開する。

本研究で提案されているような大規模の電子版のリソースを開発するためには、多くの日本語教師・研究者の力を結集する必要がある。また、基礎データを作成するためには、大量コーパスを使用できる高度なスキルが必要となる。日本語学、コーパス言語学、日本語教育の知識や電子データの構築に必要な多様なスキルを持つ多くの国内外の研究者の協力を得て初めてこの規模のリソースの開発・公開が可能となる。このようなリソースの開発・公開はオープンサイエンスの方針に沿うものであり、また、大学共同利用機関でしかできないものである。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

6年間のロードマップは以下の通りである。

**1年目（2022年度）**：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式の決定

- 1 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 2 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 3 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 4 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表
- 5 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

**2年目（2023年度）**：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 6 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 7 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 8 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 9 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表
- 10 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

**3年目（2024年度）**：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 11 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 12 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 13 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 14 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。
- 15 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開
- 16 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

**4年目（2025年度）**：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 17 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 18 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 19 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 20 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。
- 21 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開
- 22 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

5年目（2026年度）：見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式再検討，必要に応じて修正，それに伴うデータの修正

23 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて，見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式などを検討し，決定する。

24 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲

25 文型（約200件）の見出し作成・校閲

26 プロジェクト主催の研究集会，学会などで研究成果の発表，学術誌への論文の投稿を行う。

27 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

28 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

6年目（2027年度）：

29 見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式再検討，必要に応じて修正，それに伴うデータの修正

30 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて，見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式などを検討し，決定する。

31 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲

32 文型（約200件）の見出し作成・校閲

33 プロジェクト主催の研究集会，学会などで研究成果の発表，学術誌への論文の投稿を行う。

34 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

35 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 9,955千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

##### (1) 「日本語格助詞データベース」

① R4年度で執筆・校閲が完成した176見出し(1056語義)の用例に含まれる格助詞に意味役割のアノテーションの進め方について打ち合わせを行い(2023年5月22日@神戸大学)，アノテーション作業を進めた。その過程で見出しの執筆上の課題や意味役割アノテーション作業上の課題が見えてきた。これらの課題の解決に向けて見出し執筆班と意味役割アノテーション班の合同打ち合わせを行い

(2023年10月8日@神戸大学)，見出し執筆方針およびアノテーション方式を改良した。この改良に伴い，前年度完成した176見出しおよびそのアノテーションを見直すことになった。この見直し作業を，2024年9月末までに完成させる予定。

②新たに和語動詞210語を選定し，見出し執筆作業が年度末に完成した(496語義)。R4年度で執筆・校閲が完成した176見出し(1056語義)およびR5年度で執筆・校閲が完成した210見出し(496語義)，合計386見出し(1552語義)の意味役割アノテーション作業をR6年度中に完成させる予定。

③上記①の改良を受けて，完成したデータの公開作業を次年度に持ち越すことになった。

##### (2) 「日本語文型バンク」

①R4年度で執筆した文型342見出し(初・中級284見出し，中・上級の文型58見出し)の校閲作業を進め，完成させた。校閲作業を受けての修正・データの確定・公開作業をR6年度に持ち越す。

②新たに250文型を選定し，見出し執筆作業を進め，完成させた。校閲作業，また，校閲を受けてのデータ修正・確定・公開作業を次年度に持ち越す。また，第2の執筆班を新たに立ち上げ，100文型を選定し，見出し執筆作業を進め，96件を完成させた。今年度は合計346見出しの執筆を完成させることができた。

③上記①および②の校閲作業・修正作業を R6 年度に持ち越す。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 研究成果を以下の研究発表会で発表した。

マダドナーめぐみ, 関かおる, 尾沼玄也, 砂川有里子 (2023) 「てにをはプロジェクト – 語義の立て方並びに例文作成についての考察-」 @第 36 回日本語教育連絡会議ヴィータウタス・マグヌス大学 (リトアニア) (2023 年 8 月 24 日)

(2) 本プロジェクト関連の他の研究を 4 件 (国内 2 件, 海外 2 件) 発表した。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 総研大の授業を担当し, 言語類型論の事例研究を紹介した。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト非常勤研究員として若手の研究者を 1 名雇用し, 意味役割アノテーション方式の決定, 改良作業およびアノテーション作業に参画させた。

### 大学院生, 学振 PD 等のプロジェクトへの参加

(1) 大学院生をプロジェクトへ参加させ, アノテーション作業の機会を与えた。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

特になし

## 5. その他

(1) インドでのフィールドワークの際以下の通り NINJAL チュートリアル (6 件) を企画・実施した。

・NINJAL チュートリアル(2023 年 8 月 7 日): 日本語教師・日本語学習者向け (Japanese section, Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University (SPPU), Pune, India と共催)

“Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages”

・NINJAL チュートリアル(2023 年 8 月 8 日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Japanese language, Tilak Maharashtra Vidyapeeth, Pune, India と共催)

“Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages”

・NINJAL チュートリアル(2023 年 8 月 12 日): 言語学関係者向け (Dept. of Linguistics, Deccan College (Deemed to be University), Pune, India と共催)

“Development of Japanese treebank: NPCMJ (NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese).”

・NINJAL チュートリアル (2024 年 2 月 22 日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University (SPPU), Pune, Maharashtra State, India.)

“Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language.”

“When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence. ”

- “How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”?: The types and systems of temperature vocabulary.”
- NINJAL チュートリアル (2024年2月23日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Japanese at Tilak Maharashtra Vidyapeeth (TMV), Pune, Maharashtra State, India.)  
“Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language.”  
“When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence. ”  
“How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”?: The types and systems of temperature vocabulary.”
  - NINJAL チュートリアル(2024年3月18日): 言語学関係者向け (Dept. of Linguistics, Deccan College (Deemed to be University), Pune, India と共催)  
“Classifier and Gender marking in Konkani: A nominalization perspective.”
- (2) 国際交流基金ニューデリー事務所と連携して、インドにおける日本語教育史に関する論文の編集作業を進めた。

# 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」 評価報告

## 令和5年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

本プロジェクトは、下記のサブプロジェクトと、これらをまとめあげる統括サブプロジェクトから構成される。

- ・学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・言語資源の空間接続
- ・学習者用辞書資源の構築
- ・語彙資源ポータル拡張
- ・学習者用「日本語機能語バンク」の構築

各サブプロジェクトの語彙資源の構築は概ね計画通り順調に進んでいる。また統括サブプロジェクトに関して日本語学会秋季大会のワークショップ「コーパスと語彙資源の連携」にてシンポジウム・講習会を実施し、プロジェクトで構築する語彙資源について利用法とともに発信したことも評価できる。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

「語彙資源統括」として、『日本国語大辞典』とUniDicの対応付けを行い、UniDicデータベースに見出し語として15575語彙素、18406書字形に及ぶ追加登録を行ったことは評価できる。また、言語資源の空間接続として進められた言語地図のデータ作成や、複数短単位対応版の分類語彙表の構築・公開、また「Web茶まめ」を更新し新しいUniDicに対応したバージョンを公開するなど、共同利用・共同研究をより一層充実させており、予定を上回る成果を上げた。

#### 2. 教育・人材育成について

サブプロジェクトの「学習者用辞書資源の構築」と「学習者用「日本語機能語バンク」の構築」では、日本語教育に寄与できるようなデータベースの構築を着実に進めており、公開により学習者が利用可能となることが期待される。また既存のデータベースの利用法について、セミナーなどを定期的に行い、大学院生レベルの学生に集中的にスキルを身につけさせる機会を提供していることも評価できる。より多くの利用者に活用してもらえよう、データベースを利用した具体的な研究例・分析例についてサンプルを添えて説明する機会などがあると良い。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

専門性の高い各サブプロジェクトは、いかに社会連携・社会貢献できるのかが課題である。話題のChatGPTが既存の情報を集める能力を備えるように、日本の民間の研究およびデータ、他の言語資源情報（たとえば国会図書館デジタルコレクション）を吸収可能な装置（プラットフォーム）の構築も、統合という意味で検討する必要がある。

#### 4. 国際連携・国際発信について

国際連携・国際発信については、「学習者の辞書資源使用の実態調査」サブプロジェクトにおいて、

海外調査の予定を前倒してデータを収集したことに加え、海外の共同研究員を中心とする分科会を7回開催したり、韓国、中国、台湾、ベトナム、英国、ドイツの大学や機関に属する研究者とも連携をとりながら調査を実施したりするなど、国際連携の枠組みの中でデータ整備を進めたことが評価でき、グローバル化に関する計画で予定を上回って実施したと認められる。

## 5. その他特記事項

本研究プロジェクトの目的に達するために、今後も引き続き各サブプロジェクトが連携し研究を確実に推し進めてほしい。

# 「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検評価報告

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

プロジェクトリーダー：浅原 正幸

## 令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. プロジェクト全体の6年間の計画

認知言語学や生成文法などの理論的研究や類型論的研究においては、伝統的に話者の内省や直観に基づく個別研究が方法論的に主流だったが、近年その方法論の見直しが各理論、各分野で急速に進んでいる。具体的には、理論的考察にコーパス資料、実験データ、フィールド調査などを多角的に組み合わせて言語研究の中心的課題に取り組む、新たな実証的方法論を模索する動きが世界的に加速化している。本プロジェクトでは、音韻、意味、形態・統語という言語研究の中心的三分野における理論的・類型論的な研究の核心的課題に取り組み、このような世界的潮流における最先端の研究を参照しつつ、それを先導する研究を進める。具体的には、言語学と隣接分野、あるいは言語学の複数の下位分野の知見を融合する形で研究を進めるサブプロジェクト4件と、自然言語処理の知見を活かしてそのような研究に資する言語資源を開発するプロジェクト1件を、それぞれの独自性を保ちつつも相互に連携させて展開することで、国内外の言語研究の最前線に貢献することを目指す。

個別の課題に取り組む4つのプロジェクトは、イントネーションの構造の言語間・方言間変異（イントネーションP）、体言化・名詞修飾構造の形態・統語・意味的類型（体言化P）、状態変化述語の意味構造（述語の意味論P）、統語変換操作の理論言語学における位置づけ（計算言語学P）という、音韻、意味、形態・統語のそれぞれの分野における鍵となる概念の定義そのものを再考察することを目的としている。この目的のために、個々のプロジェクトは、解明の対象である概念に迫るために最適な分野横断的手法を複数組み合わせた多角的なアプローチを採用することで研究を進める。具体的には、イントネーションPでは、コーパス構築とフィールド調査、体言化Pではフィールド調査と文献資料調査、述語の意味文法Pではビデオ実験とコーパス調査、計算言語学Pではコーパス構築と計算論的モデリングを中心的な手法として採用する。これらの具体的な課題に取り組むサブプロジェクトと連動し、それを後方支援するアノテーションPでは、既存のコーパスで手薄だが、言語資源に基づく言語の科学的研究をより一層進めるために必要となるタイプの言語資源の構築に注力する。プロジェクト全体で開催する合同の研究会やサブプロジェクト間での共同研究や言語資源活用のノウハウの共有を通して、サブプロジェクト間の連携を強めて研究推進の相乗効果を得ることを模索する。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算総額 31,699千円

### 【理論対照統括】

- ・継続して Evidence-based Linguistics Workshop を開催するとともに、言語学フェス 2024 を共催した。2024年8月に開催予定の Oxford 大学・神戸大学国際シンポジウムの共催の準備を進めた。

### 【アノテーション】

- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本経済新聞記事オープンコーパス』のアノテーションデータを整備した。ジャーナル論文4件・紀要論文2件・招待論文1件・学会記事1件・査読付き国際会議発表5件。

### 【イントネーション】

- ・フィールドワークを通じて南琉球八重山語の韻律調査を複数回行った。
- ・音声学系国際学会で1件の口頭発表を行った。
- ・日本言語学会で琉球語諸方言に関する公開ワークショップを行った。

### 【計算言語学】

- ・日本語比較構文アノテーションデータの公開に向けて作業を進めた。査読付き英語論文1本。

### 【体言化】

- ・体言化プロジェクトは、前年度に引き続き、諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集するために、インド(23名)、インドネシア(8名)、アメリカ(文法書や他の文献に基づく調査)、ペルー(10名)でフィールドワーク・文献調査を実施した。また、今まで国内外で収集したデータの分析を進め、研究成果を英語版の論文(2件)の形でとりまとめ、著名な研究雑誌およびハンドブックに投稿した(現在印刷中)。

### 【述語の意味と文法に関する実証的類型論】

- ・状態変化動詞に関するデータ収集と研究発表、移動動詞に関する成果出版、および格標識に関するデータ収集と発表を行った。具体的には、英文論文集 i) A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 1(Mouton)の原稿提出に向けた最終作業と、ii) Revisiting Deixis in Motion-Event Descriptions (John Benjamins)の編集を行った。英文ブックチャプター1件、査読付き国際会議発表3件、国内学会発表2件。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：理論対照統括

サブプロジェクトリーダー：浅原 正幸

### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合		B
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
	3. 地域・社会との連携に関する計画	B
	4. グローバル化に関する計画	B

## I. 計画期間内の概要

### 1. 目的及び特色

科学的根拠に基づく実証的な理論的研究を進め、言語学のオープンサイエンス化を目標として、データの整備・公開を進める。データの整備・公開にあたってはサブプロジェクトメンバーで相互に協力して進め、言語学の多様な理論の多角的な検証体制を確立する。さらには理論・対照言語学におけるデータの共用手法について検討を進める。

また、理論言語学・対照言語学のオープンサイエンス化を推進する取組として、研究資料のオープンアクセス化に必要な施策を講じ、全所的な共同研究発表会の中で言語学分野におけるオープンサイエンスの普及に努める。共同研究発表会の開催に際しては、他のプロジェクトや広報室と連携して、他分野の研究者が参加可能な学際的・分野横断的な企画を進める。

### 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

#### 年次計画（6年間のロードマップ）

- 2022年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2023年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2024年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2025年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2026年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2027年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）

- ほかに国際シンポジウムを神戸大学と Oxford と共同で開催予定（6年間で2-3回程度）。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 2,840千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流に関する協定書に基づき、神戸大学と連携して9/14-9/15にELW2023を開催した。
- (2) 神戸大学と連携して、2024年夏に神戸大学にて開催予定のOxford大との国際シンポジウムについて準備を進めた。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 理論対照の各サブプロジェクトの後方支援を実施。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流に関する協定書に基づき、神戸大学と連携して9/14-9/15にELW2023を開催した（再掲）。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) Evidence-based Linguistics Workshop 2023 発表論文集を編纂。  
<https://doi.org/10.15084/0002000055>

### 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

#### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 神戸大学と連携して、2024年8月に神戸大学にて開催予定のOxford大との国際シンポジウムについて準備を進めた（再掲）。

#### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) Evidence-based Linguistics Workshop 2023 に参加する若手研究者の旅費を支援。

#### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 言語処理学会第30回年次大会にてランチタイム企画として「論文誌『自然言語処理』投稿の手引き」を企画（2024/03/14）。

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

#### 地域・社会との連携

- (1) 2024/01/20 開催，言語学フェスを共催。
- (2) 2024/03 開催，言語処理学会第30回年次大会プラチナスポンサー。

#### 研究成果の社会への還元

- (1) Evidence-based Linguistics Workshop 2023 発表論文集を編纂  
<https://doi.org/10.15084/0002000055>（再掲）

### 4. グローバル化に関する計画

#### 海外の大学との連携等

- (1) 神戸大学と連携して、2025年3月に神戸大学にて開催予定のOxford大との国際シンポジウムについて準備を進めた（再掲）。

#### 国際シンポジウムの開催

- (1) 神戸大学と連携して、2025年3月に神戸大学にて開催予定のOxford大との国際シンポジウムについて準備を進めた（再掲）。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学

サブプロジェクトリーダー：浅原 正幸

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

第2期：国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」(H21(2009)年10月～H27(2015)年9月)と第3期：国立国語研究所コーパス基礎研究プロジェクト「コーパスアノテーションの拡張・包括・自動化に関する基礎研究」(H28(2016)年4月～R4(2022)年3月)(1500千円/年)を継承し、アノテーションデータの共有化・共同開発およびアノテーションデータに基づく、理論・対照研究を進める。具体的には統語班・意味班・認知班の3つに分かれて以下のことを進める。

国語研で過去に構築した形容詞・動詞「記述的研究」データに基づく、実証的な統語・意味研究の展開  
統語研究において、体系的な語彙意味論に基づく大規模言語資源が求められている。他言語においては WordNet に基づき、FrameNet と呼ばれる体系的な語彙フレームが構築されている。日本語でも日本語フレームネットの研究が進められているが、英語の翻訳に基づく日本語ワードネットの利用は、日本語の語彙フレームを構成するにあたって語義の粒度が適切でないという問題点があった。一方、国立国語研究所においては、1964年に「分類語彙表」(国立国語研究所 1964)を刊行して以来、形容詞の結合価(西尾 1972)・動詞の結合価(宮島 1972)・比喩表現の結合の分析(中村 1977)などの大規模な日本語記述的研究が進められてきた。これらの研究は紙のカードに基づくものであり、現在は出版物として残されているのみである。これらを電子化し、現在のコーパスなどと対照させることで、日本語の統語研究の発展が見込まれる。

#### Universal Dependencies による多言語言語処理・言語類型論研究と Enhanced Dependencies

世界規模のオープンプロジェクトとして Universal Dependencies が進められている。延べ300人以上の研究者が参画し、90言語以上150のツリーバンクが整備され、多言語言語処理・言語類型論研究における基礎的な言語資源として世界的に評価されている(<https://universaldependencies.org/>)。この研究プロジェクトの特色として、言語横断的な形態・統語論的アノテーション基準を策定するための議論が、オープンソースソフトウェア開発のプラットフォームである GitHub 上(<https://github.com/universaldependencies/docs/issues>)でやり取りされ、issues にあげられている1つ1つの議論が言語類型論的に重要な公開研究資源となっている。

国立国語研究所は2014年から同プロジェクトに参画し、日本語の Universal Dependencies 関連言語資源の整備を統括するとともに、国内の研究者の取りまとめを進めてきた(浅原ほか 2019)。

同プロジェクトにおいて、Enhanced Dependencies として、意味的な結合価のアノテーションの議論が行われ、近年言語横断的な proposition bank の整備が求められており、議論が活発化している。

## 言語認識過程の言語資源化

言語資源整備において、電子化した言語資源に対してアノテーションを行うことで言語の生成過程の研究が進めてきた。一方、近年、言語を刺激として呈示した際の言語解釈のアンケート・読み時間・事象関連電位・脳活動データなど、被験者の反応をデータ化する言語認識過程を言語資源化する試みが進められている。一方、日本語において、言語認識過程を言語資源化した事例は依然として少ない。

### 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

- 2022年 意味班によるアノテーションデータの公開
- 2023年 統語班によるアノテーションデータの公開
- 2024年 意味班によるアノテーションデータの公開
- 2025年 統語班によるアノテーションデータの公開
- 2026年 認知班による実験環境の整備
- 2027年 認知班による実験環境の整備

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 4,500千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) COVID-19 の状況を見て、実験環境の整備を進める計画であったが、予算の制約上、計画を進めることができなかった。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 「日本経済新聞記事オープンコーパス」に対するアノテーションを進めた。  
(メタデータ・語義情報・読み時間・印象評定情報)

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 要望がなかったためにインターンシップの受入はなかったが、東京農工大学の修士課程学生とともに国際会議発表を1件行った。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 「日本経済新聞記事オープンコーパス」は2023年3月に公開した。追加情報を継続して整備している。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「各班のテーマに即した研究発表会を企画」という計画については、研究発表会を企画できなかった。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) ジャーナル論文4件・紀要論文2件・招待論文1件・学会記事1件・査読付き国際会議発表5件。

#### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 2023/07/12 東京外国語大学国際日本学研究院 NINJAL ユニット講演会  
『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーション
- (2) 2023/11/05 NINJAL シンポジウム  
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のメタデータ
- (3) 2023/11/19 中山大學学術フォーラム「Digital Humanities × Classical Studies」  
日本語歴史コーパスに対する分類語彙表番号情報アノテーション
- (4) 2023/12/13 東京外国語大学国際日本学研究院 NINJAL ユニット講演会  
分布意味論に基づく言語研究

(5) 2024/02/01 立命館大学講演会

分布意味論入門

#### データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

(1) <https://masayu-a.github.io/anno/> にて以下を公開。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』分類語彙表番号アノテーション

<https://bccwj-data.ninjal.ac.jp/mod/folder/view.php?id=24>

『日本語歴史コーパス』分類語彙表番号アノテーション

<https://github.com/masayu-a/CHJ-WLSP>

『日本語日常会話コーパス』分類語彙表番号アノテーション

<https://cejc-data.ninjal.ac.jp/mod/folder/view.php?id=506>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』分類語彙表番号アノテーション(助動詞用法つき)

<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-WLSP-AUX-OT>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』短単位語彙表（分類語彙表番号つき）

<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-WSD-frequency/>

『日本語日常会話コーパス』短単位語彙表（分類語彙表番号つき）

<https://github.com/masayu-a/CEJC-WSD-frequency>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』時間情報アノテーション BCCWJ-TimeBank

<https://bccwj-data.ninjal.ac.jp/mod/folder/view.php?id=23>

機能表現辞書「つつじ」に対する単語親密度情報

<https://github.com/masayu-a/TSUTSUJI-familiarity>

常用漢字親密度情報

<https://github.com/masayu-a/KANJI-familiarity>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』小説下位分類情報 BCCWJ-PB9X3meta

<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-PB9X3meta/>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』新聞記事データ記事境界情報 BCCWJ-PNmeta

<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-PNmeta/>

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 特別共同利用研究員の受け入れ

(1) 要望がなかったためにインターンシップの受入はなかったが、東京農工大学の修士課程学生とともに国際会議発表を1件行った（再掲）

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 東京外国語大学 授業担当「コーパス言語学入門」「心理言語学入門」

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト費・科研費でプロジェクト非常勤研究員を2人雇用していたが、1人は2023年7月に国立大学に研究員として就職、もう1人は2024年4月に国立工業高等専門学校に就職予定である。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

(1) 学振RPD1人を受け入れたが、2024年1月より国立大学に准教授として就職した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 産業界との連携

(1) 企業との共同研究6件を実施した。

#### 地域・社会との連携

- (1) 言語処理学会論文誌副編集長
- (2) 日本言語学会大会運営委員
- (3) 言語処理学会 30 周年記念事業委員会委員

#### 研究成果の社会への還元

- (1) 企業との共同研究プロジェクトによる成果物を以下のとおり発信した。
  - SB Intuitions 社  
共同で行った研究について、第一著者が 情報処理学会 NL 研第 258 回研究会にて、若手奨励賞を受賞(2023 年 12 月)
  - 株式会社リクルート共同研究プロジェクト  
SIGDIAL にて 1 件発表
  - ホンダリサーチインスティテュート社 共同研究プロジェクト  
PACLIC にて 1 件発表  
共同で行った研究について、言語処理学会第 30 回年次大会にて、優秀発表賞を受賞 (2024 年 3 月)

#### 4. グローバル化に関する計画

##### 海外の大学との連携等

- (1) Universal Dependencies の枠組で、情報交換を継続して実施した。

##### 国際シンポジウムの開催

- (1) 1st International Workshop on Ancient Language Processing (ALP) at RANLP, Program Committee member
- (2) The 2024 Joint International Conference on Computational Linguistics, Language Resources and Evaluation (LREC-COLING 2024), Program Committee member
- (3) 2024 Annual Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics (NAACL 2024), Senior Area Chair (SAC) : Resources and Evaluation

##### 英語による研究成果の発信等

- (1) 査読付き国際会議発表 5 件

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究

サブプロジェクトリーダー：五十嵐 陽介

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

日本語共通語のイントネーション研究は世界的に見ても高い水準にある。それに対して日本語・琉球語諸方言のイントネーション研究はまだ始まったばかりであり、ほぼ未開拓の分野と言える。諸方言のアクセントを扱う研究は数多く、それによって日本語・琉球語のアクセントは多様性に富むものであることが明らかにされている。語レベルの韻律現象の多様性を勘案すれば、諸方言における文レベルの韻律現象すなわちイントネーションにも多様性が観察されることが期待される。それを解明し、一般言語学・言語類型論の視点から検討することは、韻律現象の理論的研究に大きく貢献することが予想される。

共時的研究の最終目標として、日本語・琉球語諸方言のイントネーション体系の多様性を明らかにし、それを一般言語学・言語類型論の視点から検討し、日本語・琉球語諸方言の研究から、世界諸言語を対象とした理論的研究に貢献することを設定する。通時的研究の最終目標として、祖語の韻律体系を再建し、祖語の体系が現代諸方言の韻律体系へと多様化する過程を明らかにすることを設定する。

第4期の目標は、イントネーション体系、特に句末音調と韻律句形成の多様性を、フィールドワークを通じて収集したデータおよび方言コーパスの分析に基づいて実証的に解明し、その結果を一般言語学・言語類型論の視点から検討することで、世界の諸言語を対象とした理論的研究に貢献することにある。

#### 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4) 年度	・ 共通の調査票を作成する。 ・ 調査票に基づいた方言データ収集を開始する。	4月～9月 共通の調査票の作成 4月～3月 方言データ収集 9月 シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」共催
2022.4 ～2023.3	・ 調査結果の初期報告を国内学会で行う。 ・ コーパス講習会を開催する ・ 『広島大学日本語電話会話コーパス』(COTCO-H) 構築作業を2時間分完了する。	3月 『広島大学日本語電話会話コーパス』(COTCO-H) 構築作業2時間分完了 時期未定 コーパス講習会 時期未定 フィールドワークチュートリアル 時期未定 共同研究員発表会（×2回）

2023 (R5) 年度 2023. 4 ~2024. 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>共通の調査票を改良する。</li> <li>調査票に基づいた方言データ収集を継続する。</li> <li>韻律に関する発表を国際学会で行う。</li> <li>文レベルの韻律現象に関するワークショップを日本音声学会で開催する。</li> <li>COTCO-H 構築作業を 4 時間分完了する。</li> </ul>	<p>4月～3月 調査票改良</p> <p>4月～3月 方言データ収集</p> <p>5月 日琉諸語韻律体系の書籍 (Brill 社) プロポーザル提出</p> <p>7月 日本音声学会ワークショップ企画書提出</p> <p>8月 国際学会 (ICPhS) で成果発表</p> <p>9月 日本音声学会ワークショップ開催</p> <p>3月 COTCO-H 構築作業計 4 時間分完了</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2回)</p>
2024 (R6) 年度 2024. 4 ~2025. 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査票に基づいた方言データ収集を継続する。</li> <li>調査結果の初期報告を国内・国際学会で行う。</li> <li>COTCO-H 構築作業を 6 時間分完了する。</li> </ul>	<p>4月～3月 方言データ収集</p> <p>5月 (予定) 国際学会 (Speech Prosody) で成果発表</p> <p>9月 国内学会で成果発表</p> <p>3月 COTCO-H 構築作業計 6 時間分完了</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2回)</p>
2025 (R7) 年度 (前半) 2025. 4 ~2026. 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査票に基づいた方言データ収集を継続する。</li> <li>国内学会でワークショップを開催する。</li> <li>音声データ公開する。</li> <li>COTCO-H 構築作業を 8 時間分完了し公開する。</li> <li>コーパスに関する書籍を出版する</li> </ul>	<p>4月～3月 方言データ収集</p> <p>9月 国内学会でワークショップ開催</p> <p>3月 共通の調査票を用いて収集された発話の音声データ公開</p> <p>3月 COTCO-H 構築作業計 8 時間分完了</p> <p>同コーパス 8 時間分公開</p> <p>時期未定 コーパスに関するシリーズ書籍のうち 1 冊 (「設計・構築編」) 出版</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2回)</p>
2026 (R8) 年度 2026. 4 ~2027. 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>国内・国際学会で成果発表する。</li> <li>COTCO-H 構築作業を 10 時間分完了し公開する。</li> </ul>	<p>5月 (予定) 国際学会 (Speech Prosody) で成果発表</p> <p>9月 国内学会研究発表</p> <p>3月 『広大電話会話コーパス』構築作業計 10 時間分完了</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2回)</p>
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ~2027. 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>論文集 (書籍) を出版する。</li> <li>COTCO-H 構築作業を 11 時間分完了し、公開する。</li> </ul>	<p>9月 国内学会研究発表</p> <p>3月 『広大電話会話コーパス』構築作業計 11 時間分完了</p> <p>同コーパス 11 時間分公開</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2回)</p>

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 2,199千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 八重山諸島（石垣島・西表島）および宮古諸島で現地調査を行った。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 科研費基盤研究(A) (23H00007)「日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用」（代表：小木曾智信）との協働で、『広島大学日本語電話会話コーパス』の形態素情報の再解析と、方言形態素解析用辞書の構築作業を開始した。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-23H00007/>

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 6月10日と3月17日に、「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で、「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会を計2回開催した。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230610a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230610a/)（第1回）

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20240317a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240317a/)（第2回）

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 国際学会 ICPHS（プラハ、2023年8月7日-11日）で中国語方言の韻律体系に関する発表を行った。

<https://guarant.cz/icphs2023/488.pdf>（予稿集）

- (2) 日本言語学会第167回大会（11月12日）にて、科研費基盤研究(B) (20H01259)「南琉球宮古諸方言のアクセントに関する調査研究」（代表：新田哲夫）との共催で、公開ワークショップ「宮古・八重山諸島のアクセント研究の新展開：その韻律単位と類型」を開催した。

[https://www.ls-japan.org/modules/news/news\\_doc/program-lsj167ja-231020.pdf](https://www.ls-japan.org/modules/news/news_doc/program-lsj167ja-231020.pdf)（大会プログラム：C会場のワークショップ）

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 日琉諸語アクセントの定量分析の必要性に関する論文を公表した。

<https://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-8234-1198-4.htm>（目次）。

### 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

#### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大で授業を担当し、さらに指導学生1名を主指導教員として指導した。後者については、指導学生が日本言語学会第167回大会（2023年11月11日）にて研究成果の発表を行った。

[https://www.ls-japan.org/modules/news/news\\_doc/program-lsj167ja-231020.pdf](https://www.ls-japan.org/modules/news/news_doc/program-lsj167ja-231020.pdf)

（大会プログラム：[B-1]の口頭発表）

- (2) クロスアポイントメントに基づく東京外国語大学学部授業 Japan Studies（前期・後期）を担当した。

#### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 必要な作業を行う作業者は、科研費基盤研究(A) (23H00007)「日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用」（代表：小木曾智信）の科研費を用いて雇用したため、プロジェクト経費では雇用は行わなかった。

#### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 40歳未満31名、35歳以下24名がプロジェクト共同研究員としてプロジェクトに参加した。

#### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した

#### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 共同研究者かつ大学院生1名に対して国際学会参加旅費の支援を行った。
- (2) 共同研究員かつ大学院生1名に対して、九州大学で行われたフィールドワーク講習参加のための旅費支援を行った。

#### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 3月16日に「消滅危機言語の保存研究」(リーダー:山田)と共同で、「初心者向け:基礎語彙調査チュートリアル」を行った。

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

#### 地域・社会との連携

- (1) 2023年10月24日に国立国語研究所と沖縄県宮古島市の間に、宮古島の地域文化の保全と振興を目的として、消滅危機にある宮古島の言語に関する学術交流、その他の諸活動の発展に向けた連携・協力協定を締結した。

<https://kotobaken.jp/release/news-231120-02/> (国語研プレスリリース)

<https://www.miyakomainichi.com/news/news-177953/> (2023年10月25日付宮古毎日新聞)

<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/1251106> (2023年11月5日付沖縄タイムス)

### 4. グローバル化に関する計画

#### 海外の研究者の受入

- (1) 日本学術振興会外国人研究者招へい事業外国人特別研究員(欧米短期・推薦)の受け入れ(令和4年度から継続で1名、令和5年度に新たに1名、計2名)を行った。
- (2) ミュンヘン大学(Ludwig-Maximilians-Universität München)から外来研究員を1名受け入れた

#### 英語による研究成果の発信等

- (1) 「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」に記載の通りに実施した。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓

サブプロジェクトリーダー：窪田 悠介

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	C
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

自然言語処理のリソースや計算言語学的手法を援用した理論言語学研究的の学際化が進展しているが、人間の言語能力の解明という、理論言語学における核心的問題に直接取り組む研究はまだ生まれていない。言語習得や（計算機でなく人間による）意味解釈や統語構造の解釈のプロセスの解明に計算言語学的手法を援用する研究も出始めてはいるが、これらはまだ端緒についたばかりであり、本格的な研究となっていない。本研究では、理論言語学研究に対して新たな経験科学としての基盤を与えるために、計算言語学的手法を援用した方法論を模索し提案することを目的とする。

計算言語学的手法を援用した理論言語学研究が国内外の研究でここ 10 年ほどで急速に進展した。特に、本研究の研究代表者によるカテゴリ文法を用いた統語論・意味論の理論構築の研究によって、計算言語学的手法を用いて理論言語学研究に形式的基盤を与える研究が進み、生成文法理論の統語論・意味論の数学的基礎づけに関する見通しがほぼ立った。また、別の研究の流れとして、自然言語処理の手法を応用的な技術として用いて、計算論的モデリングの手法で人間による言語処理や言語獲得の性質などの解明を試みる研究が国内外で進んでいる。国語研においても、コーパス開発センターでの日本語 web コーパスや、web コーパスを用いた大規模な単語分散表現の開発、また、理論・対照研究領域における第3期の2件の基幹プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」と「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」との関連で、いくつかの学際的な言語研究の試みが進められた。

このように、一見したところ理論言語学研究的の学際化が進展したが、分野融合的な研究の真の発展のためには、乗り越えるべきいくつかの課題がある。本研究では、その中の一つに焦点を絞って突破口を探る。上述のように、理論言語学と計算言語学の接点には、大きく分けて、分野融合的な研究としての理論的基盤に関する「基礎研究」と、この「基礎研究」の成果を応用して、より直接的に言語学の側の理論研究の問題に取り組む「応用研究」の二つの流れがある。現状では、言語学と自然言語処理という二つの分野における、前者の自然科学的指向性と後者の工学的指向性との間の齟齬により、この二つのタイプの研究がうまく連携していない。（いまだ存在しないが、現在の自然言語処理技術に基づけば十分に実現可能な）生成文法理論の成果をより直接的に反映する言語資源を開発できれば、両者を統合し、理論言語学研究的の中心的課題の解明に正面から迫る研究が遂行可能になると考えられる。また、理論言語学の中核的問題に自然言語処理技術を活用する方法を示すことで、自然言語処理研究の分野に対しても、現在十分に注目されていないが取り組むべき重要な課題を示すことが可能になる。

具体的な課題として、主に以下の研究に取り組む。

1. 「変換文法のパーザ」の開発と、その理論研究への応用
2. 意味解釈をアノテーションしたコーパスの構築とその理論研究への応用

人間の言語能力の解明ということを目標としたとき、現在までの理論研究、計算言語学研究の双方で見落とされがちであった観点として、自然言語の言語表現は単に統語的な分布の特徴を持つ体系であるだけでなく、意味を表す記号システムであるという点がある。理論装置としての「統語変換」の概念の核心には、表面的に観察される単語列と、その単語列が表す意味との対応関係を簡潔に捉える、というところに眼目がある。

このため、構成的に意味表示を構築できる変換文法のパーザを開発すれば、それをを用いて言語の意味解釈の側面にまで踏み込んだ言語能力の計算論的モデリングが可能となる。本研究では、変換文法のパーザを開発し、それをを用いて言語資源を援用した言語習得や言語処理の計算機でのシミュレーションを行うことで、統語変換という理論装置の性質の解明を構成論的に行うことを目標にする。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

研究期間を前半3年と後半3年に分け、それぞれの期間でリソースの構築とリソースを利用した研究に重点的に取り組む。後者は前者に依存するので、リソース構築の段階から、応用研究のための先行研究の調査やパイロット的な実験を開始し、段階を踏んで本格的なモデリング研究に取り組んでいく。後半3年に行うモデリングの研究においては、前半3年で開発する変換文法のパーザを用いた研究に中心的に取り組む。

2022

- 英文啓蒙書執筆（最終段階）
- 和文啓蒙書編集
- 言語資源構築（開始）
- モデリング研究（予備調査）

2023

- 言語資源構築（2022 から継続）
- 英文啓蒙書出版
- 和文啓蒙書出版
- 国際学会発表（言語資源）

2024

- 言語資源の構築を完了する
- モデリング研究のパイロットを行う
- 前年度に出版した教科書を用いて ESSLII で講義

2025

- モデリング研究を進める
- 国内学会で関連研究に関するワークショップを開催する（言語学会または言語処理学会）

2026

- モデリング研究の予備的成果を、国内学会、国際学会で発表する
- 最終的な成果をまとめた論文を執筆、学術誌に投稿

2027

- 論文出版

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 3,200 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 日本語比較文の意味情報をアノテーションしたコーパス（4000 文）を公開する準備を進めた。（令和6年度前半には公開予定。）

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 論文集（和書）の原稿を揃え、出版社に入稿した。（令和6年度前半には刊行予定。）

### 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

#### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 非常勤技術補佐員1名（週2日12時間）【若手支援】

#### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生1名を共同研究に参加させ、言語処理学会で共著論文を発表した。当該論文が委員特別賞を受賞した。【若手支援】
- (2) 特任助教と共著の査読付き英語論文が1本出版された（グローバル4.2）。【若手支援】
- (3) 九州大学集中講義（2024年2月に実施）において執筆中の英文啓蒙書（カテゴリ文法の教科書）のドラフトを教科書に用いた。

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

### 4. グローバル化に関する計画

#### 英語による研究成果の発信等

- (1-1) 共同研究員1名と共著の論文が1本国際ジャーナルに掲載された。
- (1-2) 特任助教と共著の査読付き英語論文が1本出版された。
- (2) 国際学会での研究発表は行わなかった（研究の進捗がやや遅れているためタイミングを逃したのと、研究代表者が個人的理由のため海外出張が困難である時期だったため）。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—

サブプロジェクトリーダー：プラシヤント・パルデシ

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	A

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

現行の類型論的研究では、性標示は主名詞による一致現象とし (Corbett)、類別詞も同様に主名詞の分類が本務と考えられていて (Aikhenvald)、これら二つの現象と体言化現象との共通性がすくい取られていない。これに対して、Shibatani の研究によって、多くの言語における類別詞の体言化機能が指摘され、また性標示による名詞派生などを考慮に入れると、数詞、指示詞、属格、形容詞、動詞連体・分詞形にみられる類別詞・性標示も体言化の観点から見直し得る可能性が浮かび上がってくる。

このプロジェクトでは、従来個別に取り扱われてきた、体言化 (nominalization)、類別詞 (classifier)、性標示 (gender) の現象を体言化の類型という全く新しい視点から追究し、この三領域を統一的に取り扱える理論的枠組みを開発する。アジアに広く拡散する類別詞ならびに印欧語その他に見られる性標示という旧来の研究課題に体言化現象の類型という立場から新しい息吹を吹き込むと同時に、高次元の統一的理論化を目指す。

研究体制としてはコアメンバー数名と国外研究員が中心となってチームを結成し、フィールドワークを通しての一次的なデータ収集に当たり、また、理論と言語資料の研究・分析に従事する。体言化、類別詞、性標示現象が顕著な言語を専攻する若手研究者、大学院生を特定し、定期的に研究発表者 (準メンバー) として招き、コアメンバー専門以外の言語の資料を収集するとともに、若手研究者の育成に尽力する。研究成果を国際シンポジウムならびに英文刊行物 (論文、論文集) をとおして広く発信し、日本語研究・言語類型論研究両方面における国際的な貢献を目指す。

日本語研究の国際化とならんで、本プロジェクトは国語研の目標の一つである若手研究者の育成にも尽力する。具体的には、次の4つの事業により若手研究者の育成を図る。

(a) 大学院生や若手研究者を共同研究員または非常勤研究員として迎え、研究指導を行う。特に、類別詞や性標示が重要な文法機能を果たす言語を専攻する大学院生や若手研究者を随時研究会に招き、理論や分析方法の討議を通して、それぞれの研究の進展に資するようにする。

(b) 国内外から学振の特別研究員や国語研の特別共同利用研究員を積極的に受け入れる。

(c) 大学院生向けのチュートリアルを企画する。

(d) 国際シンポジウム等において若手研究者に研究発表の場を提供する (あわせて旅費支援などの経済的支援も行う)。

本プロジェクトでは文献によるデータ収集に加えて、必要なデータを国内外でフィールドワークを通じて収集する。オープンサイエンスの方針に沿って、収集したデータを共同研究者間で共有する。また、データに

基づく体言化の実証的な言語類型論的な研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

6年間のロードマップは以下の通りである。

**1年目（2022年度）**：諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し、類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①文献によるデータ収集と整理
- ②フィールドワークの準備：収集されるべきデータタイプの整理
- ③フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ④研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ⑤類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表

**2年目（2023年度）**：前年度に引き続き，諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し，類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①前年度のフィールドワークによるデータの分析
- ②フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ③研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ④類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表

**3年目（2024年度）**：前年度に引き続き，諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し，類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①前年度のフィールドワークによるデータの分析
- ②フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ③研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ④類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表
- ⑤コアメンバーによる担当言語（群）における研究成果のまとめと論文の作成
- ⑥研究成果を踏まえた，国際シンポジウムの準備

**4年目（2025年度）**：

- ①国内外から発表者を招聘し，国際シンポジウムの開催
- ②国際シンポジウムでの報告に基づいて論文の作成
- ③論文の内部・外部査読および改訂作業
- ④主要出版社からの論文集の出版の準備（出版社との交渉，出版契約の締結，編集作業の開始など）。

**5年目（2026年度）**：

- ①フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ②体言化類型論の枠組みの構築完了
- ③新理論の実質データによる最終検証
- ④研究成果の発表
- ⑤主要出版社からの論文集の出版

**6年目（2027年度）**：

- ①内外の個別言語専門誌への投稿論文の作成
- ②内外の類型論関係専門誌への理論的研究論文の作成
- ③国内外で公開シンポジウム・ワークショップの実施
- ④研究成果の発表

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 12,480千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 前年度に引き続き、諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集するために、インド（2023/7/24-2023/8/4, データ提供者：23名）、インドネシア（2023/8/7-2023/8/15, データ提供者：8名）、アメリカ（2023/9/1-2023/9/14, 文法書や他の文献に基づく調査）、ペルー（2023/12/19-2024/1/6, データ提供者：10名）、インド（2024/2/20-2024/3/20, データ提供者：17名）でフィールドワーク・文献調査を実施した。国内調査について今年度は調査を実施せず、前年度収集したデータを分析し、論文執筆を行った。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 交流協定を締結してデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート（Deccan College Post Graduate and Research Institute）およびインド工科大学マドラス校（Indian Institute of Technology Madras）と連携してインドにおけるフィールドワークの企画・準備を進め、2回実施した。

第1回目：2023/7/24-2023/8/4, データ提供者：23名, 実施地点：Udupi/Manipal, Mangalore, Pune, 言語名：Kannada 語, Tulu 語, Konkani 語, Koraga 語, Arebhashe 語。このフィールドワークにデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュートの若手研究者（修士課程）Husendra Sethia 氏を参加させ、フィールドワークの手法、データの整理・分析などのノウハウを伝えた。【若手支援】

第2回目：2024/2/20-2024/3/20, データ提供者：17名, 実施地点：Pernem, Canacona (Goa), Mangalore (Karnataka), Kozhikode (Kerala), Pune (Maharashtra), 言語名：Konkani 語 (Goa 州, Karnataka 州, Kerala 州で話される諸方言), Tulu 語, Koraga 語, Arebhashe 語)。このフィールドワークにデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュートの若手研究者（修士課程終了者）Govind Mopkar 氏を Goa 州における調査に参加させ、フィールドワークの手法、データの整理・分析などのノウハウを伝えた。【若手支援】

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 国内で公開の研究発表会を4回（2023.5.27@神戸大学, 2023.7.15@東京大学本郷キャンパス, 2023.10.21 および 2023.10.28 オンラインで）開催し、フィールドワークで収集したデータに基づいて研究発表（7件）を行った。また、海外で学会での基調講演（Masayoshi Shibatani@“International workshop: Classifiers in Asian Languages”, Zhejiang University, Hangzhou, China May 20, 2023.）、招待講演（Masayoshi Shibatani@ASIAN PERSPECTIVES ON FUNCTIONAL LINGUISTICS, UCLA, USA, October 21, 2023; Masayoshi Shibatani and Prashant Pardeshi@ University of New Mexico, September 9, 2023; Pontifical Catholic University of Peru, Lima, 31 Dec. 2023）、国際学会での口頭発表（Masayoshi Shibatani, Prashant Pardeshi, and Haowen Jiang@“International workshop: Classifiers in Asian Languages”, Zhejiang University, Hangzhou, China May 20, 2023, Prashant Pardeshi, Gitanjali Bez, Niranjana Uppoor, Masayoshi Shibatani@The 37th South Asian Languages Analysis Roundtable (SALA-37), 6th Oct. 2023, online)の形で研究成果を発表した。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

(1) 類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開し、研究成果を論文（2件）の形でまとめて投稿した。2件のうち、1件が刊行済みで、もう1件は印刷中である。詳細は「英語による研究成果の発信等」参照。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大学の言語類型論の授業を担当した。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 若手研究者（1名）をプロジェクト非常勤研究員として雇用し、ベンガル語、コルタ語における類別詞に関する研究について指導した。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 本プロジェクトでは大学院生、学振PD等のプロジェクトへ参画させ、プロジェクト研究会への参加・発表などの機会を与えている。ペルーでのフィールドワークに学振PDを参画させた。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 今年度は若手研究者の発表が実現できなかった。

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 若手研究者への研究費・発表旅費を支援する機会はなかった。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

- (1) 令和5年度は学振の特別研究員や国語研の特別共同利用研究員の希望はなかった。

### 海外の大学との連携等

- (1) 交流協定を締結してデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート (Deccan College Post Graduate and Research Institute) およびインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras) と連携してインドにおけるフィールドワークの企画・準備を進め、2回実施した。詳細は「国内外の大学や研究機関との組織的な連携等」を参照。

### 英語による研究成果の発信等

- (1) 以下の研究成果を英語で論文を執筆し、投稿した。
  - ①Masayoshi Shibatani (2023). Towards dynamic functional typology—Classifiers, genders, and nominalization—. In Historical Linguistics in Japan No.12, 1–52. Japan Society for Historical Linguistics. [https://doi.org/10.57565/hlj.12.0\\_1\\_3](https://doi.org/10.57565/hlj.12.0_1_3)
  - ②Masayoshi Shibatani and Tetsuo Nitta (In press) Japonic nominalizations in dialectal perspective. Kibe, Nobuko, Tetsuo Nitta, and Kan Sasaki (eds.), In Handbook of Japanese Dialects. Mouton de Gruyter.

## 5. その他

- (1) インドでのフィールドワークの際以下のNINJAL チュートリアル（6件）を企画・実施した。

①NINJAL チュートリアル(2023年8月7日): 日本語教師・日本語学習者向け (Japanese section, Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University (SPPU), Pune, India と共催)

”Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages”

②NINJAL チュートリアル(2023年8月8日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Japanese language, Tilak Maharashtra Vidyapeeth, Pune, India と共催)

“Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages”

③NINJAL チュートリアル(2023年8月12日): 言語学関係者向け(Dept. of Linguistics, Deccan College (Deemed to be University), Pune, India と共催)

“Development of Japanese treebank: NPCMJ (NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese).”

④NINJAL チュートリアル (2024年2月22日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University (SPPU), Pune, Maharashtra State, India.)

“Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language.”

“When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence. ”

“How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”?: The types and systems of temperature vocabulary.”

⑤NINJAL チュートリアル (2024年2月23日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Japanese at Tilak Maharashtra Vidyapeeth (TMV), Pune, Maharashtra State, India.)

“Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language.”

“When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence. ”

“How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”?: The types and systems of temperature vocabulary.”

⑥NINJAL チュートリアル(2024年3月18日): 言語学関係者向け(Dept. of Linguistics, Deccan College (Deemed to be University), Pune, India と共催)

“Classifier and Gender marking in Konkani: A nominalization perspective.”

(2) 国際交流基金ニューデリー事務所と連携して、インドにおける日本語教育史に関する論文の編集作業を進めた。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進  
 サブプロジェクト名：述語の意味と文法に関する実証的類型論  
 サブプロジェクトリーダー：松本 曜

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

このプロジェクトでは、認知言語学的な立場から述語の意味と文法に関する類型的研究を行う。特に注目するのは、移動、状態変化、人間行為に関する動詞などの述語表現の意味と文法である。それを考察することにより、1) 言語においてどのような現象を動詞で表現し、どのような現象をそれ以外で表現するのか、2) 動詞で表現する際、どのような要素をその意味に組み込むのか、3) 動詞と関わる文法現象はどのような性質を持っているのか、の3つの課題に取り組む。

1)と2)は、国際的に注目されている研究課題であり、今まで主に移動事象を表す動詞に関して研究が行われ、言語間で組織的な変異が見られることが指摘されてきた (Talmy, Levin など)。このプロジェクトでは、移動事象のみならず、他の事象を表す動詞にも広げて、幅広い言語で意味の研究を行う。語彙調査、実験調査、コーパス調査などを用いて、〈入る〉〈走る〉などの移動動詞、及び〈壊す〉〈叩く〉などの使役状態変化や人間行為の表現に関して統一的で実証的な調査を行い、諸言語がどのようにそれらを言語化するのかについて比較研究を進める。特に日本語については、第3期の研究成果をベースにして、詳細な研究を行う。それにより、諸言語に見られる変異について今までに提案されてきた仮説の検証を行い、包括的に諸事象をカバーできる新たな提案を目指す。

3)については、動詞にマークされる文法的現象の1つとして動詞の敬語化を取り上げる。動詞における敬語マーキングは一部の言語にしか見られない現象であり、それがどのような形でその言語の性質と関わるかは興味深い課題である。このプロジェクトでは、連携プロジェクトの中で明らかにされてきた韓国語における動詞の敬語化に関する神経言語学的研究の成果を出発点として、研究を行う。

本プロジェクトはコーパスと実験を用いる実証的な手法で類型論研究を行う点に特色がある。動詞の意味に関する研究は、多くの言語を統一的に比較する点に特徴がある。またオープンサイエンスの方針に沿って、データの公開を進めながら研究成果を公表する点も大きな特徴である。具体的には主張の根拠となる諸言語の動詞のリストなどを公表する。

最終的な目的は、実証性の高い研究手法を用いて、動詞という品詞の性質を明らかにすることである。さらに、言語間の組織的な変異のパターンを見出し、その中で日本語の特色を明らかにする。

3年目での終了は、代表者の退職予定日のためである。

## 2. 年次計画（3年間のロードマップ）

2022年度

諸言語の動詞に関するデータを収集し、類型論的研究をすすめる。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions (仮題), Vol. 1の編集を終え、原稿を提出する。また、Vol. 2の編集を行う。

移動動詞に関する国際学会(NAMED 2022)を京都大学で開催し、海外のプロジェクトとの交流を図る。

2023年度

移動動詞と状態変化動詞についての類型論的研究をすすめる。

日本語における動詞と共起する格助詞の変化に関わる研究を行う。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 1の出版に向けた最終作業(2022年度のやり残しと提出後の作業)を行う。また、Vol. 2の編集を行う。

状態変化動詞に関わる国際学会発表を行う。

2024年

研究成果を論文などにまとめる。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 1を出版する。また、Vol. 2の原稿を提出する。

移動動詞と状態変化動詞についての日本語論文集を刊行する。

日本語の動詞に関するデータベースを完成させる。また、諸言語の動詞に関するデータベースを完成させる。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 6,480千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等(アクティビティ)

- (1) 日本語、英語、中国語について、調査対象の状態変化に関する言語表現のデータ収集を行った。また、イロカノ語、バスク語、ネワール語、タイ語についても行った。
- (2) 比較基準を表すカラ格に関する調査を行った。

#### データベース等の構築(アクティビティ)

- (1) 状態変化を表す日本語動詞類のリストを作成した。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等(アクティビティ・アウトプット)

- (1) 英語論文集の論文3点についてコメントをもらう形で、フランスの研究プロジェクトとの交流を行った。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム(アウトプット)

- (1) 公開の研究発表会を3回行った。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表(アウトプット)

- (1) A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions vol 1の原稿を提出した。また、Revisiting Deixis in Motion-Event Descriptionsの編集を行った。
- (2) 英文のブックチャプター論文を1点、オープンアクセスで出版した。【オープンアクセス】
- (3) 国内学会において日本語で2回(日本言語学会, MLF 2024), 国際学会において英語で4回(ICL 16, LSA 2024, IMD 2024, EuroSLA 2023)の研究発表を行った。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 若手研究者を2名プロジェクト非常勤研究員として雇用した。またRAとして1名を雇用した。【若手支援】

### 大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生7名，及び学振PD1名をプロジェクトメンバーとした。【若手支援】

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 若手研究者に，LSA 2024 と日本言語学会大会での発表に旅費支援を行った。【若手支援】

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の大学との連携等

- (1) 英語論文集の論文3点についてコメントをもらう形で，フランスの研究プロジェクトとの交流を行った。

### 英語による研究成果の発信等

- (1) 国際会議 ICLC 16, LSA 2024, IMD 2024, EuroSLA にて英語での研究発表を行った。
- (2) NINJAL シンポジウムとして開催した NAMED 2022 の発表論文集である，Revisiting Deixis in Motion-Event Descriptions の編集を行った。
- (3) 英文のブックチャプター論文を1点出版した。

# 「実証的な理論・対照言語学の推進」評価報告

## 令和5年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

令和4年度用の評価シートでも述べたように、本プロジェクトには5つの実証的なサブプロジェクトがある。それぞれ大きく異なったアプローチを用いて、言語学の分野全般に渡る記述対象が取り上げられており、評価委員としては、そのバランスが大変すぐれている点を高く評価している。その結果、令和4年度の自己評価は「B」であったが、評価委員としては、全体の評価を「A」とした。

令和5年度も引き続き、どのサブプロジェクトも着実かつ精力的に活動を行っており、令和4年度と比べて特に見劣りする点があるわけではないが、令和5年度の自己評価も「B」であったことも鑑み、令和5年度の全体的な評価としては「B」としておく。今後も堅実な活動を期待している。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

それぞれのサブプロジェクトで精力的に活動が展開されている。

サブプロジェクトによって規模は異なるが、それぞれ様々な研究集会を開催している。発表論文集も刊行される学会から、講演会・合同研究発表会など、それぞれのテーマにふさわしい形態での研究交流が図られている。

また、コーパスやアノテーションなどのデータ公開も着実に進められている。当然、サブプロジェクトの性質によってその量には違いがあるが、今後も各サブプロジェクトにはデータ公開を中心軸にすえて進めていっていただきたいと考えている。もちろんデータ分析も重要であるが、その材料となるデータが公開されていて初めて、他の観点からの分析への道も開かれるものであり、個人で公開することが簡単ではない大規模データこそ、国立国語研究所がになうべき重要な課題だと思う。

研究成果の公表についても、おおむね順調だという印象を持った。

#### 2. 教育・人材育成について

サブプロジェクトにより記載の仕方が異なるため、全体の人数は明らかではなかったが、それぞれのサブプロジェクトにおいて、若手研究者を積極的に雇用し、経済的にも支援をしていることが読み取れる。非常勤研究員の身分は不安定ではあるだろうが、さまざまなバックグラウンドの研究者と交流を持つことができる貴重な機会だと思われるので、多くの若手研究者が国立国語研究所の活動に加わることが可能な態勢を目指してもらいたいと思う。可能ならば、各サブプロジェクトで共通の表形式で、若手研究者の関わり方が量的に示されるような表があってもいいと思った。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

地域・社会との連携のみならず、産業界との連携も持続的に行われていることが大変素晴らしいことであると考えます。各大学でも産業界との連携は求められているが、なかなかノウハウが無く取り掛かれない場合も多いだろうと推測される。相手先との守秘義務もあるだろうので、簡単に情報公開できないかもしれないが、ぜひ、産業界との連携の始め方・持続するためのコツなど、何らかの形で大学教員にその経験を広めていただければと願っている。

#### 4. 国際連携・国際発信について

それぞれのサブプロジェクトにふさわしい形で、海外の大学との連携や国際シンポジウム等が実施されている。海外の研究者も受け入れており、英語による研究成果の発信も積極的に行われている。国際的な発信の意識は、すでに十分根付いているという印象を得た。

#### 5. その他特記事項

一般読者向きの記事の執筆やコーパスユーザーに対する講習会など、アカデミック界以外に対する発信についても意識されており、望ましいことだと考える。

# 「消滅危機言語の保存研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：消滅危機言語の保存研究

プロジェクトリーダー：山田 真寛

## 令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

以下4つのサブプロジェクト・主担当で研究を実施する。

##### (1) いま話されている日琉語諸方言データの収集

山田, 五十嵐, 共同研究員それぞれ | 担当地域でフィールド調査

国内40地点で調査を行っている3期から継続して、共同研究員が各担当地点で〔語彙、文法記述、談話資料の蓄積〕を進める。第3期プロジェクトを以下3つの観点で発展させる。

**増やす** 3点セットを拡充し、「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性の解明」プロジェクト（代表 | 五十嵐）や日琉祖語再建・系統関係解明、対照言語学的研究に資するデータなど、特定トピックに関するデータを増やす。

**深める** 3期までに個別文法現象の記述がある地点は文法スケッチを、文法スケッチがある地点は参照文法を執筆する。

**広げる** 琉球諸語に比べて不足している本土諸方言に調査対象を広げる。また消滅危機言語の再活性化など、言語の継承保存に資する基礎資料としてのデータ収集も行う。

##### (2) 過去の諸方言データの電子化

井上, 山田 | 諸方言談話資料の文字化・電子化と公開準備

1977年度から1985年度にかけて行われた「各地方言収集緊急調査」（文化庁）のうち「全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成」（2001～2008, 全20巻）で未公開部分の文字化・電子化し公開準備を進める。

##### (3) オープンサイエンスの促進

セリック, 山田 | アーカイブ

上記1, 2で蓄積されるデータをプロジェクトウェブサイト (<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/>) および国立国語研究所リポジトリなどで随時公開する。それぞれのデータ保持者自身がフィールドデータを平易かつ適切にアーカイブするしくみをつくるため、プロジェクトウェブサイトを利用した語彙・文法・談話データベースを改修・増強する。

#### (4) 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進

山田, 五十嵐, 井上 | イベント

- ・危機言語サミットを文化庁と沖縄県八重山郡与那国町と10月に共催（危機言語コミュニティや社会一般向け）
- ・談話資料電子化チュートリアル（大学院生含む研究者向け）
- ・共同研究員のフィールド調査成果発表会（国内発表会）
- ・その他, 言語コミュニティや社会一般に向けて, 危機言語の認知向上や公開データへのアクセス・利用促進を目的としたイベントや発信を行う。

## 2. プロジェクト全体の6年間の計画

上述の4つを以下の方法で毎年度継続して行う。

### (1) いま話されている日琉語諸方言データの収集

各共同研究員が担当地域で主に対面調査によるフィールド調査を行い {文法記述, 語彙, 談話資料} データの収集および, 特定トピックに関する調査を行う。

### (2) 過去の諸方言データの電子化

第4期3年目までに, 選定した地点約90時間分の方言談話資料を電子化して共通語訳を付したテキスト入力を行う。さらに文字化方言と対応する共通語訳・対応部分の音声データ切り出しを行い, 談話情報と話者情報のデータベースを作成して「日本語諸方言コーパス (COJADS)」に提供可能なデータとして成型する。作業は『ふるさとことば集成』から継続して行っている外部協力者に依頼する。

### (3) オープンサイエンスの促進

共同研究員の調査データを, プロジェクトウェブサイトと国立国語研究所リポジトリで公開する。プロジェクトウェブサイトでは語彙・文法・談話データベースを音声資料とともに公開する。

### (4) 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進

各共同研究員の調査に応じて毎年度2回研究発表会を行う。また3と関連して, データデポジットに関するワークショップを開催するほか, 危機言語・方言サミットを文化庁および開催地の地方自治体と共同で開催する。消滅危機言語研究の裾野を広げるため, 若手研究者向けのフィールドワークチュートリアルも行う。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算総額 24,853千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等 (アクティビティ)

(1) 共同研究員が各自の担当地点でフィールドワークを行い, 語彙・文法・談話データを収集した。

11名がフィールドワークの成果をプロジェクト研究会 (6/10, 3/17) で報告した

(<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/event/>)。研究会発表者が寄稿したプロシーディングス『日琉諸語の記述・保存研究 I』(<https://doi.org/10.15084/0002000045>), 『日琉諸語の記述・保存研究 II』

(<https://doi.org/10.15084/0002000174>) を出版し機関リポジトリで公開した。

### データベース等の構築 (アクティビティ)

- (1) 語彙データベースを改良し、プロジェクトウェブサイト上で公開しているオンライン辞書の機能を拡充した (3月, <https://kikigengo.ninjal.ac.jp/data/tango/search>)。
- (2) 文法資料データベースは担当する予定だった非常勤研究員2名が常勤職に就き離職したため作成せず、次年度以降に作成する計画に変更した。
- (3) リポジトリで公開されている文化庁談話資料をまとめたウェブページを作成し、音声ファイルを公開した (<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/kinkyu/index.html>)。
- (4) 文化庁データ「各地方言収集緊急調査」は以下10地点16 itemsの電子化したテキストと音声区切りファイルをリポジトリ登録・PJウェブサイトで開催した。

神奈川県方言談話資料 2 items, 愛知県方言談話資料 1 item, 大阪府方言談話資料 2 items, 岡山県方言談話資料 3 items, 愛媛県方言談話資料 2 items, 福岡県方言談話資料 2 items, 大分県方言談話資料 1 item, 鹿児島県方言談話資料 1 item, 栃木県方言談話資料 1 item, 岐阜県方言談話資料 1 item

### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 米国ハワイ大学マノア校との協定にもとづく研究会・研究打ち合わせ・学生指導として次の4つを実施した。
  - ①米国ハワイ大学マノア校との協定を、ヒロ校を含むハワイ大学全体との協定として更新した。
  - ②米国ハワイ大学マノア校の教員2名 (Kamil Deen 教授, Shin Fukuda 准教授) が国立国語研究所を訪問し、所長および教員5名と総研大との連携, Brill 社シリーズ, その他今後の連携事業について議論した (3/26)
  - ③琉球語のフィールドワークを希望する米国ハワイ大学マノア校の学生1名を沖永良部島に招聘し、フィールドワークのサポートを行った (6月)。
  - ④米国ハワイ大学ヒロ校に所属する共同研究員 (大原由美子教授) を1か月間 (5/26-6/26) 外来研究員として招聘し、危機言語の継承保存について議論を重ねた。また彼女をコメンテーターとして非公開の研究会を3名の共同研究員とともに実施し、各自のフィールドでの継承保存研究を進めた。

### 他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) イントネーションプロジェクト (リーダー | 五十嵐陽介) と共同で、研究発表会を2回開催し (6/10, 3/17), 発表者が投稿したプロシーディングス『日琉諸語の記述・保存研究 I』 (<https://doi.org/10.15084/0002000045>), 『日琉諸語の記述・保存研究 II』 (<https://doi.org/10.15084/0002000174>) を出版し機関リポジトリで公開した。

### 異分野の研究者との共同研究・協業等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 社会言語学, 言語習得を専門とする共同研究員がそれぞれ1名ずつ加わり, 危機言語の継承保存研究を進めた。
- (2) 危機言語サミットで「ブース発表」を設け, 日本各地で継承保存を行っている11組 (デモンストラーション含む) が取り組みを発表し, 来場者と合わせて情報交換を行う機会をつくった。

### 調査データ・データベース等公開 (アウトプット)

- (1) 随時更新している日琉諸語語彙データベースを, プロジェクトウェブサイト ([kikigengo.ninjal.ac.jp](http://kikigengo.ninjal.ac.jp)) で音声付きオンライン辞書として公開した。【重出】
- (2) 研究資料シリーズとして『水納島方言辞典』のアクセント資料の整備を進めた。

### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム (アウトプット)

- (1) イントネーションプロジェクト (リーダー | 五十嵐陽介) と共同で, 研究発表会を2回開催した (6/10, 3/17)。【重出】

### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 研究会発表者が投稿したプロシーディングス『日琉諸語の記述・保存研究 I』  
(<https://doi.org/10.15084/0002000045>), 『日琉諸語の記述・保存研究 II』  
(<https://doi.org/10.15084/0002000174>) を出版し機関リポジトリで公開した。

### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 「みんなで談話整備プロジェクト文化庁「各地方言収集緊急調査」資料の整備と活用説明会&講習会」(8/26) を開催し、談話資料電子化のチュートリアルを行った。

### データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 沖永良部語諸方言など、地域言語コミュニティによる語彙収集プロジェクトが収集したデータは、プロジェクトウェブサイト上のオンライン辞書を、データの公開・利用プラットフォームとして活用している。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 山田真寛と五十嵐陽介がフィールド言語学（総研大）を担当した。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員として3名を雇用し、若手研究者の育成を行った。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 4名の大学院生が共同研究員としてプロジェクトに参加している。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) イントネーションプロジェクト（リーダー | 五十嵐陽介）と共同で研究発表会を2回開催し（6/10, 3/17）、若手研究者へ発表機会を提供した。

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 調査旅費、研究発表会参加旅費、危機言語サミット参加旅費、フィールドワークチュートリアル参加旅費を支援した。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 「みんなで談話整備プロジェクト文化庁「各地方言収集緊急調査」資料の整備と活用説明会&講習会」(8/26) を開催し、談話資料電子化のチュートリアルを行った。
- (2) フィールド支援プロジェクトの一部として、学部生と大学院生を対象にフィールドワークチュートリアルを行った。3/16に座学、3/19-21に静岡県葵区井川集落で実習を行った。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 地域・社会との連携

- (1) 与那国町（沖縄県八重山郡）、文化庁などと共催で「消滅の危機にある言語・方言サミット」を開催した（10/15, 16）。
- (2) 和泊町（鹿児島県大島郡）との連携協力協定にもとづき、玉城集落住民と協働して玉城方言辞典編集チームを立ち上げ、辞典制作を開始した。玉城公民館は辞典制作を含む事業予算を和泊町に申請し、採択された。和泊町文化協会と協働して「宝をつなぐチャレンジ応援事業」（奄美群島広域事務組合）の事業助成金に申請し、採択事業を実施した。和泊町で講演を行った（11/24）。
- (3) 知名町中央公民館講座「しまむにサロン」を開講した（毎月1回時間、通年）。・田皆集落住民と協働して田皆方言辞典編集チームを立ち上げ、辞典制作を開始した。
- (4) フィールド支援プロジェクトの一部として、静岡県葵区井川支所と協働してフィールド調査（3/19-21）とシンポジウム（3/20）を行った。

- (5) 沖縄県宮古島氏と談話資料のデジタル化・アーカイビングを目的とした連携協力協定を締結した。

#### 一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 危機言語サミットを文化庁などと共催した (10/15, 16)。
- (2) 知名町中央公民館講座を開講した (毎月 1 回 2 時間, 通年)。
- (3) 和泊町で講演を行った (11/24)。
- (4) 静岡県葵区井川支所でシンポジウム (3/20) を行った。

#### 社会人を対象とするスキルアップの計画等

- (1) 知名町中央公民館講座を開講した (毎月 1 回 2 時間, 通年)。
- (2) 和泊町で講演を行った (11/24)。

#### 研究成果の社会への還元

- (1) 危機言語サミットを文化庁などと共催した (10/15, 16)。
- (2) 知名町中央公民館講座を開講した (毎月 1 回 2 時間, 通年)。
- (3) 和泊町で講演を行った (11/24)。

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

- (1) 海外機関に所属する研究者 1 名を外来研究員として受け入れた (5/26-6/26)。

### 海外の大学との連携等

- (1) 米国ハワイ大学マノア校との協定にもとづく研究会・研究打ち合わせ・学生指導として上述の 4 つを実施した。詳細は「国内外の大学や研究機関との組織的な連携等」参照。

### 国際シンポジウムの開催

- (1) NINJAL-UHM Linguistics Workshop を 2022 年 2 月と 2024 年 5 月に開催したため 2023 年度は開催はなし。

## 5. その他

- (1) 沖永良部島の辞書制作について補足説明する。
  - ・沖永良部島の田皆 (知名町) と玉城 (和泊町) の辞書制作は、国内では先例のない消滅危機言語研究の先進的なアウトカムである (知名町公民館講座が主なアウトカムのソース)。先に始まったため比較的進んでいる田皆のケースを説明する。
    - ①知名町中央公民館講座で言語の記録訓練を学んだ受講生 1 名が、3 名の新話者を誘って調査チームをつくり、チームメンバーに語彙収集の方法を教えた。
    - ②危機言語 PJ が日琉語諸方言を対象に制作した基礎語彙リストを使って、調査チームがじぶんたちで流暢な母語話者を手配し、基礎語彙約 1000 語を音声付きで収集した。
    - ③収集したデータは定期的に危機言語 PJ の語彙データベースチームと電子的に共有し、データベースとして整備ができしだい音声付きオンライン辞書として PJ ウェブサイトで公開した。
    - ④基礎語彙収集完了後、PJ リーダーが調査チームに次のステップをいくつか提案した。調査チームと調査に協力してきた流暢な母語話者が編集委員会を立ち上げて議論し、各項目に追加する用例収集を行うことにした。
    - ⑤現在は、流暢な母語話者を数名追加した編集委員会が定期的 (月 2 回) に集まり、既収集語彙の確認、用例の作成と検討を行っている。調査チームメンバーがファシリテーターとなり、定例会中に収集するデータの記録と進行管理を行い、メンバーにあったやり方をいろいろ試しながら進めている。

知名町公民館講座で語彙データ収集をテーマに設定し1年実施しただけで、これだけのことが地域言語コミュニティ内で進んだという事実は、言語学者と協働した地域言語コミュニティによる主体的かつ持続可能な言語の保存が不可能ではないことを示唆する。「これだけのこと」とは、自主的にスタート、チーム形成、ピアトレーニング；短期間で基礎語彙収集、音声付き、研究者とデータ共有してDB化、オンライン辞書で公開、逐次更新などを指す。

# 「消滅危機言語の保存研究」評価報告

## 令和5年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

現在話されている日琉語諸方言データの収集に関して、「増やす」「深める」「広げる」という観点から第3期のプロジェクトの成果を発展させる、という本プロジェクトの目的は、計画を上回って順調に進んでいるように見受けられる。また、共同利用・共同研究、大学院教育・若手研究者育成、地域・社会との連携、グローバル化、いずれも計画どおり、あるいはそれ以上に実施されている。特にアウトプットの面では、極めて積極的に実施されているようである。成果の公開についても、若手育成のためのチュートリアルや地域・社会連携のシンポジウム等イベントの開催についても、計画を上回って実施されているようであり、このことは高く評価できる。なかでも、地域・社会との連携では、単発のイベントだけでなく、一般向けの講座を継続的に行ったり、成果を社会に還元するイベントを開催するなど、これまで作り上げてきた地域との関係をさらに深めているものと思われる。本プロジェクトがこのような活動を今後も引き続き実施していくことが期待される。

以上のことからプロジェクトの活動は、総合的に「計画を上回って実施された」と評価できる。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

共同研究員が各自の担当地域でフィールドワークを実施し、その成果を研究会で報告し、さらにプロシーディングスを出版・機関リポジトリで公開している。報告書を見ると、計画されていたアクティビティ「語彙データベースの拡充」、「文法資料データベースの構築」、「文化庁談話資料データベースの構築」のいずれも計画を上回って実施されているようである。国内外の大学と連携した研究会等の開催や研究打合せも複数回にわたって実施されているほか、他のプロジェクトや他機関との研究交流の幅も広がっていることが認められる。その成果についても、積極的に発信・還元していることは高く評価できる。

#### 2. 教育・人材育成について

2023年度は、プロジェクト・メンバーのふたりが、総研大でフィールド言語学の授業を開講している。また、チュートリアルを開催したり、プロジェクトの非常勤研究員として若手研究者3名を雇用したり、共同研究員として大学院生4名をプロジェクトに参加させているなど、直接的に大学院生や若手研究者の教育・育成に携わっている。さらに、研究発表会を開催することで若手研究者に発表の機会を提供したり、調査旅費、研究会やチュートリアル等の参加旅費を支援したりすることで、背後のサポートも手厚く行っている。

チュートリアルについては、計画されていた談話資料の電子化チュートリアルのみならず、フィールドワークチュートリアルも開催している。このチュートリアルは、1日の座学の後に3日間の実習を行うなど、具体的かつ実践的な内容にする工夫がなされている。本プロジェクトが計画を上回って積極的に若手研究者の育成に努めてきたことが見受けられる。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

本プロジェクトの最も高く評価できる点が社会連携・社会貢献である。

与那国町や文化庁との危機言語サミットの共催は計画どおりに実施されている。和泊町や知名町との連携協力協定に基づく取り組みの計画についても、辞典製作を開始したり講演会や講座を開催するなど、具体的な活動として実施されている。これらは、研究成果の社会への還元という観点からも意義のある活動だと思われる。さらに、総括にも書いたとおり、単発のイベントだけでなく、毎月一般向けの講座を行うなどの継続的な活動が行われている。このような継続性のある活動は地域連携のあるべき形のように思う。地域にも理解されやすい社会連携・社会貢献が継続的に行われていることは高く評価できる。これらの活動は、いずれも計画を上回って実施されている。さらに、静岡県でのフィールド調査とシンポジウムの開催は、計画にはなかったことであり、計画以上の活動が行われていると考えられる。

#### 4. 国際連携・国際発信について

計画していた海外の研究員の受け入れが実施され、継承保存についての議論が行われたほか、研究会も数度にわたって開催されるなど、受け入れ後にしっかりと共同研究につながっている。米国ハワイ大学との協定についても、先方の教員2名の訪問を受けて連携事業についての具体的な議論を行ったり、先方の学生をフィールド調査に同行させ、フィールド調査のサポートをしたりと、名ばかりの協定ではなく、具体的な活動が行われている。いずれも計画どおりに実施されていると評価できる。また、国際シンポジウムについても次年度の開催に向けて準備が進められている。

#### 5. その他特記事項

- ・辞書作成についての補足説明がなされているが、試行錯誤しながら、進められている様子が見受けられる。完成が期待される。
- ・講演やシンポジウムが多数開催されているが、その具体的な内容について少し説明が欲しかった。

# 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多言語・多文化社会における言語問題に関する研究

プロジェクトリーダー：朝日 祥之

## 令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	B

## I. 計画期間内の概要

### 1. 目的及び特色

本プロジェクトは、多言語化が進んだ日本社会で発生している言語問題の中でも、日々の言語生活に欠かさない分野である行政、医療福祉分野における言語問題の所在を明らかにするための社会調査を実施する。その上で言語問題の解決を目指すことを目的とする。

多言語化・多文化による社会変容により、特に行政・医療福祉分野における言語問題が生じている。国立国語研究所においても、「外来語言い換え提案」「病院の言葉」に関するプロジェクト、大規模自然災害をきっかけとして提唱された「やさしい日本語」など、その成果は少なくない。ただし、これらはそれぞれ「国語問題・国語施策」、「日本語問題・日本語施策」のための研究であり、多言語化・多文化した日本社会の言語問題を包括的に捉えることにはならない。本プロジェクトでは、国立国語研究所で実施された「国語・国字・日本人の視点」による言語生活研究の再定義を行い、行政・医療福祉分野における言語問題を把握する。本研究の最終的な目的は、行政、医療福祉分野における言語問題をリアルタイムに捉え、その解決に向けた提言を行うことにある。

本プロジェクトでは、多言語化・多文化による社会変容によって生じた日本社会において、行政と医療福祉の専門家・非専門家のそれぞれに生じている言語問題について、専門家、非専門家双方を対象にした社会調査を実施する。社会調査のデータを公開するとともに、言語問題を把握するための調査の実施、そこで得られたデータを活用した分析を実施する。

なお、実施にあたっては、人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」、並びに同機構共創先導プロジェクト「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」と連携する。

### 【研究組織】

本プロジェクトは次のような研究班を組織する。

- ・自治体調査研究班：自治体における言語使用・使用意識に関する社会調査を企画・実施する。
- ・外来語研究班：行政・医療福祉分野における外来語をめぐる今日的な課題を捉えるための実態調査・意識調査を企画・実施する。
- ・言語変異研究班：言語生活の実態から言語問題の所在を的確に捉えるための基礎研究としての言語変異を捉える調査研究を企画・実施する。

- ・言語景観研究班：公共景観を構成する景観（言語景観・音景観）に関する調査研究を企画・実施する。
- ・手話研究班：日本手話・日本語対应手話の使用実態を捉える，そこに内在する言語問題を明らかにするための調査研究を企画・実施する。
- ・言語使用研究班：多言語使用，リテラシーなどの課題についての調査研究を企画・実施する。

#### 【研究成果】

- ・各研究班で実施する社会調査，言語調査，フィールドワークによりデータ収集を行う。社会調査についてはデータ集を刊行し，調査結果をリアルタイムに発信していくと共に調査データの公開を行う。その他の調査で得られた成果は，国内外の会議等での口頭発表，シンポジウムの開催，研究論文の刊行などを通じて発信する。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022 (R4) 年度 2022. 4 ～2023. 3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	専門家調査（自治体調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催
2023 (R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	専門家調査（医療福祉調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催 若手育成のためのチュートリアル開催 シンポジウムの開催 調査報告書の刊行
2024 (R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	言語生活調査（外来語調査・言語使用調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催 シンポジウムの開催 調査報告書の刊行 社会調査データを活用した研究書の刊行
2025 (R7) 年度 （前半） 2025. 4 ～2026. 3	社会調査の企画と実施 社会調査に基づく研究成 果の公開 研究成果の公表	言語生活調査（言語使用調査）の設計・実査 シンポジウムの開催 年2回，研究発表会の開催 一般講演会(NINJAL フォーラム)の開催 調査報告書の刊行
	暫定評価	

2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	研究成果のまとめ	研究成果をまとめた研究書の刊行 年2回, 研究発表会の開催 若手育成のためのチュートリアル開催
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	最終まとめ	啓蒙書・普及書の刊行 年1回, 研究発表会の開催

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 27,000千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等 (アクティビティ)

- (1) 日本に居住する外国人とその子弟における日本語・(外国人の場合) 彼らの第一言語に見られる言語変異を的確に捉えるためのフィールドワークを2023年7月より神奈川県愛川町で実施し, 日本語による自然発話(17人分 25.5時間), ならびに彼らの第一言語(ブラジルポルトガル語・スペイン語)による自然発話(17人分, 25.5時間分) データを得た。
- (2) 日本語の現時点での言語変異を的確に捉えるためのフィールドワークを2023年7月より神奈川県愛川町, 静岡県静岡市, 群馬県前橋市・高崎市, 静岡県磐田市で実施し, 自然発話(56名分, 82.5時間) データを得た。また, 日本語に見られるアクセントの体系記述を行うためのフィールドワークを2023年7月より神奈川県愛川町, 群馬県前橋市, 静岡県静岡市の生え抜き話者を対象に実施し, 12名から調査データを得た。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) オーストリア科学アカデミー・消滅言語文化継承委員会との協定にもとづいた研究打ち合わせを4月に行い, 今後の計画について協議した。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 人間文化研究機構「コミュニケーション共生科学の創成」とは2023年10月に開催したオンラインシンポジウム「日本のことばを知る・学ぶ」を共同開催した。
- (2) 人間文化研究機構「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」とは言語使用研究班における外国人調査グループでの調査設計をする上での連携を図った。
- (3) 国立国語研究所「定住外国人のよみかき研究」とは本プロジェクトで実施している日本居住の外国人対象の調査研究の企画・設計において助言を得た。
- (4) 科学研究費補助金(基盤研究(C))「難解な感染症関連用語の言い換えや説明の案出と理解促進効果の検証」(課題番号: 21K00551)とは「コロナ関連用語に関する意識調査」の企画・設計において連携を図った。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) データサイエンスを専門とする研究者と調査データ(自治体調査, コロナ関連用語の意識調査)の分析をともにを行い, その成果を研究発表会(2月17日)で発表してもらった。

### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 令和3年度に実施した日本人・外国人を対象とした社会調査（「日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査」）のデータ整備を進め、報告書を3月に刊行した（<https://doi.org/10.15084/0002000253>）。
- (2) 令和4年度に全国の住民を対象に実施した「現代日本語における外来語使用実態調査」のデータ整備を進め、3月に報告書の刊行を行った（<https://doi.org/10.15084/0002000252>）。
- (3) 令和4年度に全国の自治体を対象に実施した「行政情報をわかりやすく伝える工夫に関する意識調査（自治体調査）」のデータ整備を行い、報告書の準備を進めた。
- (4-1) 令和5年度に「コロナ関連用語に関する意識調査」を3回（6月、10月、2月）に調査会社に委託することにより実施し調査データの整備を行った。
- (4-2) 「新型コロナ関連用語に対する意識調査（追加調査）」を2023年10月に実施し、調査データの整備を進めた。
- (4-3) 「日本語におけるプロソディ変異に関する実態調査」を札幌市、東京都区、鹿児島市で2024年1月、2月に各地点で20名、計60名を対象に調査会社に委託することにより実施し、調査データの整備を進めた。
- (4-4) 「日本語アクセントにおける実態調査」の継続調査を広島県広島市を対象に調査会社に委託することにより2023年4月に実施し、分析を進めた。その結果を2024年3月に開催された研究発表会で報告してもらった（[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20240317b/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240317b/)）。

### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1-1) 手話研究班によるオンラインシンポジウム「日本のことばを知る・学ぶ：手話と日本語とが飛び交う飲食店の日常空間」を2023年10月1日に開催し、シンポジウムには飲食店を経営するろう者3名に登壇してもらった。当日はYouTubeによる配信を行った。イベントには454名の申し込みがあり、当日は最大で222名の視聴者を得た。
- (1-2) 「日本社会におけるダイバーシティ研究の最前線：インクルーシブな社会の実現のために」を2024年2月10日に対面形式により開催し、60名の参加を得た。
- (1-3) プロジェクトの成果を発信するための研究発表会を2024年2月17日と3月17日にオンラインで開催し、それぞれ54名、41名の参加を得た。
- (2) 第18回NINJALフォーラム「国語研の言語生活研究の75年：生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」をハイブリッド形式で2023年12月16日開催し、190名の参加を得た。当時の講演・ディスカッションの録画映像を国語研YouTubeチャンネルより配信している（[https://youtu.be/J1E\\_G421IBE?si=bKeE9rk21Bh5bZKC](https://youtu.be/J1E_G421IBE?si=bKeE9rk21Bh5bZKC)）。

### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 2022年度、2023年度に実施した調査（自治体調査、外来語調査、音韻調査等）で得た調査データを活用した分析結果をまとめた論文を計量国語学、CLSに投稿し、掲載が決まった。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を新たに3名雇用し、プロジェクトで実施されている調査（アクセント調査、外国人居住者調査、新型コロナ関連用語意識調査）の企画・実施を担当した。

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大での講義（「言語科学概論」「フィールド言語学」）で本プロジェクトで進めている調査手法（言語変異研究法）を紹介した。

#### **大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加**

- (1) 大学院生（7名）をプロジェクトに参画させた。プロジェクトでは（1）外国人調査のインタビュー（ブラジルポルトガル語による調査）としてインタビューを担当させた。まこの他にも（2）調査会社による調査データの整備を担当させ、報告書データの整備を行った。その一部を口頭発表させる機会（社会言語科学会）を与えた。

#### **若手研究者への発表の機会の提供**

- (1) 国内学会（社会言語科学会）で研究成果の一部について、若手研究者（3名、プロジェクト非常勤研究員）らに共同で口頭発表をする機会を提供した。

### **3. 地域・社会との連携に関する計画**

#### **地域・社会との連携**

- (1) フィールドワークで調査対象とした地域（神奈川県愛川町、群馬県前橋市、静岡県静岡市・磐田市）とは、調査対象者の選定を行う上で、教育委員会との連携を図った。
- (2) 定住外国人調査を実施している自治体（群馬県地域創生部ぐんま暮らし・外国人活躍推進課）と連携し、当該自治体により実施された調査データの提供をしてもらった。

### **4. グローバル化に関する計画**

#### **海外の研究者の受入**

- (1) 海外の研究者と共同での調査を神奈川県愛川町に居住するブラジル人・ペルー人を対象に2023年7月より実施した。また、静岡県浜松市・磐田市・東京都江戸川区等での実査に向けた調整を現地のコーディネータとともに行った。
- (2) 海外の研究者との月に1回、定例オンラインミーティングを実施した。

#### **英語による研究成果の発信等**

- (1) 研究成果（新型コロナウイルス関連用語調査、アクセント習得）を取りまとめたものを英文論文としてCLSに投稿し、掲載が決定した。

# 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」評価報告

## 令和5年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

本共同研究プロジェクトは、多言語化が進む日本社会が直面する言語問題の中から、行政、医療福祉分野における問題の所在を解明するための社会調査を実施し、その解決を目指すことを目的に、6つの研究班を組織して遂行されている。6年計画の2年目に入り、調査の実施、収集したデータの公開、分析とその結果の発表というサイクルは、ひと通り整備された。

4つのサブプロジェクトのうち「共同利用・共同研究に関する計画」の進捗状況は、ほぼ計画どおりであり、自己評価は「A」ではなく「B」が妥当と判断する。これを踏まえ、外部委員評価は「B」とする。以下に個別の項目について問題点を記載するので、今後のプロジェクト運営の参考にしてほしい。

全体的なコメントとして、自己点検報告書には、より具体的な記述を希望する。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

神奈川県愛川町に居住する外国人を対象としたフィールドワーク、ならびにそのベースラインとして活用する日本語データ収集を目的として、同町を含む5地点でフィールドワークが行われた。令和3～5年度に実施した調査については、報告書の刊行と準備、およびデータ整備が進んでいる。他プロジェクトと合同の活動、異分野の研究者との協業等も、積極的に実施されている。合計4回開催された公開の研究発表会等のうち、手話研究班によるオンラインシンポジウムに、当事者であるろう者が3名参加したことは、高く評価したい。

一方、オーストリア科学アカデミー・消滅言語文化継承委員会との協定にもとづく研究打ち合わせに関しては、「今後の計画について協議した」との記述があるのみである。順調に推移しているかどうかを評価するには、協議内容の具体的な記載が求められる。

#### 2. 教育・人材育成について

非常勤研究員は計画どおり3名雇用され、プロジェクトの調査を企画・実施した。また、予定の3名を大きく上回る7名の大学院生が参画し、インタビューを担当したほか、報告書データ整備にも従事した。国内学会での口頭発表の機会も与えられている。

昨年指摘したが、総研大での講義の内容については、内容をさらに詳しく記述することが強く望まれる

#### 3. 社会連携・社会貢献について

「成果の概要」と「令和5年度の活動（項目ごとの状況）」の記載内容がほぼ同一になっているが、後者にはより詳細、かつ具体的な記載が求められるのではないかと。

「3. 地域・社会との連携に関する計画」には、フィールドワーク対象地域の自治体として、神奈川県愛川町、群馬県前橋市、静岡県静岡市、磐田市が列挙されている。一方、「1. 共同利用・共同研究に関する計画」には、神奈川県愛川町、静岡県静岡市・磐田市、群馬県前橋市・高崎市で教育委員会との連携を図り、調査対象者の選定を行ったと記されている。群馬県高崎市では、このような連携

はなかったとの理解でよいか。この理解が正しい場合、特段の理由があつて連携しなかったのか。

定住外国人調査を行っている自治体から調査データの提供を受け分析を進めた点は、評価できる。今後、他の自治体との連携の可能性も模索してほしい。

#### 4. 国際連携・国際発信について

神奈川県愛川町に居住するブラジル人・ペルー人を対象として、海外研究者との共同調査が始まった。3年目以降の進展に期待したい。研究所の共同研究プロジェクトの中には、他にも地域社会に定住する外国人を対象とするものがある。今後は、このようなプロジェクト間の積極的な連携、横断的な研究活動の推進にも期待したい。

国際誌には、論文が2本投稿されている。引き続き、共同研究の成果を広く世界に発信する努力が重要である。

令和5年度は、国内での研究活動を軌道に乗せることに注力し、それなりの成果を上げていると判断するが、国際連携・国際発信は今後の大きな課題である。多言語化がもたらす言語問題を解決するには、日本以外の国や社会がこのテーマにどのように取り組んできたかという視点が欠かせない。来年度以降、重点的に取り組むことが望まれる

#### 5. その他特記事項

特になし。

# 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

## 令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

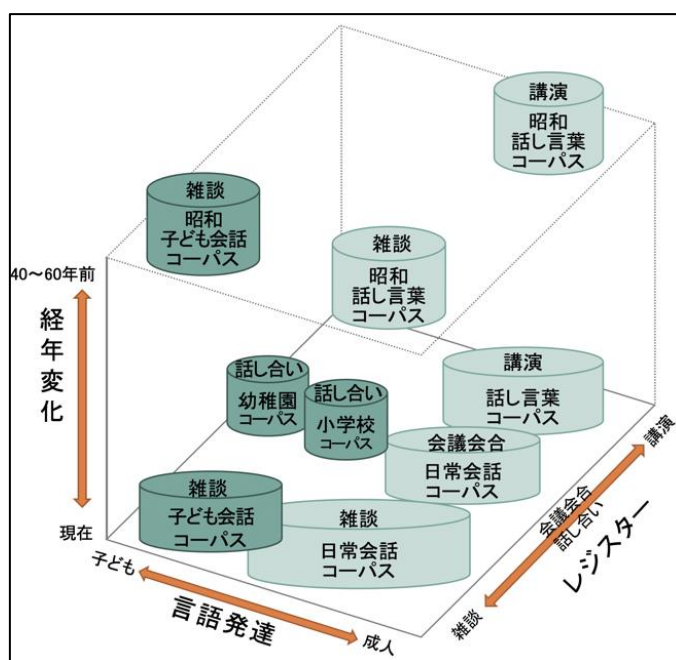
## I. 計画期間内の概要

### 1. 目的及び特色

本プロジェクトは、子どもを中心とする多様な場面・相手との会話を含む映像付きコーパスを新たに開発し、成人中心の既存のコーパスと接続させることで、コミュニケーションを含む言語の発達・変化の過程を、子どもから高齢者まで多世代に渡り実証的に研究できる基盤を構築することにより、日本における言語発達研究を幅広い分野の研究者との連携体制のもとで展開させることを目的とする。また、各種会話コーパスを活用した技術開発を見据えた基礎研究を推進する。

これまで乳幼児を含む子どもの言語発達に関する研究が数多く行われてきたが、発達研究は乳幼児に限られるものではなく、学童期、青年期、成人初期、壮年期、老年期など、多世代に渡り見ていく視点も不可欠である。特に、高齢者や子育て世代の孤立など家族の問題が複数世代化し、多世代交流が国の重要施策の一つとして掲げられるなか、乳幼児から高齢者までの多世代を対象に、日常生活の中で交わされるリアルな会話を映像まで含めて記録したコーパスを構築・公開し、各世代の言語使用・コミュニケーション行動の実態やその発達・変化を実証的・多角的に研究することは、学術のみならず社会的にも重要な課題である。

そこで本プロジェクトでは、『子ども日常会話コーパス』『幼稚園話し合いコーパス』『小学校話し合いコーパス』『昭和子ども会話コーパス』（いずれも仮称）を整備した上で、第3期までに構築してきたコーパスと合わせて活用することにより、話し言葉の特性を、①言語発達、②言語教育、③時代による言語の変化、④話し言葉のレジス

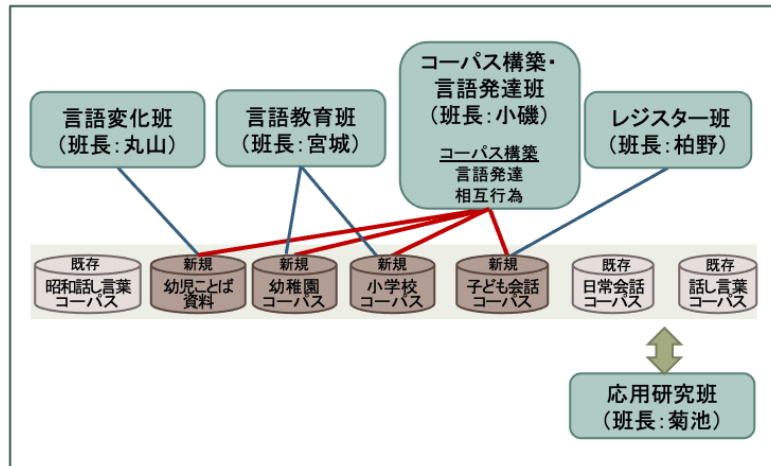


ターの多様性の観点から明らかにすると同時に、⑤各種話し言葉コーパスを活用した情報工学的応用可能性について探る。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

### ◆ 全体計画・研究組織 ◆

本プロジェクトの実施にあたって、図に示す5つの班を組織して研究を推進する。



**言語発達班：**子どもを中心とする会話を収録した映像付きコーパスを新たに構築した上で、成人中心の『日本語日常会話コーパス』（CEJC）も活用することにより、コミュニケーションを含むことばの発達の過程を子どもから成人まで多世代に渡り実証的に研究する。言語発達研究において層の薄い学童期の児童やバイリンガル環境の子どものデータも拡充することで、日本語教育も含めて発達研究を幅広く推進する。

**教育・発達 G：**言語発達班と共同で幼稚園および小学校での話し合い活動を中心としたデータを収録し映像付きコーパスを構築した上で、幼児期から学童期にかけての言語使用やコミュニケーション行動の実態とその発達を言語教育の観点から研究する。

**言語変化班：**成人を中心とする50年前の話し言葉と、現代の話し言葉を納めたコーパスを活用し、成人の話し言葉の経年的な変化を実証的に研究する。また50年前の子ども（1名）の会話を対象とする小規模コーパスを新たに構築し、子どもや子どもと接する母親の話し言葉の経年的な変化も研究する。

**レジスター班：**雑談や話し合いなど多様な場面の会話を含む成人中心のCEJCと、子どもの雑談中心の『子ども日常会話コーパス』や話し合いを中心とする『幼稚園話し合いコーパス』『小学校話し合いコーパス』を主対象に、国語研所有の多様なレジスターのコーパスも合わせて活用することにより、子どもから成人までの年齢層ごとに言葉のレジスター的多様性を実証的に研究する。

**応用研究班：**第3期で拡充した話し言葉コーパスを活用した情報工学的応用可能性について、基本周波数推定、音源分離、音声認識などの音響処理技術や、会話音声から盛り上がりや話者の感情・態度推定やターン認識などのコミュニケーション評価技術などの観点から検討する。高齢者や子育て世代の孤立という問題は技術的な支援も重要となる。こうした技術開発を見据えた基礎研究をコーパス開発と同時に進め、コーパスを評価する。

◆ 年次計画 ◆

2022 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li>   <li>・データ公開</li> <li>・成果発表</li> <li>・書籍刊行</li> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：収録・転記・情報付与開始</li> <li>・幼稚園会話コーパス：収録・転記開始</li> <li>・小学校会話コーパス：収録・転記開始</li> <li>・昭和子どもコーパス：データ整備・転記開始</li> <li>・日本語日常会話コーパス：RDB 一般公開</li> <li>・シンポジウム：2回</li> <li>・日常会話コーパス関連の論文集：1冊</li> <li>・コーパス講習会：2回</li> <li>・チュートリアル：1回</li> </ul>
--	---

2023 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li>   <li>・成果発表</li> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：データ収録・転記・情報付与継続</li> <li>・幼稚園会話コーパス：収録・転記・情報付与継続</li> <li>・小学校会話コーパス：収録・転記・情報付与継続</li> <li>・昭和子どもコーパス：転記継続</li> <li>・子ども会話コーパス：30 時間プロジェクト内部公開</li> <li>・シンポジウム：1回</li> <li>・コーパス講習会：2回</li> </ul>
---	--

2024 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li>   <li>・データ公開</li> <li>・報告書刊行</li> <li>・成果発表</li> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・小学校会話コーパス：収録・転記・情報付与継続</li> <li>・昭和子どもコーパス：転記継続</li> <li>・子ども会話コーパス：50 時間モニター公開</li> <li>・昭和子どもコーパス：本公開</li> <li>・子ども会話コーパスモニター版の設計の報告書：1冊</li> <li>・シンポジウム：1回</li> <li>・コーパス講習会：1回</li> </ul>
---	--

2025 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li>   <li>・データ公開</li> <li>・成果発表</li> <li>・書籍刊行</li> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・小学校会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・子ども会話コーパス：100 時間プロジェクト内部公開</li> <li>・幼稚園会話コーパス：プロジェクト内部公開</li> <li>・シンポジウム：1回</li> <li>・研究シリーズ「言語資源学」 話し言葉コーパスの設計・構築関連の書籍：1冊</li> <li>・コーパス講習会：1回</li> </ul>
--	--

## 2026 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ データ収集・整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子ども会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・ 幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・ 小学校会話コーパス：転記・情報付与継続</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ データ公開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子ども会話コーパス：100 時間モニター公開</li> <li>・ 小学校コーパス：プロジェクト内部公開</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 成果発表</li> <li>・ 書籍刊行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ シンポジウム：1 回開催</li> <li>・ 研究シリーズ「言語資源学」 話し言葉コーパスの活用法関連の書籍：1 冊</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コーパス講習会 1 回</li> </ul>

## 2027 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ データ収集・整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子ども会話コーパス：情報付与継続</li> <li>・ 幼稚園会話コーパス：情報付与継続</li> <li>・ 小学校会話コーパス：情報付与継続</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ データ公開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子ども会話コーパス：本公開</li> <li>・ 幼稚園コーパス：本公開</li> <li>・ 小学校コーパス：本公開</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 成果発表</li> <li>・ 書籍刊行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ シンポジウム：1 回開催</li> <li>・ 子ども会話コーパス関連の論文集：1 冊</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コーパス講習会 1 回開催</li> </ul>

## II. 令和 5 年度の活動

令和 5 年度予算額 27,300 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 『子ども版日常会話コーパス』構築作業として、経年調査収録を終了し公開予定の 100 時間（8 世帯 14 児）のデータ収集を終え、既収録データの整備を進めた。100 時間のうち 50 時間を 2024 年度に一般公開するために、協力世帯を対象にヒアリングを実施し公開内容等に問題がないかを確認するとともに、映像や音声のマスク処理を進めた。
- (2) 『昭和子ども会話コーパス(仮)』構築作業として、昭和 40～50 年代に国語研で収録した子ども中心の会話データ 100 時間のうち 98 時間について文字化二次作業を終了した。
- (3) 『幼稚園会話コーパス(仮)』については、幼稚園側の都合で、新たな収録はできなかったが、かわりに既収録分の文字化作業を進めた。
- (4) 『小学校会話コーパス(仮)』構築作業として、小学校での話し合い活動の収録を本格的に開始し、1～5 年生の国語・算数・理科・総合・道徳・音楽・家庭の話し合いを収録した。
- (5) 『日本語日常会話コーパス』に基づく音声合成の有効性検証のため、クラウドソーシングで募集した 54 名の作業による合成音声の自然性および感情の評価を実施した。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 富山大学教育学部と連携し、今年度は特に『小学校話し合いコーパス(仮)』構築作業として小学校の授業での話し合い活動の収録を進めた（「データベース等の構築」4 参照）。

## 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「言語運用」プロジェクトと連携し、海外大学等と連携して進める学習者談話縦断研究のうち縦断調査データの転記作業を支援した。具体的には、作業の効率化のために、自動音声認識モデル Whisper (openAI)を導入することとし、技術支援を行うとともに、自動認識後の人手整形作業を分担して実施した。
- (2) 「学習者辞書」プロジェクト及び言語資源開発センターと共催で、初級者編と中級者編の2回の講習会を実施した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。

## 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国立障害者リハビリテーションセンター研究所と連携し、『日本語日常会話コーパス』に付与した自閉症スペクトラム指数調査に基づき自閉傾向と終助詞使用との関係に関する研究を行い、その成果を第48回社会言語科学会研究大会で発表したところ、大会発表賞を受賞した  
(<https://www.jass.ne.jp/about/prize-conf/winner/>, 2024年3月)。また同センター及び昭和大学発達障害医療研究所と協力し、自閉症者の会話データの収録を開始した。日本語の自閉症者を対象とする公開コーパスは存在しておらず、今期中にコーパスとして公開する計画である。

## 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 『子ども会話コーパス』のうち、2024年度に一般公開予定の50時間について、プロジェクト共同研究員に限定して先行公開した。
- (2) 本プロジェクトでは、第3期の研究成果である『日本語日常会話コーパス』の研究可能性を高めるために、追加アノテーションなどを新に施し公開する活動を進めている。今年度は次のデータベース1件、アノテーション4件、計5件を公開した。

『日常会話コーパス』リレーショナルデータベース（各種アノテーションを統合したDB）

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/rdb.html>

話者間関係性・年齢の上限関係アノテーション

根拠資料：[https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/data\\_relation.html](https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/data_relation.html)

分類語彙表番号アノテーション CEJC-WSD Version 202403（契約者のみアクセス可）

『日常会話コーパス』短単位語彙表（分類語彙表番号つき）

根拠資料：<https://repository.ninjal.ac.jp/records/2000167>

会話分析式トランスクリプト Ver. 202304

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/data202304.html>。

## 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 計画していたシンポジウム2件に加え、プロジェクトの活動と関連する諸学会と連携したシンポジウム・研究会3件を共催し、共同研究員が計46件の発表を行った。
  - ・人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会第14回対話システムシンポジウム，2023年12月13-14日，国立国語研究所，参加者309名  
<https://jsai-slud.github.io/sig-slud/99th-sig.html>
  - ・音響学会音声研究会・電子情報通信学会バーバル・ノンバーバル研究会，2024年2月16日，国立国語研究所  
<https://asj-spcom.acoustics.jp/>
  - ・ことば・認知・インタラクティブシンポジウム12，2024年2月28日，国立国語研究所，参加者46名  
<https://www.jdri.org/archives/1296>
  - ・人工知能学会第100回言語・音声理解と対話処理研究会，2024年2月29日-3月1日，国立国語研究所，参加者111名  
<https://jsai-slud.github.io/sig-slud/100th-sig.html>

- ・ 日常会話コーパスシンポジウム IX, 2024 年 3 月 18 日, オンライン, 参加者 259 名  
<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/event/sympo9.html>
- ・ 2023 年 11 月 5 日 NINJAL シンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」において、『日本語話し言葉コーパス』『日本語日常会話コーパス』利用のべし・べからずについて」というタイトルでオンライン発表を行い, 講演動画を YouTube で公開した。  
[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20231105a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105a/)  
<https://www.youtube.com/watch?v=a93bDt7MB7Q>

#### 書籍・論文等による研究成果の公表 (アウトプット)

- (1) 『日本語日常会話コーパス』を活用した研究をまとめた論文集の編集を進め, 1 本を除き入稿を終えた。
- (2) 第 4 期に研究所として新たに設けた入門書である「言語資源学」シリーズとして, 「日常会話コーパス」の知見をまとめた『会話コーパスの設計・構築法・利活用法』を企画し, 執筆を進めた。2025 年度に刊行する計画である。
- (3) 今年度は, 『日本語日常会話コーパス』など既存のコーパスを中心としつつ, 構築中の「子ども会話コーパス」も合わせて研究を進めた。こうした研究の成果を, 論文 10 本, ブックチャプター 6 本, 発表・講演 82 件, コーパス・データベース 5 件として公表した。

#### データベース等に関する講習会・講演会 (アウトプット)

- (1) 「学習者辞書」プロジェクト及び言語資源開発センターと共催で, 次の通り初級者編と中級者編の 2 回のコーパス講習会を実施した (再掲)。
  - ・ オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】 2023 年 11 月 5 日 (参加者 109 名)  
[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20231105b/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105b/)
  - ・ NINJAL チュートリアル『日本語日常会話コーパス』の活用ー『中納言』の使い方ー 2023 年 12 月 2 日 (参加者 139 名)  
[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20231202a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231202a/)

#### データベース等を使った研究成果・利用実績 (アウトカム)

- (1) 『日本語日常会話コーパス』活用のための講習会を 2 回開催するなどしたことにより, オンライン検索システム「中納言」の登録ユーザ数・年間検索数は, 2022 年度が 6435 人, 15 万件だったのに対し, 2023 年度は 13530 人 (7095 人増), 20 万件 (前年度比 130%) となるなど, 広く活用された。コーパスについては言語資源の代表的な国際会議 LREC2022 で報告しているが, 当該論文は SciVal の調べで Top5% の被引用数であり (令和 6 年 5 月調査), このことから本コーパスが広く活用されていることが分かる。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大において『日本語日常会話コーパス』など国語研で構築した話し言葉コーパスを活用した「言語資源学」と「言語資源学演習 2」を担当した。
- (2) 一橋大学においても国語研で構築した話し言葉コーパスを用いた実践的演習を行った。また 2023 年度は博士論文 2 本の副査を担当した。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を 4 人雇用し, コーパス構築とそれに基づく研究を行うとともに, R による統計手法や Unix での処理などを実践的に学ぶ機会を設けることにより, コーパスを活用した高度な言語学的研究を推進できる人材を育成した。うち 1 名は国立大学に就職した (助教・常勤)。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生 10 名を含む若手研究者 37 名をプロジェクトに迎え、『日本語日常会話コーパス』などの有償版コーパスを無償提供するとともに、講習会などの機会を通して利用方法を具体的に学ぶ機会を提供した。また共同研究員が指導する学生にも同様の機会を提供した。その結果、『日本語日常会話コーパス』を活用したものとして、卒論 23 本（東工大・千葉大・宇都宮大・早大・同志社・中京大・東京女子大）、修論 1 本（千葉大）、博論 3 本（一橋大・筑波大・千葉大）の成果にむすびついた。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) プロジェクトの各班合同のシンポジウム「日常会話コーパス」IX（2024 年 3 月 18 日）において、学生 4 名を含む若手研究者 9 名に発表の機会を提供した。また若手研究者を含むプロジェクトメンバーの情報交換と議論を深めるために、非公開のショートトークの会を 2 回開催した。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 「学習者辞書」プロジェクト及び言語資源開発センターと共催で、次の通り初級者編と中級者編の 2 回のコーパス講習会を実施し、合計で 97 名の学生を含む 248 名が参加した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。
- (2) 『日本語日常会話コーパス』を活用した会話分析初級者セミナー（2023 年 9 月 4-6 日）、Advanced CA Seminar（2024 年 3 月 1-6 日）が開催された。
- (3) 『日本語日常会話コーパス』について、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを 164 の授業・講義（受講者計 5871 名）に対して発行し、大学の授業に貢献した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 産業界との連携

- (1) 「日本語日常会話コーパス」の情報工学的応用可能性について検討する「応用研究班」を設け、民間企業の研究者 5 名も共同研究員等に加えて研究を推進した。また人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会と共催で「対話システムシンポジウム」「第 100 回言語・音声理解と対話処理研究会」を国立国語研究所で開催して連携を深めた（詳細は「公開の研究発表会」参照）。

### 研究成果の社会への発信・還元

- (1) プロジェクトで継続して整備・公開を続ける『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』『昭和話し言葉コーパス』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度合計で無償版 7887 件、有償版 71 件の新規利用申請があった。有償版のうち 8 件は産業界での利用であり、言語学・日本語学だけでなく音声認識・AI モデル開発なども含む幅広い分野で活用されている。

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

- (1) 海外の研究者 5 名を共同研究員として加え、海外での映像付きコーパスの公開・利用状況や、個人情報扱いなどについての情報交換も行いながら、研究を推進した。

### 海外の大学との連携等

- (1) 「言語運用」プロジェクトが海外大学等と連携して進める学習者談話縦断研究のうち縦断調査データの収集・整備を支援した（「他のプロジェクトとの合同の活動等」参照）。
- (2) 『日本語日常会話コーパス』を活用した Advanced CA Seminar（講師：Paul Drew and Monica Simone, 2023 年 3 月 1-6 日）が開催された。

### 英語による研究成果の発信等

- (1) 『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』『昭和話し言葉コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信した。このうち『日本語日常会話コーパス』について、今年度の新規登録ユーザ 7095 名のうち 1100 名が海外機関所属者である（所属先から判断がつく場合に限定）。

# 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」 評価報告

## 令和5年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

本プロジェクトの研究目的は、子供の言語活動に焦点を当てた映像付き会話コーパスを新たに開発し、既存の成人中心のコーパスと接続させることで、子どもから高齢者までの多世代に渡る言語発達・変化過程の実証的研究を推進するということである。この研究目的に沿って、コーパスの構築、研究活動は順調に進んでおり、またコーパス言語学の人材育成にも積極的に取り組み、国語研が作ったコーパスの利用が広がり、社会言語学会の大会発表賞を受賞するなど、高い評価に値する研究活動が行われている。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

共同利用・共同研究については、充実した活動が行われていると評価できる。コーパス構築に関しては、『幼稚園会話コーパス(仮)』を除き、他の3つのコーパス(『子ども版日常会話コーパス』、『昭和子ども会話コーパス(仮)』、『幼稚園会話コーパス(仮)』)は、データ収集も順調に進み、コーパス構築は進展した。また、計画になかった「日常会話コーパス」に基づく音声合成の有効性の検証を実施したことも高く評価してよい。国内外の大学や研究機関との連携、他のプロジェクトとの協力、異分野の研究者との共同研究も活発に進め、特に国立障害者リハビリテーションセンター研究所との自閉症に関する共同研究は社会言語学会の大会発表賞を受賞するなど高い評価を得た。研究の発信については、さまざまなデータベースを公開し、研究発表会・講演会・国際シンポジウムを計画を上回って開催し、多数の研究発表をし、多くの参加者があった。書籍・論文などによる研究成果の公表も着実に進んでおり、未刊のものも着々と準備が進んでいる。コーパス利用も確実に増えているのが認められる。

#### 2. 教育・人材育成について

教育・人材育成については、積極的に取り組み、成果を上げている。総研大や一橋大学において国語研が作った言葉コーパスを使った演習を担当し、2つの博士論文審査に加わった。プロジェクト非常勤研究員を4名雇用し、コーパス利用の高度な言語学的研究を推進できる人材の育成に努め、そのうち1名は国立大学の常勤職を得た。若手研究者37名をプロジェクトに迎え、コーパス利用を学ぶ機会を提供し、その結果としてコーパスを利用した卒論32本の成果にむすびついた。プロジェクトの各班合同のシンポジウムやショートトークの会を設け若手研究者に発表の機会を与えた。また若手研究者向けに初級者編と中級者編の2回のコーパス講習会を開き、97名の学生を含む右248名が参加した。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

社会連携・社会貢献についても、計画通りの成果が見られた。民間企業の研究者5名を加えた「応用研究班」を設け、「日本語日常会話コーパス」の情報工学的応用可能性について検討した。人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会と共催でシンポジウム、研究会を国語研で開催し連携を深めた。また、『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネッ

トを通して一般に発信し、多くの新規利用申請があった。

#### 4. 国際連携・国際発信について

国際連携・国際発信についても、計画通りに進んでいる。海外の研究者5名を共同研究員として加え、コーパスに関するさまざまな情報交換を行った。『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信し、『日本語日常会話コーパス』には今年度は1100名の海外機関所属者の新規登録があった。

#### 5. その他特記事項

特になし。

# 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

プロジェクトリーダー：石黒 圭

## 令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	A

### I. 計画期間内の概要

#### 1. プロジェクト全体の6年間の計画

##### 【計画概要】

本プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」は、日本語非母語話者（日本語学習者および定住外国人）の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その研究成果を教育支援に生かすことを目的とする。その目的を達成するため、以下の六つのサブプロジェクトを設置する。

##### (1) 多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究統括（担当：石黒）

下記の(2)～(6)の五つのサブプロジェクトの研究成果を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援する。

##### (2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国、台湾、韓国、ベトナムの複数の大学と日本語学習者の作文の縦断コーパス調査のネットワークを形成し、学習者600名（開始時）を対象に、1年間に3回、4年間にわたる計12回の作文調査を行うプロジェクトです。収集したデータに基づき、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにすることを目指す。

##### (3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国の2大学の日本語学習者を対象に、大学入学から卒業までの4年、1年間に2回、計8回のI-JAS準拠のインタビュー調査と、それに関連する作文調査を行い、縦断談話データベースを構築する。収集したデータを用いて、談話能力の縦断的な発達過程を作文能力との関係で総合的に明らかにすることを目指す。

##### (4) 日本語学習者の作文教育支援研究（担当：山口）

協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討する。また、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにすることを目指す。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究（担当：野山）

2007年から継続してきた東北地方における外国人定住者の縦断インタビュー調査について、第4期も調査を継続する。それとともに、過去の収集データの整備を行い、それらのデータを公開、分析することで、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにすることを旨とする。

(6) 定住外国人のよみかき研究（担当：福永）

生活者としての日本語学習者を対象に、日常生活における文字を介したコミュニケーション（よみかき実践）の種類、方略の使用、新しいメディアの活用等についてデータ収集を行い、よみかき実践研究の発展とよみかきに関わる外国人支援の充実を目指す。

【年次計画】

年次計画は下記の通りである。(1)～(6)、上記の(1)～(6)と対応する。

[2022(R4)年度]

(1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の作成・公開開始

(1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信

(1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

(2) 作文データの収集開始（1年目、年3回、600名分×3回=1,800本）

(2) 作文データのデータベース設計の検討

(3) 談話データの収集開始（1年目、年2回、西安外国語大学18名分）

(3) 談話先行データのデータベース公開準備（北京師範大学17名分、データ収集済）

(4) 作文・添削支援システムの設計、プロトタイプの実現

(4) 作文・添削実践プログラムの設計

(5) 生活者縦断調査（14年目）のデータ収集の継続

(5) 第一次（当初5年）生活者談話データの文字化・整備作業の継続

(6) よみかき研究に関連する先行研究の動向把握と資料整備

(6) よみかきの社会的実践の予備調査の試行と本調査の設計

(6) よみかきの社会的実践（本調査）実施先との交渉

(6) よみかきの社会的実践をめぐるシンポジウムの開催

[2023(R5)年度]

(1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続

(1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信

(1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

(2) 作文データの収集継続（2年目、年3回、480名分×3回=1,440本）

(2) 作文データのデータベース構築開始

(2) 作文の自動評価システム設計の検討

(3) 談話データの収集継続（2年目、年2回、西安外国語大学18名分）

(3) 談話先行データのデータベース公開（北京師範大学17名分、データ収集済）

(3) 談話研究の成果論文集の準備

(4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）を使用した予備実践開始

(4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）の機能の追加

- (4) 作文教育支援実践プログラムの一般向け解説書（実践マニュアル）の作成開始
- (5) 生活者縦断調査（15年目）のデータ収集の継続
- (5) 第一次（当初5年）生活者談話データの文字化・整備作業の完成・公開
- (5) 公開した生活者談話データ活用のための講演会または研修（ワークショップ）の開催
- (6) よみかきの社会的実践調査（本調査）・データ収集の実施
- (6) 収集した本調査よみかきデータの文字化作業

[2024(R6)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（3年目，年3回，360名分×3回=1,080本）
- (2) 作文データのデータベース構築継続
- (2) 作文の自動評価システム開発開始
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの開催
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの報告書刊行
- (3) 談話データの収集継続（3年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- (3) 談話後続データのデータベース構築開始（西安外国語大学18名分）
- (3) 談話研究の国際シンポジウムの開催
- (3) 談話研究の研究成果論文集の刊行
- (4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）を使用した予備実践継続
- (4) 作文・添削データベース構築準備開始
- (4) 作文教育支援実践マニュアルの作成開始
- (5) 生活者縦断調査（16年目）のデータ収集の継続
- (5) 第二次（次期8年）生活者談話データの文字化・整備作業開始
- (5) 生活者縦断調査・研究の成果を踏まえた論文集の刊行
- (6) 補完的よみかきデータの収集の実施
- (6) 文字化した本調査よみかきデータの分析開始

[2025(R7)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（4年目，年3回，240名分×3回=720本）
- (2) 作文データのデータベース構築継続
- (2) 作文の自動評価システム開発継続
- (3) 談話データの収集継続（4年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- (3) 談話後続データのデータベース構築継続（西安外国語大学18名分）
- (4) 作文・添削支援システムを用いた本実践開始，効果の検証
- (4) 作文・添削支援システムの試験公開，実践マニュアルの公開
- (4) 作文・添削データベースの構築開始
- (5) 生活者縦断調査（17年目）のデータ収集の継続

- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データの文字化・整備作業の継続
- (6) 文字化した本調査よみかきデータの分析継続
- (6) 個人情報の保護を含めたよみかきデータの公開方式検討

[2026(R8)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データのデータベース公開準備
- (2) 作文の自動評価システム開発公開
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの開催
- (2) 作文研究の研究成果論文集の準備
- (3) 学習者縦断談話データベースの公開準備
- (3) 談話研究支援のワークショップの開催
- (4) 作文・添削支援システムの本公開，一般向けの講習の実施
- (4) 作文・添削データベース（合計 3 回分の実践結果）の構築継続
- (4) 作文・添削データベースを用いた分析実施
- (5) 生活者縦断調査（18 年目）のデータ収集の継続
- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データの文字化・整備作業の完成・公開
- (5) 生活者談話データベース公開記念のシンポジウムの開催
- (6) 限定された範囲でよみかきデータの公開実施
- (6) 限定公開から得たフィードバックに基づく公開よみかきデータの改善

[2027(R9)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開終了
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (1) 本プロジェクトの 6 ヶ年の研究成果の共同利用推進センターへの移管
- (2) 作文データのデータベース公開
- (2) 作文の自動評価システム運用開始
- (2) 作文研究支援のためのワークショップ開催
- (2) 作文研究の研究成果論文集の刊行
- (3) 学習者縦断談話データベースの公開準備
- (3) 談話研究の国際シンポジウムの開催
- (4) 作文・添削支援システムの本公開後のメンテナンス，システムの改善
- (4) 2026 年度に構築した作文・添削データベースの公開
- (4) 作文・添削データを活用するための講習会の開催
- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データベースのメンテナンス
- (5) 生活者談話データベースを活用した研修（ワークショップ）の開催
- (6) よみかきデータの本格公開とメンテナンス
- (6) よみかきの社会的実践をめぐるデータ公開記念シンポジウムの開催

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算総額 31,421千円

### (1) 非母語話者日本語運用統括

①五つのサブプロジェクトの研究情報を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援した【共同利用・共同研究】

- ・本プロジェクトのWebサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jl1/>の管理を行い、公開を継続した。
- ・上記Webサイトより、サブプロジェクトの2023年度の研究成果の公開を行った。
- ・上記Webサイト、およびX ([https://twitter.com/jsl\\_ninjal](https://twitter.com/jsl_ninjal)) を用いて、サブプロジェクトの2023年度のイベント情報の発信を行った。

### (2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究

①海外の19大学と共同調査を実施した【共同利用・共同研究】

- ・作文縦断調査は各大学の日本語学科に入学した学習者を対象に1年に3回ずつ実施し、4年間で計12回行う予定である。2023年度は計1,691本分の作文データを収集した。調査対象となった大学は、中国7大学（北京語言大学、天津外国語大学、東華大学、重慶山峡学院、福建師範大学、華中科技大学、長春師範大学）、台湾2大学（国立政治大学、東呉大学）、ベトナム3大学（フエ大学外国語大学、ドンア大学、ハノイ工業大学）、韓国2大学（韓国外国語大学校、仁川大学校）、タイ2大学（タマサート大学、カセサート大学）、フランス1大学（フランス東洋言語文化学院）、スロベニア1大学（リュブリャナ大学）、イギリス1大学（オックスフォード大学）の計19大学である。

②収集した作文データのデータベース構築に着手した【共同利用・共同研究】

- ・2023年度までに収集した作文データについて、データベースの構築に向けて、作文が所定の形式に則って書かれているか、各種の情報のファイルがそろっているかの確認を行った。

③国際的な研究拠点形成のための準備を進めた【共同利用・共同研究】

- ・すでに学術交流協定を締結している天津外国語大学（中国）、東呉大学（台湾）、韓国外国語大学校（韓国）に加え、連携して調査に当たる福建師範大学（中国）と2023年12月に、フエ大学外国語大学、ドンア大学（ベトナム）と2024年1月に、それぞれ学術交流協定を締結した。その結果、学術交流協定を締結して共同研究を行っている大学は計6大学となった。

④サブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】

- ・サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」と連携し、収集した作文データの活用方法を検討した。

⑤工学系研究者との共同研究を継続した【共同利用・共同研究】

- ・(株)富士通の富士通研究所の研究者2名、および明星大学情報学部の研究者1名と5回ミーティングを行い、計算機によるテキスト処理の効率化の方法を検討した。

⑥研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

- ・国内外の学会や研究発表会、講演等で計9件の研究発表・講演を行った。（口頭発表1件、ポスター発表1件、ワークショップ1件、講演6件）。
- ・学術誌に論文を1本公表した。

⑦若手支援として、次のような活動を行った【大学院教育・若手支援】

- ・総合研究大学院大学での講義および一橋大学との連携大学院での演習において、本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。

- ・4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
- ・12名（一橋大学7名，明治大学1名，早稲田大学2名，筑波大学1名，金沢大学1名）の大学院生がプロジェクトのミーティングに参加し，それぞれの研究観点に基づき，収集中の作文データの分析法の発表を行った。
- ・大学院生1名の研究討論会での発表旅費を支援した。
- ・東呉大学（台湾）と共同してNINJAL チュートリアルを開催し，構築中の『日本語学習者縦断作文コーパス（W-CoLeJa）』の概要と分析事例の紹介を行った。

⑧産業界との連携として，次のような活動を行った【地域・社会との連携】

- ・作文の自動評価システム開発のため，(株)富士通を中心としたAIの専門家との共同研究を継続し，会議を6回（4月に1回，5月に1回，6月に1回，7月に1回，8月に1回，1月に1回）開催し，検討を行った。

⑨グローバル化のため，次のような活動を行った【グローバル化】

- ・共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者，中国16名，台湾4名，韓国6名，ベトナム4名，タイ3名，スロベニア3名，フランス1名，ブラジル1名，計38名を共同研究員に加え，現地調査を推進した。
- ・すでに学術交流協定を締結している天津外国語大学（中国），東呉大学（台湾），韓国外国語大学校（韓国）に加え，連携して調査に当たる福建師範大学（中国）と2023年12月に，フエ大学外国語大学，ドンア大学（ベトナム）と2024年1月に，それぞれ学術交流協定を締結した。その結果，学術交流協定を締結して共同研究を行っている大学は計6大学となった（③と重複有）。

(3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究

①海外の3大学と談話・作文の共同調査を実施した【共同利用・共同研究】

- ・西安外国語大学（中国），ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム），チュラーロンコーン大学（タイ）の学生を対象に，『I-JAS』に準拠した内容の談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。2023年度は2回分のデータを収集し，合計97時間分の談話データ，および258本分の作文データを収集した。

②収集した作文データのデータベース構築に着手した【共同利用・共同研究】

- ・2022年度に収集した談話データのうち，西安外国語大学（中国）第2回調査分25名分，約21.3時間（平均45分）について，データベース構築に向けた文字化およびアノテーション付与を行った。作文データについてはデータベース構築に向け，2023年度までに収集したデータ（第1回～第5回の3か国合計704本分）すべてに目を通し，所定の形式に則って書かれた作文であるかの確認を行った。

③先行データのデータベースを構築し，公開した【共同利用・共同研究】

- ・先行データである中国の北京師範大学の学習者17名分，約136時間（17名×平均1時間×8回）のデータベース（『B-JAS』）の構築を行い，2024年3月に中納言上で公開した。

④国際的な研究拠点形成のための準備を進めた【共同利用・共同研究】

- ・連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）およびハノイ国家大学外国語大学と2024年1月にそれぞれ学術交流に関する協定書を締結した。

⑤他のサブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】

- ・サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」と連携し，共同で開発した文字入力ツールおよびシステムを用いて作文のデータ収集を進めた。

⑥研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

- ・NINJAL シンポジウムにおいて、「『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで発表を行い、YouTube 上に公開した。
- ・先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分、約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）のデータベース（『B-JAS』）の研究成果をまとめた論文集の刊行に向けて最終準備を行った。
- ・『B-JAS』の広報および研究者によるデータの利活用を推進するため、9 月\_I-JAS 研究会において、『B-JAS』の概要や使い方を紹介する講習会を行った。
- ・データベース構築に向けた文字化、アノテーション付与を進めるために、作業従事者のためのオンライン講習会を行った。
- ・『B-JAS』を使った研究成果として、9 月\_I-JAS 研究会において、口頭発表を行った。
- ・『B-JAS』を使った研究成果として、第 26 回専門日本語教育学会研究討論会においてポスター発表を行った。

⑦若手支援として、次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院の演習において、2 名の博士後期課程の大学院生が『B-JAS』を活用した研究発表を行った。
- ・3 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
- ・3 名（一橋大学 2 名、東京外国語大学 1 名）の大学院生が本プロジェクトに参画した。
- ・大学院生 1 名の研究討論会での発表旅費を支援した。
- ・NINJAL シンポジウムにおいて、「『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで若手研究者等を対象としたオンライン発表を行った（⑥と重複有）。

⑧グローバル化のため、次のような活動を行った【グローバル化】

- ・現地調査を行う西安外国語大学（中国）2 名、ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）4 名、チュラーロンコーン大学（タイ）2 名、および現地調査を共同で行った北京師範大学 2 名（中国）、北京外国語大学 4 名（中国）、計 14 名の教員を引き続き共同研究員とし、共同研究を推進した。
- ・連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）と 2024 年 1 月に、ハノイ国家大学外国語大学と 2024 年 1 月にそれぞれ学術交流に関する協定書を締結した（④と重複有）

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究

①プロトタイプシステムにかんする情報収集と予備実践を行った【共同利用・共同研究】

- ・共同研究員全員（13 名）に対してプロトタイプを用いたデモを行い、共同研究員自身の行っている教育実践に即して、個別にプロトタイプに対するフィードバックを受けた。
- ・プロトタイプシステムを用いた予備実践を 4 大学（京都外国語大、南山大学、一橋大学、日本国内の大学）で実施した。その際、4 種類の実践プログラムを作成した。

②システムの設計・構築を行った【共同利用・共同研究】

- ・①に基づき、作文・添削支援システムの振り返り支援機能として、少グループでの振り返り、付与されたアノテーションのビューワー、外部ファイルへの作文データのエキスポート、振り返り後の作文の改訂管理機能などの設計を行った。
- ・前年構築分のプロトタイプシステムに対して、予備実践に即した拡張（匿名での添削、作文全体へのコメントなど）を行った。また、上記の設計に基づいて、振り返り支援部分の実装を行った。ただし、作文の改訂管理機能など、一部の機能は設計段階である。

・課題の文章に対してコメント付けして、グループで振り返りを行うタイプの実践プログラム3種（読解、輪読、間違い探し課題）、相互添削タイプの実践プログラム1種を設計した。

③他のサブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】

・教育現場における日本語学習者の作文執筆支援のために、「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との会議を2回（8月、9月）開催し、収集した作文データの検索・結果の集計方法（教師用）を検討した。

・「多世代会話コーパス」（プロジェクトリーダー：小磯花絵教授）のシンポジウム「日常会話コーパス」IXで、支援システムを用いたグループ学習における談話に関する予備的な研究発表を1件行った（2024年3月18日）。

④研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

・共同研究員が予備実践を行うために、機能拡張・改善した（「②システムの設計・構築」参照）プロトタイプシステムを限定公開した。

・②で作成したプロトタイプ、および、予備実践について、日本教育工学会2023年秋季全国大会、日本教育工学会2024年春季全国大会、日本語教育学会2023年度秋季大会、韓国日語教育学会で計7件の口頭発表を行った。

⑤若手支援として、次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

・2名の非常勤研究員を雇用した。

・共同研究員（大学院生）2名が実践プログラム1種を設計し、担当している大学の授業でプロトタイプシステムを用いた実践を行った。

・上記の非常勤研究員2名と共同研究員2名が学会で実践結果など4件を口頭発表する際の費用を支援した。

⑥地域・社会との連携として、次のような活動を行った【地域・社会との連携】

・今年度実施した実践プログラムを参考に、2種類のタイプの活動（単一の文章をグループで評価する活動、相互添削タイプの活動）に対して、教師用・学習者用の計4種の作成を開始した。

⑦グローバル化のため、次のような活動を行った【グローバル化】

・プロトタイプシステムのユーザインターフェイスを、多言語表示できるよう実装した。現在は、日本語・英語について表示用テキストを用意している。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究

①縦断調査を実施した【共同利用・共同研究】

・縦断調査及びフォローアップ調査を4月25日～26日にかけてフィールドで実施した。

・地域の学習者に対して、リテラシーに関するパイロット調査を7月23日（S市）及び3月19日（M市）に実施した。

②公開に向けたデータの更新、整備を行った【共同利用・共同研究】

・公開に向けたデータの更新、整備を予定通り行った。

・個人情報の取り扱いについては、改めて配慮を行いながらデータの整備を行った。

③国内外の共同研究体制を整備した【共同利用・共同研究】

・「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」のミーティングや開催された行事に等に参加しつつ、プロジェクトや調査研究の充実に向けて参考とした。

・社会言語学、会話分析、教育人類学を含む学際的な観点から共同研究を進めた。

④研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

・本プロジェクトの内容に関するサイトを維持しながら、拡充を図った。

- ・講習（研修）に関する情報の概要については、本プロジェクトのサイトに報告，発信した。
- ・オンライン講座（研修）を2回行った（サポート21主催，文化庁委託研修，2023年8月，12月）。

⑤若手支援として，次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

- ・1名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
- ・研修を2回行った（(1)西東京市日本語ボランティア研修，2023年5月，(2)江戸川区教育委員会主催副校長研修，2023年11月）

(6) 定住外国人のよみかき研究

①本調査を実施した【共同利用・共同研究】

- ・生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての調査を研究会議で検討を行い（オンライン6回，対面1回），調査1（言語生活調査）と調査2（インターアクションインタビュー）として設計を行い，データ収集に着手した（のべ6名分，約300分）。なお，インフルエンザの蔓延により，調査実施予定が大幅に変更（延期，中止を含む）することになった。さらに2024年1月に発生した能登半島地震により，北陸地方の調査は当面の間延期することにした。これらの事情により令和5年度に実施予定の調査は大幅な変更を余儀なくされた。
- ・収集したデータについては，分析・公開に向けた準備作業を順次行った。

②国内外の共同研究体制を整備した【共同利用・共同研究】

- ・北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院との共催で，研究集会を開催した（2023年8月26日）。
- ・言語（言語教育）以外の社会学や移民研究等を専門とする研究者との連携・協業を積極的に進め，引き続き研究者2名の参加を継続した。

③研究成果として，次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

- ・調査データ等の研究成果を公開するために，総括班主導のもと他のサブプロジェクトと連携して，本プロジェクトのサイトを開設し，データと情報公開の充実に努めた。
- ・研究集会を北海道大学で開催した（2023年8月26日）。
- ・論文3件が学術誌に掲載された。
- ・口頭発表を3件行った（日本言語政策研究会第25回研究大会，第7回キルギス2023日本学・日本語教育国際研究大会，NINJALサロン）。

④若手支援として，次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

- ・一橋連携大学院および総合研究大学院の講義で本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした。
- ・非常勤研究員1名の（博士課程在籍者）の雇用を継続した。
- ・共同研究員として2名（博士課程後期在籍者1名，博士課程後期進学予定者）がプロジェクトに参加し，調査を担当した。さらに，1名が文献レビューの執筆に携わった。
- ・共同研究員1名がNINJALサロンにおいて口頭発表を行った。
- ・英語文献のレビュー3本を本プロジェクトのサイトおよび学術情報リポジトリのサイトにおいて公開した。
- ・共同研究者1名に研究費・調査旅費を支援した。
- ・共同研究者1名の研究費・旅費（研究集会および研究会議への参加）を支援した。
- ・調査シミュレーション動画を作成し，若手研究員を中心とした共同研究員が調査方法の理解を深めるための支援を行った。

⑤地域・社会との連携として、次のような活動を行った【地域・社会との連携】

- ・国際交流協会等を訪問し、連携（調査協力、共同研究者）の強化を図った（長野県（長野国際化協会長野県多文化共生相談センターほか1団体）、北海道札幌市、埼玉県川口市）。その結果として、調査協力3地域と共同研究者1名の参加が実現した。
- ・北海道大学で研究集会を開催した（2023年8月26日）。
- ・先行研究文献のレビュー論文8本（外国語文献3本、日本語文献5本）を国立国語研究所学術情報リポジトリに登録、さらに本プロジェクトのサイトには学術情報リポジトリへのリンクを掲載し、研究成果のより広い範囲への発信に努めた。

⑥グローバル化のため、次のような活動を行った【グローバル化】

- ・日本語教師セミナー（ジャカルタ国立大学、2023年9月25日）においてプロジェクトの紹介を行う活動を行い、海外の研究者を共同研究員として受け入れるための働きかけを積極的に行った。
- ・共同研究員2名の参画を継続した（ロシア出身1名、韓国出身1名）。
- ・海外に向けた研究成果発信を行った（「第7回キルギス2023日本学・日本語教育国際研究大会」2023年8月）。

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：非母語話者日本語運用統括

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合		B
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	—
	3. 地域・社会との連携に関する計画	—
	4. グローバル化に関する計画	—

## I. 計画期間内の概要

### 1. 目的及び特色

#### 【目的】

本サブプロジェクトは、独自の研究プロジェクトは行わず、メインプロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」のなかにある他の五つのサブプロジェクトの研究成果を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援するプロジェクトである。

- ・日本語学習者の作文の縦断コーパス研究（学習者作文）
- ・日本語学習者の談話の縦断コーパス研究（学習者談話）
- ・日本語学習者の作文教育支援研究（作文教育支援）
- ・定住外国人の談話の縦断研究（生活者談話）
- ・定住外国人のよみかき研究（生活者識字）

#### 【特色】

本研究の特色は次の2点にまとめられる。

- ①本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) において、第4期に行われる上記五つのサブプロジェクトの研究成果やイベント情報等を公開・発信する。
- ②本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) において、第4期のメインプロジェクトのもととなった第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新を継続する

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

### 年次計画（6年間のロードマップ）

#### 【2022 (R4) 年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の作成・公開開始
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

#### 【2023 (R5) 年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

#### 【2024 (R6) 年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開, イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

#### 【2025 (R7) 年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開, イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

#### 【2026 (R8) 年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開, イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

#### 【2027 (R9) 年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開終了
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開, イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
  - ・本プロジェクトの6ヶ年の研究成果の共同利用推進センターへの移管。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 550 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 本プロジェクト内の五つのサブプロジェクトと連携し, 各サブプロジェクトの今年度の研究成果を <https://www2.ninjal.ac.jp/j11/> で公開した。

#### 調査データ・データベース等公開 (アウトプット)

- (1) 昨年度公開した本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の公開・管理を継続して行った。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム (アウトプット)

- (1) イベントの開催にさいし, 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) および X ([https://twitter.com/jsl\\_ninjal](https://twitter.com/jsl_ninjal)) にてその情報を発信した。

#### データベース等を使った研究成果・利用実績 (アウトカム)

- (1) 本年度における本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) へのページビュー数は 5,591, ダウンロード数は 2,100 であった。

### 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

特になし

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

### 4. グローバル化に関する計画

特になし

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：日本語学習者の作文の縦断コーパス研究

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	A

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

##### 【目的】

本サブプロジェクトでは、中国6、台湾2、韓国2、ベトナム2の計12大学との共同研究体制を構築し、学習者600名（開始時）を対象に、1年間に3回、4年間にわたる縦断調査を行い、計5,000本の作文データベースを構築する。そのデータを用い、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにする。

##### 【特色】

#### ■特色1：日本語をゼロから学ぶ学習者の「多様な習得過程」が見える

従来の作文研究の多くが横断的なものであり、同一の学習者の習得過程を追跡する縦断コーパスがきわめて少ない。横断研究では習得過程の予測にすぎず、厳密な意味での学習者一人ひとりの習得過程を知ることはできない。そこで、本研究では、日本に関連する進学や就職が多く、書き言葉のニーズが高い「中国・台湾・韓国・ベトナム」の日本語教育先進地域を対象に4年間にわたるデータ収集を行い、横断コーパスとの比較も視野に入れ、習得上の困難点や習得過程の違いを明らかにする。

調査開始時の対象となる学習者は当初600名（2年目は480名、3年目は360名、4年目は240名を想定）であり、内訳は、中国330名（天津外国語大学180名、北京語言大学20名、重慶三峡学院20名、福建師範大学50名、東華大学20名、長春師範大学40名）、台湾120名（東呉大学100名、政治大学20名）、韓国70名（韓国外国語大学50名、仁川大学20名）、ベトナム80名（フエ外国語大学30名、ドンア大学50名）を予定している。

#### ■特色2：執筆プロセスの可視化により、「文章執筆上の困難点」が見える

作文研究の分析対象はこれまで「執筆のプロダクト（書かれた作文）」であった。しかし、作文を修正する箇所こそが学習者のメタ意識が働く困難点であり、「執筆のプロセス（作文を書く過程）」を分析しなければ学習者の困難点はわからないことが多い。そこで、本研究では、所長裁量経費を用いて開発した作文の執筆プロセス記録システム「EssayLoggerTS」を用いて、学習者の執筆プロセスにおける困難点を明らかにする。

### ■特色3：執筆者による作文の母語訳との対照により、「学習者の誤用」が見える

従来の誤用分析の多くは日本語作文のみを対象に、研究者の判断で分析されてきたが、誤用は本来、何をなぜ間違えたのか、執筆者本人でないと判断することは難しい。そこで作文執筆の際、同じ内容の作文を日本語と母語の両方で入力してもらう方法を採用し、学習者の執筆意図を適切に把握する。

### ■特色4：AIの活用により、「人間の評価に近い自動評価」が見える

本研究では、5,000本の作文データを、六つの印象観点から日本語教師と一般の母語話者に評価してもらい、そうした評価を(株)富士通の判断過程を可視化できるAIに組み込むことで、従来の機械的な評価では叶わなかった、人間の評価に近い、安定した自動評価を可能にするシステムの構築を目指す。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027
学習者作文データ収集	収集1年目 1,800本 (600名分)	収集2年目 1,440本 (480名分)	収集3年目 1,080本 (360名分)	収集4年目 720本 (240名分)		
学習者作文データベース	構築準備	構築開始	構築継続	構築継続	公開準備	公開
AI自動評価システム		開発準備	開発開始	開発継続	試験公開	運用開始
シンポジウム・講習会			シンポ1回		シンポ1回	WS1回
刊行・出版			報告書刊行		論文集準備	論文集刊行

#### 【2022(R4)年度】

- ・作文データの収集開始（1年目、年3回、600名分×3回=1,800本）
- ・作文データのデータベース設計の検討

#### 【2023(R5)年度】

- ・作文データの収集継続（2年目、年3回、480名分×3回=1,440本）
- ・作文データのデータベース構築開始
- ・作文の自動評価システム設計の検討

#### 【2024(R6)年度】

- ・作文データの収集継続（3年目、年3回、360名分×3回=1,080本）
- ・作文データのデータベース構築継続
- ・作文の自動評価システム開発開始
- ・国際シンポジウムの開催
- ・国際シンポジウムの報告書刊行

#### 【2025(R7)年度】

- ・作文データの収集継続（4年目、年3回、240名分×3回=720本）
- ・作文データのデータベース構築継続
- ・作文の自動評価システム開発継続

#### 【2026(R8)年度】

- ・作文データのデータベース公開準備
- ・作文の自動評価システム開発公開
- ・国際シンポジウムの開催
- ・研究成果論文集の準備

## 【2027(R9)年度】

- ・作文データのデータベース公開
- ・作文の自動評価システム運用開始
- ・作文研究支援のためのワークショップ開催
- ・研究成果論文集の刊行

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 15,512千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 中国7大学（北京語言大学，天津外国語大学，東華大学，重慶山峡学院，福建師範大学，華中科技大学，長春師範大学），台湾2大学（国立政治大学，東呉大学），ベトナム3大学（フエ大学外国語大学，ドンア大学，ハノイ工業大学外国語観光大学），韓国2大学（韓国外国語大学校，仁川大学校），タイ2大学（タマサート大学，カセサート大学），フランス1大学（フランス東洋言語文化学院），スロヴェニア1大学（リュブリャナ大学），イギリス1大学（オックスフォード大学）の計19大学の学生を対象に，作文の縦断調査を行った。作文調査は1年に3回ずつ実施し，4年間で計12回行う予定である。2023年度は計1,691本分の作文データを収集した。内訳は次の通りである。なお，第1回調査～第3回調査は調査時期が近いいため，調査開始したばかりの【2023年度開始】の大学は1年に4回調査を実施している。

#### 【2020年度開始】

〔北京語言大学〕作文16本（第12回調査16名）—データ収集完了

〔国立政治大学〕作文13本（第12回調査13名）—データ収集完了

#### 【2021年度開始】

〔天津外国語大学〕作文187本（第9回調査63本，第10回調査62本，第11回調査62本）

〔東華大学〕作文47本（第9回調査17本，第10回調査16本，第11回調査14本）

〔重慶山峡学院〕作文48本（第9回調査19本，第10回調査16本，第11回調査13本）

〔華中科技大学〕作文22本（第9回調査10本，第10回調査8本，第11回調査4本）

〔福建師範大学〕作文136本（第9回調査50本，第10回調査49本，第11回調査37本）

〔長春師範大学〕作文99本（第9回調査41本，第10回調査41本，第11回調査17本）

〔東呉大学〕作文175本（第9回調査59本，第10回調査59本，第11回調査57本）

〔フエ大学外国語大学〕作文73本（第9回調査25本，第10回調査24本，第11回調査24本）

〔ドンア大学〕作文208本（第9回調査70本，第10回調査70本，第11回調査68本）

〔韓国外国語大学〕作文79本（第9回調査33本，第10回調査27本，第11回調査19本）

〔仁川大学校〕作文15本（第9回調査8本，第10回調査4本，第11回調査3本）

#### 【2022年度開始】

〔ハノイ工業大学〕作文180本（第6回調査60本，第7回調査60本，第8回調査60本）

〔タマサート大学①〕作文22本（第6回調査8本，第7回調査8本，第8回調査6本）

#### 【2023年度開始】

〔タマサート大学②〕作文74本（第2回調査20本，第3回調査19本，第4回調査18本，第5回調査17本）

〔カセサート大学〕作文56本（第1回調査19本，第2回調査19本，第3回調査18本）

※カセサート大学のみ他の2023年度開始大学とは調査時期が異なる

[フランス東洋言語文化学院①] 作文 148 本 (第 2 回調査 40 本, 第 3 回調査 37 本, 第 4 回調査 36 本, 第 5 回調査 35 本)

[リュブリャナ大学①] 作文 24 本 (第 2 回調査 9 本, 第 3 回調査 7 本, 第 4 回調査 5 本, 第 5 回調査 3 本)

[オックスフォード大学] 作文 7 本 (第 2 回調査 2 本, 第 3 回調査 2 本, 第 4 回調査 2 本, 第 5 回調査 1 本)

【2024 年度 (ただし第 1 回調査は 2024. 3) 開始】

[フランス東洋言語文化学院②] 作文 40 本 (第 1 回調査 40 本)

[リュブリャナ大学②] 作文 22 本 (第 1 回調査 13 本, 第 2 回調査 9 本)

#### データベース等の構築 (アクティビティ)

(1) 2023 年度までに収集した作文データについて, データベースの構築に向けて, 作文が所定の形式に則って書かれているか, 各種の情報のファイルがそろっているかの確認を行った。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等 (アクティビティ・アウトプット)

(1) 上記のドンア大学 (ベトナム) と 2024 年 1 月に, また, 連携して調査に当たっている福建師範大学 (中国) と 2023 年 12 月に, フェ大学外国語大学 (ベトナム) と 2024 年 1 月に, それぞれ学術交流協定を締結した。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

(1) サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」(リーダー: 山口昌也) と連携し, 全文検索システム「ひまわり」の導入など, 収集した作文データの活用方法を検討した。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等 (アクティビティ・アウトプット)

(1) 榊富士通の富士通研究所の研究者 2 名, および明星大学情報学部の研究者 1 名と 5 回ミーティングを行い, 計算機によるテキスト処理の効率化の方法を検討した。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム (アウトプット)

- (1) 口頭発表を 1 件, ポスター発表を 1 件実施した (2024 年 3 月「第 26 回専門日本語教育学会研究討論会」@立命館大学)。
- (2) ワークショップを 1 件実施した (2023 年 10 月「日本語学会 2023 年度秋季大会」@オンライン)。
- (3) 講演を 6 件実施した (2023 年 9 月「大連外国語大学中国北東アジア言語研究センター主催 学術講演会」@中国・大連外国語大学で 1 件, 2023 年 10 月「待遇コミュニケーション学会 2023 年秋季大会」@オンラインで 1 件, 2024 年 1 月「フェ大学外国語大学・国立国語研究所学術交流協定締結記念講演」@ベトナム・フェ大学外国語大学で 1 件, 2024 年 2 月「京都大学国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター主催 第 30 回多文化交流フォーラム講演会」@オンラインで 1 件, 2024 年 3 月「イタリア日本語教育協会 2024 年度研修会」@イタリア・サピエンツァローマ大学で 2 件)。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表 (アウトプット)

(1) 論文を 1 本公表した (2024 年 1 月『国立国語研究所論集』26 号)。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 総合研究大学院大学の講義「応用言語学講義」および連携大学院 (一橋大学: 石黒担当) の演習において, 本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。【若手支援】

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) 本プロジェクトの研究推進のために, 4 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し, データの収集・整理に携わったほか, プロジェクトのミーティングに参加し, データの分析やアノテーションの付与などの検討を共同で行った。【若手支援】

#### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習等の機会を利用して、本プロジェクトに参画する大学院生を募り、12名（一橋大学7名、明治大学1名、早稲田大学2名、筑波大学1名、金沢大学1名）がプロジェクトのミーティングに参加し、それぞれの研究観点に基づき、収集中の作文データの分析法の発表を行った。【若手支援】

#### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 大学院生1名の専門日本語教育学会での発表旅費を支援した。

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

#### 産業界との連携

- (1) 作文の自動評価システム開発のため、(株)富士通研究所を中心としたAIの専門家との会議の場を6回設け（4月に1回、5月に1回、6月に1回、7月に1回、8月に1回、1月に1回）、検討を行った。

### 4. グローバル化に関する計画

#### 海外の研究者の受入

- (1) 共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者、中国16名、台湾4名、韓国6名、ベトナム4名、タイ3名、スロヴェニア3名、フランス1名、ブラジル1名、計38名を共同研究員に加え、現地調査を推進した。

#### 海外の大学との連携等

- (1) 上記のドンア大学（ベトナム）と2024年1月に、また、連携して調査に当たる福建師範大学（中国）と2023年12月に、フエ大学外国語大学と2024年1月に、それぞれ学術交流協定を締結した。

（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：日本語学習者の談話の縦断コーパス研究

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	A

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

##### 【目的】

本サブプロジェクトでは、中国国内の2大学の学習者35名（北京師範大学17名、西安外国語大学18名）を対象に、大学入学から卒業までの4年、年に2回、計8回のI-JAS準拠のインタビュー調査を行い、420時間分の縦断談話データベースを構築する。同時に、収集する談話の内容に関連する作文データを収集し、縦断作文データベースをあわせて構築する。その二つのデータに第3期で構築したI-JASの横断的データも関連付けながら、談話・作文能力の発達過程を総合的に明らかにすることを目指す。

##### 【特色】

学習者コーパスを構築するさいの調査は継続的でないものが多く、第二言語習得研究における習得の過程を分析するのに不十分である。とくに、話し言葉と書き言葉の発達の連関や総合的な技能の発達の研究は立ち後れている現状がある。本サブプロジェクトでは、学習者談話の研究と学習者作文の研究とを連動しながら行ことによって、発話産出と文章産出との関係について明らかにする。

本サブプロジェクトの特色は以下の4点にまとめられる。

#### ■特色1：縦系と横系を組み合わせた習得過程の分析

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」であるI-JASに準拠する形で学習者の日本語運用の縦断データを経年的に収集し、縦横双方の観点を比較しながら第二言語習得研究が可能な学習者産出データを整備する。

#### ■特色2：話し言葉と書き言葉の連動による習得過程の分析

談話データと作文データを並行して収集することにより、その両データを有機的に関連付け、話し言葉と書き言葉の連動も含めた学習者の総合的な習得過程を明らかにできるデータを整備する。

#### ■特色3：各種アノテーションによる習得過程の分析

談話データには話し言葉特有の分析に必要なフィラーを識別するタグを付与したり、作文データには母語による対訳作文から得た誤用タグを付与したりするなど、それぞれのデータの分析に有効な各種アノテーションを付与し、習得過程の多角的分析を容易にするデータを整備する。

## ■特色4：背景情報による習得過程の分析

学習者・担当教師へのアンケート調査やインタビュー調査、使用教材や授業のシラバスなど、日本語の学習を背後で支える背景情報を収集し、分析に役立てる。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027
学習者談話データ収集	収集1年目 (18名分)	収集2年目 (18名分)	収集3年目 (18名分)	収集4年目 (18名分)		
学習者談話データベース	先行データ 公開準備	先行データ 公開	後続データ 構築開始	後続データ 構築継続	後続データ 公開準備	後続データ 公開
シンポジウム・講習会			シンポ1回		WS 1回	シンポ1回
刊行・出版		論文集準備	論文集刊行			

### 【2022(R4)年度】

- ・談話データの収集開始（1年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・先行データのデータベース公開準備（北京師範大学17名分，データ収集済）

### 【2023(R5)年度】

- ・談話データの収集継続（2年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・先行データのデータベース公開（北京師範大学17名分，データ収集済）
- ・研究成果論文集の準備

### 【2024(R6)年度】

- ・談話データの収集継続（3年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・後続データのデータベース構築開始（西安外国語大学18名分）
- ・国際シンポジウムの開催
- ・研究成果論文集の刊行

### 【2025(R7)年度】

- ・談話データの収集継続（4年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・後続データのデータベース構築継続（西安外国語大学18名分）

### 【2026(R8)年度】

- ・学習者縦断談話データベースの公開準備
- ・談話研究支援のワークショップの開催

### 【2027(R9)年度】

- ・学習者縦断談話データベースの公開準備
- ・国際シンポジウムの開催

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 5,963千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 西安外国語大学（中国）、ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）、チュラーロンコーン大学（タイ）の学生を対象に、I-JASに準拠した内容の談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。2023年度は2回分のデータを収集し、合計97時間分の談話データ、および252本分の作文データを収集した。内訳は次のとおりである。

[西安外国語大学]

談話約39時間分：平均45分×52名（第4回26名，第5回26名）

作文 104 本：第 4 回 52 本（2 課題×26 名），第 5 回 52 本（2 課題×26 名）  
[ハノイ国家大学外国語大学]

談話約 30 時間分：平均 45 分×40 名（第 4 回 20 名，第 5 回 17 名）

作文 78 本：第 4 回 40 本（2 課題×20 名），第 5 回 38 本（2 課題×19 名）  
[チュラーロンコーン大学]

談話約 28 時間分：平均 45 分×37 名（第 4 回 19 名，第 5 回 18 名）

作文 70 本：第 4 回 36 本（2 課題×18 名），第 5 回 34 本（2 課題×17 名）

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 2022 年度に収集した談話データのうち，西安外国語大学（中国）第 2 回調査分 25 名分，約 21.3 時間（平均 45 分）について，データベース構築に向けた文字化およびアノテーション付与を行った。作文データについてはデータベース構築に向け，2023 年度までに収集したデータ（第 1 回～第 5 回の 3 か国合計 704 本分）すべてに目を通し，所定の形式に則って書かれた作文であるかの確認を行った。
- (2) 先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分，約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）のデータベースの構築を行い，『北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）』として 2024 年 3 月に中納言上で公開した。

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）と 2024 年 1 月，同じくハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）と 2024 年 1 月，それぞれ学術交流に関する協定書を締結した。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」と連携し，共同で開発した文字入力ツール（EssayLoggerTS）およびシステム（Moodle）を用いて作文のデータ収集を進めた。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分，約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）のデータベースの構築を行い，『北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）』として 2024 年 3 月に中納言上で公開した。

（注：「データベース等の構築」との重複有）

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 2023 年 11 月 5 日 NINJAL シンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」において，『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで発表を行い（オンライン），YouTube 上に公開した。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20231105a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105a/)

<https://www.youtube.com/watch?v=rNSqz1liYCs>

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分，約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）のデータベースの研究成果をまとめた論文集『北京日语学习者历时语料库与日语教学』中国国际广播出版社の刊行に向けて最終準備を行った。

#### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) B-JAS の広報として，研究者にデータを使っただけのよう，2023 年 9 月 3 日開催の 9 月\_I-JAS 研究会において，B-JAS の概要や使い方を紹介する講習会を行った。
- (2) データベース構築に向けた文字化，アノテーション付与を進めるために，2023 年 12 月 10 日「文字化研修会」と題し，作業従事者のためのオンライン講習会を行った。

## データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 先行データのデータベースを使った研究成果として、2023年9月3日に9月\_I-JAS研究会において、「B-JASを使った研究事例—中国人日本語学習者の依頼時の前置き表現の使用—」という題名で口頭発表を行った。
- (2) 先行データのデータベースを使った研究成果として、2024年3月2日、立命館大学いばらきキャンパス開催の第26回専門日本語教育学会研究討論会において「縦断学習者コーパスからみた日本語学習者のフィルターの使用傾向—ストーリーテリングを中心に—」という題名でポスター発表を行った。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習において、2名の博士後期課程の大学院生が北京師範大学で収集したデータ（B-JAS）を活用した研究発表を行った。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 本プロジェクトの研究推進のために、3名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し、データの収集・整理に携わったほか、プロジェクトのミーティングに参加し、文字起こしの効率的な方法などの検討を共同で行った。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習等の機会を利用して募り、昨年度に引き続き本プロジェクトに参画した3名（一橋大学2名、東京外国語大学1名）の大学院生と本年度も談話分析の方法をめぐる情報交換を行った。

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 2024年3月2日、大阪府立命館大学いばらきキャンパスで開催された第26回専門日本語教育学会研究討論会に参加する大学院生1名に発表旅費の支援を行った。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 2023年11月5日(日)、2023年度NINJALシンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」において「『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで若手研究者等を対象としたオンライン発表を行った。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20231105a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105a/)

(注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

- (1) 現地調査を行う西安外国語大学（中国）2名、ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）4名、チュラーロンコーン大学（タイ）2名、および現地調査を共同で行った北京師範大学2名（中国）、北京外国語大学4名（中国）、計14名の教員を引き続き共同研究員とし、共同研究を推進した。

### 海外の大学との連携等

- (1) 連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）と2024年1月、同じくハノイ国家大学外国語大学と2024年1月、それぞれ学術交流に関する協定書を締結した。

(注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：日本語学習者の作文教育支援研究

サブプロジェクトリーダー：山口 昌也

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

##### ■プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討することである。さらに、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにする。

##### ■プロジェクトの特徴

作文教育では、教師の指導のみに依拠しない、協同型の授業活動が広く行われている。そこには作文・添削活動自体を評価するプロセスが含まれているが、評価に欠かせない、作文・添削活動の記録や、記録データ活用のための環境が十分整っていないのが現状である。また、現状の作文支援システムは、グループ利用ではなく個別利用向けであるとともに、システムが作文を評価する点に焦点が置かれており、協同型の作文教育には適していない。そこで、次の二つの機能を併せ持つ、作文・添削支援システムを構築する。

##### ①教師・学習者がインターネット上で作文・添削活動を行うための機能

教室や家庭での利用、海外居住者との協同を考慮するとともに、インストール不要で利用できるよう、Webブラウザ上で動作するWebアプリケーションとして実現する。

##### ②実施された作文、添削をデータベース化し、ふりかえり活動や教師の分析を支援する機能

例えば、(1)作文や添削結果の検索、作文・添削過程の閲覧など、教師の分析や学習者のふりかえりを支援する機能、(2)学習者の気づきをグループで共有しやすくするなど、グループでのふりかえり活動を支援する機能を実現する。

この二つの機能を踏まえて、作文・添削支援システムを授業に導入する方法を確立する。アカデミックライティング（日本人大学生、日本語学習者）、作文（日本語学習者）の3種類の実践プログラムを作成し、授業で実践する。そして、実践結果から得られたデータを用いて作成する作文・添削データベースを用いて、効果的な作文添削の方法、作文技能の習得過程などを明らかにする。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

### ◆年次計画

#### 【2022年度】

既存の実践手法、支援システムを調査し、作文・添削支援システムの設計を行う。システムのうち、まず、作文・添削部分について、プロトタイプシステムを実現する。また、本システムの利用を想定した実践プログラムを設計する。

#### 【2023年度】

2022年度に実現したプロトタイプシステムを使用して、予備実践を実施する。また、支援システムのふりかえり部分の設計し、プロトタイプシステムへ機能を追加する。さらに、実践プログラムの一般向け解説書（実践マニュアル）の作成に着手する。

#### 【2024年度】

作文・添削支援のプロトタイプシステムを使用して、（作文・添削・ふりかえりを含む）予備実践を実施する。作文・添削データベース構築の準備を開始する。実践マニュアルの作成を進める。

#### 【2025年度】

作文・添削支援システムを用いた本実践を行い、効果を検証する。また、作文・添削支援システムをインターネット上に試験公開し、合わせて実践マニュアルも公開する。さらに、これまでに実施した実践結果から共有可能なデータを選別し、作文・添削データベースを構築する。

#### 【2026年度】

作文・添削支援システムの本公開を行い、一般向けの講習会を実施する。また、作文・添削データベースの構築を進める（合計3回分の実践結果）。さらに、データベースを用いた分析を行う。

#### 【2027年度】

作文・添削支援システムの公開後のメンテナンスを行い、システムを改善する。2026年度に構築した作文・添削データベースをインターネット上に公開する。実践の結果得られた作文・添削データを活用するための講習会を開催する。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 3,383千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 共同研究員全員（13名）に対してプロトタイプを用いたデモを行い、共同研究員自身の行っている教育実践に即して、個別にプロトタイプに対するフィードバックを受けた。
- (2) プロトタイプシステムを用いた予備実践を4大学（京都外国語大、南山大学、一橋大学、日本国内の大学）で実施した。その際、4種類の実践プログラムを作成した（後述）。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 「フィールド調査・実験等」に基づき、作文・添削支援システムの振り返り支援機能として、小グループでの振り返り、付与されたアノテーションのビューワー、外部ファイルへの作文データのエクスポート、振り返り後の作文の改訂管理機能などの設計を行った。
- (2) 前年構築分のプロトタイプシステムに対して、予備実践に即した拡張（匿名での添削、作文全体へのコメントなど）を行った。また、1の設計に基づいて、振り返り支援部分の実装を行った。ただし、作文の改訂管理機能など、一部の機能は設計段階である。
- (3) 課題の文章に対してコメント付けして、グループで振り返りを行うタイプの実践プログラム3種（読解、輪読、間違い探し課題）、相互添削タイプの実践プログラム1種を設計した。

### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 教育現場における日本語学習者の作文執筆支援のために、「日本語学習者の作文縦断研究」（プロジェクトリーダー：石黒圭教授）との会議を2回（8月、9月）開催し、収集した作文データの検索・結果の活用方法として、全文検索システム『ひまわり』で作文データ・メタデータを利用するためのパッケージを試作した。
- (2) 「多世代会話コーパス」（プロジェクトリーダー：小磯花絵教授）のシンポジウム「日常会話コーパス」IX（2024-03-18）で、支援システムを用いたグループ学習における談話に関する予備的な研究発表を1件行った。

### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 共同研究員が予備実践を行うために、機能拡張・改善した（「データベース等の構築」参照）プロトタイプの記事・添削支援システムを限定公開した。

### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 「データベース等の構築」で作成したプロトタイプ、および、予備実践などについて、日本教育工学会2023年秋季全国大会（2023-09-17・2件）、日本教育工学会2024年春季全国大会（2024-03-02～03-03・3件）、日本語教育学会2023年度秋季大会（2023-11-26・1件）、韓国日語教育学会（2023-12-02・1件）で合計7件の口頭発表を行った。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 2名の非常勤研究員を雇用した。2名がそれぞれ実践プログラムを1種ずつ設計し、担当している大学の授業でプロトタイプシステムを用いた実践を行った。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 共同研究員（大学院生）2名が実践プログラム1種を設計し、担当している大学の授業でプロトタイプシステムを用いた実践を行った。

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 上記の非常勤研究員2名と共同研究員2名が実践結果などを学会で4件口頭発表した（日本教育工学会2件、日本語教育学会1件、韓国日語教育学会1件）。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 研究成果の社会への還元

- (1) 今年度実施した実践プログラムを参考に、2種類のタイプの活動（単一の文章をグループで評価する活動、相互添削タイプの活動）に対して、教師用・学習者用の計4種の作成を開始した。

## 4. グローバル化に関する計画

### 英語による研究成果の発信等

- (1) プロトタイプシステムのユーザインターフェイスは、多言語表示できるよう実装した。現在は、日本語・英語について表示用テキストを用意している。

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：定住外国人の談話の縦断研究

サブプロジェクトリーダー：野山 広

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	—

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

本研究の目的と特色（研究課題）は以下の通りである。

##### 【本研究の目的】

2007年から継続してきた東北地方における外国人定住者に対するOPIの枠組みを活用した日本語会話の縦断的インタビュー調査について、第四期も継続するとともに、過去の収集データ（約13年分：一次データ＝当初の5年分、二次データ＝次期の8年分）の更新、整備を行い、それらのデータを公開、分析する。そのことを通して、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにする。最終的に、こうした調査・研究の成果を踏まえて、定住外国人の日本語習得過程の実証的研究に資することを目指す。

##### 【本研究の特色】

本プロジェクトでは、生活者の中で特に日本語学習を必要とする人々のニーズに応えるため、主に外国人の散在地域（秋田県A市）に定住する外国人住民（国際結婚の配偶者）に対して縦断調査を行い、生活者談話の縦断的なデータベースを構築する。本研究の特色＝課題は次の四つにまとめられる。

①生活者の日本語会話力の長期的習得過程の解明把握：OPIの枠組みを活用したインタビューを毎年1度ずつ行い、日本語会話力と言語生活・環境の実態を縦断的に探る。

②生活者支援に結びつく形式的フィードバック：学習者や現場の関係者に対する形式的なフィードバックを行うこと等を通して、現場のニーズに応じた、変革・改善に貢献できるような支援活動を行う。

③会話の傾向や特徴の分析：構築してきたデータベース及びOPIの調査結果を踏まえつつ、音声・文字化データやレイティング結果等からみえてくる会話の傾向や特徴を明確化する。

④生活者の日本語会話力の摩滅・喪失過程の解明：地域日本語教育の効果や課題、日本語会話力の習得過程及び高齢の定住外国人の日本語会話力の摩滅・喪失過程に関して明らかにするとともに、国内外の関連領域・分野の人々とネットワークを構築、拡充する。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027 前半
生活者談話データ収集	収集1年目 (3~5名)	収集2年目 (3~5名)	収集3年目 (3~5名)	収集4年目 (3~5名)	収集5年目 (3~5名)	
生活者談話データベース	一次データ 公開準備	一次データ 公開	二次データ 構築開始	二次データ 構築継続	二次データ 公開	二次データ メンテナンス
シンポジウム・講習会		講演会か研修			シンポ1回	研修・講習会
刊行・出版			論文集刊行			

2022(R4)年度：縦断調査（14年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第一次（当初5年）談話データの文字化更新，整備作業を継続する。

2023(R5)年度：縦断調査（15年目）のデータ収集を継続する。生活者の第一次（当初5年）談話データの文字化更新，整備作業を終え，公開する。公開したデータ活用のための講演会あるいは研修（ワークショップ）を開催する。

2024(R6)年度：縦断調査（16年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化，整備作業に着手する。縦断調査・研究の成果を踏まえた論文集を刊行する。

2025(R7)年度：縦断調査（17年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化，整備作業を継続する。

2026(R8)年度：縦断調査（18年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化データベースを公開し，公開記念のシンポジウムを開催する。

2027(R9)年度：公開した第二次（次期8年）談話データベースのメンテナンスを行い，成果を活用した研修・講習会を開催する。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 3,550千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 生活者として地域に定住した外国人（主に国際結婚の配偶者）の日本語会話（談話）に関して，OPIの枠組を活用した縦断調査及びフォローアップ調査を4月25日～26日にかけてフィールドで実施した。

(2) 地域の学習者に対して，リテラシーに関するパイロット調査を1948年の識字調査を活用して7月23日（S市）及び3月19日（M市）に実施した。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 公開に向けたデータの更新，整備を予定通り行った。
- (2) 個人情報の取り扱いについては，改めて配慮を行いながらデータの整備を行った。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」のミーティングや開催された行事等に等に参加しつつ，プロジェクトや調査研究の充実に向けて参考とした。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 社会言語学，会話分析，教育人類学等の分野を含む学際的な観点から共同研究を進めた。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

(1) 本プロジェクトの内容に関するサイトを維持しながら，拡充を図った。

<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>

## 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 講習（研修）に関する情報の概要については、本プロジェクトのサイトに報告，発信した。

## 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

(1) B-JAS（北京縦断コーパス）のコーパスデータに関連した成果の一つとして、「学習者の内面から考える指導法—学習者のビリーフの変容から—」という論文を『北京日语学习者历时语料库与 日语教学』pp. 78—91 の中で公表した。

## データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

(1) 縦断調査のデータベース等の内容を踏まえたアウトプットとして，以下のような講習会（研修）を行った。1) 「定住外国人の日本語会話習得に関する縦断的研究から見えてきたこと～日本語使用者（難民の方々も含む）の高齢化，言語摩滅の過程に注目しながら～」(8月21日，サポート21主催オンライン講座：文化庁委託研修)，2) 「定住外国人の日本語会話習得に関する縦断的研究から見えてきたこと～日本語使用者（難民の方々も含む）の高齢化や言語摩滅の過程に注目しながら～」(12月10日，サポート21主催オンライン講座：文化庁委託研修)

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) 予定通り，プロジェクト非常勤研究員1名を雇用した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 地域・社会との連携

(1) 縦断調査のフィールドにおいて，関連行事に参加するなど，地域・社会や関係者との連携強化を拡充した。また，地域との連携強化，ネットワーク拡充の一環として，地域の実践現場や関係者に対して，以下のような研修を行った。1) 「多文化共生社会と地域日本語教育」(西東京市日本語ボランティア研修，5月24日)，2) 「多文化共生社会の実現に向けた学びの保障と学校の在り方について～改めて，学びの重要性を確認しつつ～」(江戸川区教育委員会主催副校長研修，11月13日)

## 4. グローバル化に関する計画

特になし。

## 5. その他

(1) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」との連携・協力及び本プロジェクトの補完的研究の一環として，以下のような学会（研究大会）において，試行調査に関する報告，口頭発表を行った。1) 「現代の時代状況に応じたリテラシー調査の方法開発に向けた試行錯誤—A県B市の自主夜間中学での試行調査結果を踏まえつつ—」(異文化間教育学会第44回大会，6月10日，都立大学)，2) 「共生社会の基盤となる日本語リテラシー調査の再構築に向けた一考察」(AJE26回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム&17th EAJS International Conference) (8月19日，ベルギー・ゲント大学)，3) 「リテラシーに関する調査方法の開発に向けた学際的研究—A県B市の自主夜間中学とC県D市の公立夜間中学での試行（パイロット）調査結果を踏まえつつ—」(基礎教育保障学会第8回研究大会，9月2日，福岡大学)

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：定住外国人のよみかき研究

サブプロジェクトリーダー：福永 由佳

#### 令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

生活者としての定住外国人は、留学生と異なり、教育機関における日本語学習を経験していない人が多いにもかかわらず、日常生活のさまざまな場面で日本語のよみかきが求められる。彼らの「字をよみかきする社会的実践」(=Literacy)は、これまで日本語教育の研究対象としては注目されることは少なく、支援の取り組みも諸外国に比べ立ち遅れていることが指摘されている。

本サブプロジェクトでは、生活者としての定住外国人の日常生活におけるよみかき社会的実践について調査を実施し、よみかき社会実践の類型化とともに、その特徴(新しいメディアや社会的ネットワークの活用等)を明らかにすることを試みる。

それらの基礎的なデータを収集し分析することにより、自治体等が提供する翻訳サービスや「やさしい日本語」をはじめとする既存の言語サービス等の有効性等を検討することやこれまで議論が及んでいなかった言語権やよみかきをめぐるイデオロギーや政治性の問題を考察することが可能となる。

本研究の最終的な目的は、生活者のよみかきを文字の学習ではなく、文字を介したコミュニケーション(字をよみかきする社会的実践)と捉えなおし、その実態を明らかにすることを通して、よみかきに関する諸課題を議論し外国人支援の充実に資することを目指す。

#### 2. 年次計画(6年間のロードマップ)

2022(R4)年度：よみかきやリテラシー等、本研究に関連する先行研究の動向を把握し、資料として整備する(500件程度)。生活者が行う字をよみかきする社会的実践を探索する予備的な調査を限定的な範囲で試行し、その結果にもとづき本調査の設計を行う。また、共同研究者を窓口として、字をよみかきする社会的実践調査(本調査)を実施予定のフィールドや研究協力者と交渉を行う。生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを開催する。

2023(R5)年度：字をよみかきする社会的実践調査(本調査)を開始し、データ収集を行う。収集したデータは順次公開に向けた文字化等の作業を行う。

2024(R6)年度：補完的データの収集と、データの分析(よみかき社会的実践の類型化とよみかき社会的実践の特徴)に着手する。

2025(R7)年度：昨年度に引き続き、データ分析を継続し、個人情報保護を含めたデータ公開の方式等を検討する。

2026 (R8)年度：限定された範囲でデータの公開を行い、フィードバックを得て、公開に関する問題点の改善を行う。

2027 (R9)年度：公開データのメンテナンスを行い、本格的にデータ公開を行う。データ公開にともない、生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを開催する。

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 2,463千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての調査を研究会議で検討を行い（オンライン6回，対面1回），調査1（言語生活調査）と調査2（インターアクションインタビュー）として設計を行い，データ収集に着手した（のべ6名分，約300分）。なお，インフルエンザの蔓延により，調査実施予定が大幅に変更（延期，中止を含む）することになった。さらに2024年1月に発生した能登半島地震により，北陸地方の調査は当面の間延期することにした。これらの事情により令和5年度に実施予定の調査は大幅な変更を余儀なくされた。

(2) 収集したデータについては，分析・公開に向けた準備作業を順次行った。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 公開するデータの様式と規模等についての検討を継続した。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院との共催で，研究集会「私たちの知らない外国人生活者のたくましく豊かな言語生活—よみかき実践を中心に—」を開催した（2023年8月26日，参加人数20名）。<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html> \*参照

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 言語（言語教育）以外の社会学や移民研究等を専門とする研究者との連携・協業を積極的に進め，引き続き研究者2名の参加を継続した。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

(1) 調査データ等の研究成果を公開するために，総括班主導のもと他のサブプロジェクトと連携して，本プロジェクトのサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/> を開設し，データと情報公開の充実を昨年に引き続き務めた。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 研究集会「私たちの知らない外国人生活者のたくましく豊かな言語生活—よみかき実践を中心に—」を北海道大学で開催した（2023年8月26日，参加人数20名）。  
<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html> \*参照

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

(1) 論文4件が『国立国語研究所論集』26号，『社会言語学』23号，『接触場面の言語管理研究』vol.20，『キルギス日本語教育研究』7号に掲載された。

(2) 口頭発表3件を日本言語政策研究会第25回研究大会，第7回キルギス2023日本学・日本語教育国際研究大会，NINJAL サロンで行った。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 一橋連携大学院の講義「日本語学講義A」で本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした（言語社会研究科，2023年度秋冬学期）。
- (2) 総合研究大学院の講義「言語研究基礎論ⅢA」で本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 若手研究者（博士課程在籍者）1名をプロジェクト非常勤研究員として継続雇用し，先行研究の収集，調査票の整備，調査の実施などを通して質的研究法を学ぶ機会を提供した【若手支援】

### 大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 若手研究者2名（博士課程後期在籍者1名，博士課程後期進学予定者）が共同研究員としてプロジェクトに参加し，調査を担当した。さらに，若手研究者1名が文献レビューの執筆に携わった【若手支援】

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 若手研究者1名（共同研究員）がNINJALサロン（2024年2月27日）において口頭発表を行った。
- (2) 若手研究者が執筆した文献レビュー（英語文献の文献レビュー3本）を本プロジェクトのサイトおよび学術情報リポジトリのサイトにおいて公開した。

学術情報リポジトリ

[https://repository.ninjal.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom\\_sort&search\\_type=2&q=1698906667279](https://repository.ninjal.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom_sort&search_type=2&q=1698906667279)

プロジェクトサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html>

【若手支援】【オープンアクセス】

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 若手研究者1名（共同研究員）に研究費・調査旅費を支援した（2024年2月－3月，都内及び関西における調査準備）。【若手支援】
- (2) 若手研究者1名（共同研究）の研究費・旅費（2023年8月，北海道大学における研究集会および研究会議への参加）を支援した。【若手支援】

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 調査シミュレーション動画を作成し，若手研究員を中心とした共同研究員が調査方法の理解を深めるための支援を行った。なお，調査シミュレーション動画は調査協力者のプライバシー保護の観点から一般公開は行わない。【若手支援】

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 地域・社会との連携

- (1) 地域・社会との連携を深めるために，国際交流協会等を訪問し，連携（調査協力，共同研究者）の強化を図った（長野県（長野国際化協会長野県多文化共生相談センターほか1団体），北海道札幌市，埼玉県川口市）。その結果として，調査協力3地域と共同研究者1名の参加が実現した。

### 一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 研究集会「私たちの知らない外国人生活者のたくましく豊かな言語生活—よみかき実践を中心に—」を北海道大学で開催した（8月26日，参加人数20名）。

<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html> \*参照

## 研究成果の社会への還元

- (1) 先行研究文献のレビュー論文 8 本（外国語文献 3 本，日本語文献 5 本）を国立国語研究所学術情報リポジトリに登録，さらに本プロジェクトのサイトには学術情報リポジトリへのリンクを掲載し，研究成果のより広い範囲への発信に努めた。

学術情報リポジトリ

[https://repository.ninjal.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom\\_sort&search\\_type=2&q=1698906667279](https://repository.ninjal.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom_sort&search_type=2&q=1698906667279)

プロジェクトサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html>

【オープンアクセス】【若手支援】

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

- (1) 日本語教師セミナー（ジャカルタ国立大学，2023 年 9 月 25 日）においてプロジェクトの紹介を行う活動を行い，海外の研究者を共同研究員として受け入れるための働きかけを積極的に行った。
- (2) 多様な視点や幅広いネットワークを本プロジェクトに取り入れるために，海外出身者の研究者を共同研究に参加するように積極的に働きかけ，共同研究員 2 名の参画を継続した（ロシア出身の研究者 1 名，韓国出身の研究者 1 名）。

### 英語による研究成果の発信等

- (1) キルギス共和国日本語教師会主催の第 7 回キルギス 2023 日本学・日本語教育国際研究大会（2023 年 8 月 22 日）において，海外に向けた研究成果発信を行った（日本語）。

<https://jlkyoushikai-kyrgyz.jimdofree.com/>

- (2) 『キルギス日本語教育研究』7 号に，本プロジェクトに関する研究論文が掲載された（日本語）。

## 5. その他

- (1) 日本語教師セミナー（ジャカルタ国立大学，2023 年 9 月 25 日）において，本プロジェクトの内容や方法論について紹介した。[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230925a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230925a/)

# 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」評価報告

## 令和5年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

本共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」は、日本語非母語話者すなわち日本語学習者および定住外国人の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その成果を教育支援に生かすことを目的としている。実質5つの研究サブプロジェクトと1つの統括サブプロジェクトによって構成され、本年度(2023(R5)年度)は6年計画の2年目にあたる。

6つのサブプロジェクトそれぞれの4つの計画項目についての自己評価内容を縦覧したところ、各サブプロジェクトの総合評価はそれぞれ概ね妥当であり、また、4つの計画項目それぞれの全体自己評価についても、多少の上下動の要素が見受けられるものの概ね妥当であると判断した。したがって、共同研究プロジェクト全体の全項目の総合評価「A」は妥当であり、外部委員評価を「A」評価とした。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」「日本語学習者の作文教育支援研究」においては計画を上回る成果を出しており、また「定住外国人の談話の縦断研究」の「その他」に記載されている「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」プロジェクトとの連携協力のもとでの学会発表や、リテラシーに関する調査方法の開発に関わる発表を内外の学会などにおいて行ったことを考慮することができ、当該項目の総合評価「A」は妥当であると考えられる。

#### 2. 教育・人材育成について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」「日本語学習者の作文教育支援研究」「定住外国人のよみかき研究」においては計画を上回る成果が見られ、「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」においても計画にはない成果が1つ記載されてはいるものの、総じて計画を上回るとまでは言えないと捉え、当該項目の総合評価「B」は多少厳しいとも考えられるものの、概ね妥当であると判断した。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

サブプロジェクト「定住外国人のよみかき研究」においては、連携強化のための活動を積極的に行い、文献レビュー論文8本の公表もあって、計画を上回って実施したと評価できるが、他のサブプロジェクトについては、計画されていた内容をほぼ計画どおりに実施したにとどまると捉えることができる。したがって、当該項目のプロジェクト全体としての総合評価「B」は妥当であると考えられる。

#### 4. 国際連携・国際発信について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」では、計画を上回る成果を出しているが、他の3つのサブプロジェクトは概ね計画どおりの実施にとどまっていると言える。しかし、サブプロジェクト「定住外国人の談話の縦断研究」の「そ

の他」に記載されている1件の発表は、EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）とAJE（ヨーロッパ日本語教師会）の合同の国際研究大会で行われており、昨今の内外の日本語教育の研究・実践に大きな影響を及ぼしているCEFRを生み出したヨーロッパ地域における発信であり、国際連携や研究のグローバル化という観点からは、注目すべき成果だと考えられる。この点を考慮し、また他のサブプロジェクトの計画を上回る成果を念頭において、当該項目の総合評価「A」は概ね妥当であると考えられる。

## 5. その他特記事項

5つのサブプロジェクトの研究課題を見ると、高等教育段階における日本語学習者についての「コーパス研究」が2つ、同様の日本語学習における支援ツールの開発研究が1つ、後の2つは地域日本語教育の主たる対象者である定住外国人についての談話研究と読み書き研究で構成されている。昨今の日本語教育の研究領域・実践領域の多様化あるいは拡大・拡散の様相が示されていると受け止めることができる。

とりわけ、地域社会の定住外国人の日本語学習や習得の実態、複言語・複文化的な言語生活実態などについては、研究への志向が十分に形成されていない嫌いがあるが、国語研での研究プロジェクトの中に、サブプロジェクトとはいえそのような視点が導入されてくることは重要なことであると考えられる。他の共同研究プロジェクトとの更なる連携協力や横断的な活動にも注力していく必要があると言える。

言語権など人の移動と言語使用の政治性への自覚、言語の習得と摩滅・喪失の構造的把握、言語実践・言語運用の社会的・文化的被束縛性の解明など、言語観の修正・更新にも関わると思われる諸課題へのアプローチが遠からず視界に定着することを期待したい。

## 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検評価報告

プロジェクト名：開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

### 令和5年度プロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	A

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

第3期までの構築分では不足する日本語史研究資料の増補を、本プロジェクト主体による整備だけでなく、開かれた共同構築環境のもとで全国の（世界中の）研究者と連携して行う。そのために、国語研の『日本語歴史コーパス』と親和性の高い標準データ形式を共同で策定し、この形式でデータを作成するための補助ツールを開発、チュートリアルを開催して普及を図る。そのうえで、標準データ形式のデータを国語研で受け入れてコーパス検索アプリケーション「中納言」を通して公開、共同利用に供する。さらに、「昭和・平成書き言葉コーパス」科研（代表者：小木曾）と連携することで上代語から現代語まで接続した真の通時コーパスとして成立させる。

なお、『日本語歴史コーパス』の増補に際しては、フィージビリティスタディを継続して機械翻訳による現代語訳付与を模索する。

#### 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4)年度	「通時コーパス」プロジェクトの引き継ぎ OpenCHJの環境整備  日本語歴史コーパスの増補	『日本語歴史コーパス』増補作業の引き継ぎ  「OpenCHJ 中納言」サーバーの準備 標準データフォーマットの準備・調査 拡張Web茶まめ（OpenCHJ構築支援ツール）の試作 『日本語歴史コーパス』の増補（一部公開） 機械翻訳による現代語訳試行 （必要に応じONCOJの更新，以下同じ）

2023 (R5) 年度	OpenCHJ の公開開始  日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」によるデータ公開 標準データフォーマットの策定 拡張 Web 茶まめ (OpenCHJ 構築支援ツール) の公開 OpenCHJ チュートリアルを開催  『日本語歴史コーパス』増補データの公開 機械翻訳による現代語訳試行 (この頃までに方針決定し、 実用可能なら『日本語歴史コーパス』増補に現代語訳付与を 含める。短期的な実用化が難しい場合は基礎研究を継続)
2024 (R6) 年度	OpenCHJ の公開  日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 OpenCHJ に関する書籍刊行の準備  『日本語歴史コーパス』増補データの公開
2025 (R7) 年度 (前半)	OpenCHJ の普及  日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 OpenCHJ に関する書籍の刊行  『日本語歴史コーパス』増補データの公開
暫定評価		
2026 (R8) 年度	OpenCHJ の定着  日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催  『日本語歴史コーパス』増補データの公開
2027 (R9) 年度	OpenCHJ の総括	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催

## II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 11,648 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築 (アクティビティ)

- (1) 『昭和平成書き言葉コーパス』の完成版を公開した (2023年6月)。
- (2) 『日本語歴史コーパス』「明治大正編」に「布哇日本語教科書 (第1期)」を、「キリシタン資料」に「天草版金句集」を追加して公開した (2024年3月)。

このほか、下記のデータ整備を行った。

- ・「上方絵入狂言台本」「古今集遠鏡」のコーパス整備を行った。

- ・能楽研究所との協定に基づき謡曲のテキストデータの提供を受け、一部を XML 形式に変換し、既存の辞書（中世文語 UniDic）を用いた形態素解析を試行した。
- ・OpenCHJ の外部データとして、「抄物コーパス」「雑誌キング」「帝国議会議事録」の受け入れ準備を行った

- (3) 「みんなごん」を通じたコーパス更新は 2024 年夏に延期した。
- (4) OpenCHJ 標準データフォーマットを策定して研究発表を行った。（じんもんこん・2023 年 12 月）
- (5) 「Web 茶まめ」を更新し、新しい UniDic に対応し、大納言インポート形式に対応したバージョンを公開した（2024 年 3 月）
- (6) 東京農工大学古宮研究室と連携して機械翻訳による古文の現代語訳を試行した。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) オックスフォード大学と連携して ONCOJ のデータ整備を継続した。
- (2) 国立国会図書館については、先方の都合（大規模言語モデルを前提としたデータ提供条件の整備が必要となったこと）により連携は保留となった。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」から UniDic データベースに見出し語を追加・整備した（布哇日本語教科書から 50 語彙素・559 書字形、天草版金句集から 82 語彙素、269 書字形など）。
- (2) 言語資源開発センターと合同で「中納言」による『日本語歴史コーパス』『昭和平成書き言葉コーパス』の公開を継続した。（アクセス数：CHJ 604,371, SHC 77440）
- (3) 言語資源開発センターと合同で「みんなごん」を運用した。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 自然言語処理分野の研究者と学際的な研究を実施し、共著の査読付き論文を刊行し（自然言語処理 20(2), 2023 年 6 月）、言語処理学会で発表を行った。（2024 年 3 月）

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 『昭和平成書き言葉コーパス』の完成版を公開した。（2023 年 6 月）
- (2) 『日本語歴史コーパス』『明治大正編』に「布哇日本語教科書（第 1 期）」を、「キリシタン資料」に「天草版金句集」を追加して公開した（2024 年 3 月）【重出】
- (3) 「みんなごん」を通じたコーパス更新は 2024 年夏に延期した。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」シンポジウムを開催し、研究発表を 11 件行った。（2024 年 3 月）

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 共同研究員による『日本語歴史コーパス』を活用した研究を論文 17 件（学会プロシーディングスを含む）、学会発表等 37 件、発表した。
- (2) 『コーパスによる日本語史研究 近世編』をひつじ書房から刊行した（2023 年 12 月）

#### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』の利用法に関する講習会を 2 回実施した（2023 年 9 月 6 日、12 日）
- (2) みんなごん および OpenCHJ 構築に関するチュートリアルを開催した（2024 年 3 月）

#### データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 『日本語歴史コーパス』の中納言検索クエリ数（CHJ：60.4 万件、SHC：7.7 万件）
- (2) CHJ を利用した論文等 84 件、SHC を利用した論文数 21 件（2023 年刊行分、4 月現在の判明分、コーパス重複を含む）

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 特別共同利用研究員の受け入れ

- (1) 特別共同利用研究員については、今年度は受け入れなし。(学振PDを1名外来研究員として受け入れた。)

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大「言語資源学」「言語資源学演習」の授業で通時コーパスに関する講義・演習を行った。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員2名を雇用してコーパス構築と研究を実施した。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生4名、学振PD2名をプロジェクト非常勤研究員として雇用しプロジェクトに参加させた。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 現代日本語史研究会を4回開催(2023年6月, 10月, 12月, 2024年3月)して現代日本語史研究会で若手研究者の発表機会を設けた。
- (2) 「通時コーパス」シンポジウムを開催して若手研究者の発表機会を設けた。(2024年4月)【重出】

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 若手研究者(共同研究員)の研究発表の費用の支援を行った。(日本語学会, DH2023, EAJS, 日本語文法学会, 言語処理学会)

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』の利用法に関する講習会を2回実施した(2023年9月6日, 12日)【重出】

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 産業界との連携

- (1) 小学館出版局との連携協定のもとで『日本語歴史コーパス』の公開継続・更新を行った。

### 社会人を対象とするスキルアップの計画等

- (1) 国語科教員(国語教育科学生)に向けた『日本語歴史コーパス』の講習会については、本年度は実施しなかった。

### 研究成果の社会への還元

- (1) 通時コーパスを利用した成果をテレビ番組等を通して発信した。(2024年1月)

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の大学との連携等

- (1) オックスフォード大学と連携してONCOJのデータ整備を継続した。

### 英語による研究成果の発信等

- (1-1) DH2023, EAJS ヨーロッパ日本学会でCHJを活用した研究発表を行った。
- (1-2) 上海外国語大学でSHCに関するオンライン講演を行った(2023年9月)
- (2) 新規公開データについてCHJ・SHCのウェブページを拡充した。

# 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価報告

## 令和5年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

これまでに構築されてきた「通時コーパス」について、開かれた共同構築環境にこれを置くことによって、通時コーパスをいっそう拡大させて行く契機としようという本プロジェクトは、2年度目となる2023年度において、計画を上回って実施されていると評価する。

コーパスの拡充も順調であるし、また今後、共同構築データ（仮称：OpenCHJ）を作成・整備してゆくための土台作り、そして一部実装、外部データの受け入れ準備などは、計画を超えるペースで進んでいると見られる。教育・人材育成は、計画通りの実施と評価出来るし、社会連携・社会貢献も計画通り、国際連携・国際発信も計画通りの実施であると評価出来る。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

「昭和・平成書き言葉コーパス」の完成版が公開された。「日本語歴史コーパス」と「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の空白を繋ぐコーパスとして、有意義な存在となった。「日本語歴史コーパス」の拡充も順調である。共同構築データ（仮称：OpenCHJ）については、そのフォーマットを策定して研究発表を行い仕様を固めるとともに、外部データについても、その受け入れ準備を具体的に進めており、通時コーパスの拡大の契機となることが期待出来る状況となった。データの整備に必要な形態素解析の環境も UniDic の改訂や web 茶まめの改訂などで進んでいることが示されており高く評価出来る。コーパスユーザーから修正情報を集積する「みんなごん」の運用も行われている。機械翻訳による古文の現代語訳の試行がなされ、現代語訳のなされていない古文データをコーパスに入れて共有する形に向けて期待が出来る試行である。

書籍・論文等によるアウトプットも順調であり、岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 近世編』ひつじ書房（2023年12月）の刊行により、前プロジェクトからのものと合わせて、時代別に見て行く中古/中世・近世・近代の三冊が揃ったことになり、大きな成果と言える。以上のように、共同研究・共同利用は、計画を上回って実施されていると考える。

#### 2. 教育・人材育成について

大学院生、学振 PD をプロジェクト非常勤研究員として雇用しプロジェクトに参加させたほか、外来研究員として受け入れるなどしている。

「通時コーパス」シンポジウム、現代日本語史研究会を開催して若手研究者の発表機会を設け、また共同研究員である若手研究者の日本語学会・DH2023・EAJS・日本語文法学会・言語処理学会での研究発表の旅費等の費用を支援した。

『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』の利用法に関する講習会を2回実施した。上記のように、教育・人材育成に寄与する目標を、計画通り達成している。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

連携予定であった国立国会図書館については、先方の都合（大規模言語モデルを前提としたデータ提供条件の整備が必要となったこと）により連携が保留となったことは残念であった。

小学館出版局との連携協定のもとで「新編日本古典文学全集」を活用した『日本語歴史コーパス』の公開継続・更新を行った。社会連携を、計画通りに行ったと評価出来る。

共同研究の条にも書いた『コーパスによる日本語史研究 近世編』の刊行は、一般社会に向けて、江戸時代語の資料・コーパスについて伝える書となっており、テレビ番組において、言葉に関する一般的な疑問に対して、通時コーパスを利用した成果に基づいて説明したことなどと合わせて、社会貢献を、計画通りに行ったと評価出来る。

#### 4. 国際連携・国際発信について

本プロジェクトに関わるウェブページの英語版については、「昭和・平成書き言葉コーパス」ウェブページで英語版解説が設置され、「日本語歴史コーパス」でも、新規公開データの英語版が拡充された。

ADHO(デジタル・ヒューマニティ組織連合)の国際会議 DH2023 (7月にオーストリアで開催), EAJS ヨーロッパ日本学会の EAJS2023 (8月にベルギーで開催) で, CHJ を活用した研究発表を行ったほか, 上海外国語大学で9月に SHC に関するオンライン講演を行うなど, 国際的な学会で, 本プロジェクトの成果などを発信しており, 国際発信は計画どおりに実施されていると評価する。

英国オックスフォード大学と連携しての ONCOJ(オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス)のデータ整備は継続されており, 国際連携も計画どおりに実施されていると評価する。

#### 5. その他特記事項

共同構築データの仕組みで外部データを受け入れに可能にすることは歓迎されるが, 「日本語歴史コーパス」の資料をどのように拡充させていくか, または他のコーパスとの連携・統合可能かどうかを課題として検討することが望まれる。

## 令和5年度 センターに関する評価

- 言語資源開発センター
- 共同利用推進センター

# 「言語資源開発センター」自己点検評価報告

センター名：言語資源開発センター

センター長：高田 智和

## 令和5年度自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 令和5年度活動概要

令和5年度予算額 38,759千円

#### 令和5年度 成果の概要

言語資源開発センターは、研究系（所内の共同研究プロジェクト）や研究者コミュニティと連携してコーパス等の言語資源の整備・開発及びその研究・教育への活用を通して言語資源学の創成に寄与することを目的とする。令和5年度は以下の活動を実施した。

#### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

- (1) 複数の共同研究プロジェクトと共同で形態素解析用辞書 UniDic を整備した。
- (2) コーパス検索ツール「中納言」を安定的に運用し、データの新規公開（B-JAS 北京日本語学習者縦断コーパス）、データの追加（CHJ 日本語歴史コーパス, COJADS 日本語諸方言コーパス）、データの修正（C-JAS 中国語・韓国語母語の日本語学習者横断発話コーパス, I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス）、及び機能拡張を行った。利用者数は年間で 69,454 名増加した。
- (3) 研究所が保有する言語資源（コーパス）を利用する外部公募の共同利用型共同研究(C)を 9 件実施し、所外研究者との交流を図った。
- (4) 言語資源に関する知識・技術の普及を図るため、「第 2 回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」を開催した（日本音声学会協賛）。また、「中納言」講習会を複数の共同研究プロジェクトと連携して 4 回開催した。
- (5) 言語資源開発センター専任職員・研究員による研究発表 11 件、論文刊行 2 件を行った。

#### 2. 大学院教育・若手育成に関する計画

総研大及び連携大学院で言語資源に関する知見・技術の普及を図った。また若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ 2023」（国立情報学研究所後援）を開催した。発表の実績を記録するため『言語資源ワークショップ 2023 発表論文集』にまとめ、国立国語研究所学術情報リポジトリに登録・公開した。

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために、授業用アカウントを発行した（131件、対象者（受講者）は4,015名）。

### 4. グローバル化に関する計画

英文ページ未設置の各コーパス特設サイトについて英文ページ作成に着手した。公開は「名大会話コーパス」にとどまり、次年度以降に順次公開する。

## II. 令和5年度の項目ごとの状況

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」との共同により、形態素解析用電子化辞書UniDicの整備を行い、古文用のUniDic 11種（ver. 2023.08）を更新・新規公開した。

<https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/>

- (2) 「分類語彙表データベース」の改訂作業を行った。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 研究所が保有する言語資源（コーパス）を利用する公募の共同利用型共同研究(C)を9件実施した。いずれも言語資源開発センター併任教員がコーディネータを務めている。

<https://www.ninjal.ac.jp/research/cr-project/project-4/>

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」「多世代会話コーパス」「語彙資源」プロジェクトとの連携によりコーパス検索ツール「中納言」講習会を4回開催した。【重出、「データベース等に関する講習会・講演会」参照】
- (2) 「言語資源ワークショップ2023」を国立情報学研究所後援によりオンライン開催した（8月28～29日）。【重出、「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照】
- (3) コーパス構築に関わる所内共同研究プロジェクトと連携して、各種コーパスのデータ整備等を実施した。【重出、「調査データ・データベース等公開」参照】

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) コーパス検索ツール「中納言」について次の通りデータ更新等を実施した。

- ①B-JAS 北京日本語学習者縦断コーパス「中納言」データ公開（3月）※「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」と連携
- ②C-JAS 中国語・韓国語母語の日本語学習者横断発話コーパス「中納言」データ修正（3月）※「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」と連携
- ③I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス「中納言」データ修正（3月）※「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」と連携
- ④CHJ 日本語歴史コーパス「中納言」データ追加（3月）※「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」と連携
- ⑤COJADS 日本語諸方言コーパス「中納言」データ追加（3月）※「消滅危機言語の保存研究」と連携

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「言語資源ワークショップ2023」を国立情報学研究所後援によりオンライン開催した（8月28～29日）。発表45件（口頭発表15件、ポスター発表28件、招待講演2件）。総参加者数294名。

<https://clrd.ninjal.ac.jp/lrw2023.html>

事後に『言語資源ワークショップ2023 発表論文集』を国立国語研究所学術情報リポジトリに登録・公開した(11月)。<https://doi.org/10.15084/0002000110>

#### 書籍・論文等による研究成果の公表(アウトプット)

(1) 研究発表11件。論文2件。

#### データベース等に関する講習会・講演会(アウトプット)

(1) 「第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」を、国語研共同利用推進センター共催、科研費基盤研究(B)20H01265共催、日本音声学会協賛により開催した(8月31日～9月1日、於国語研)。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230831a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230831a/)

また、同セミナーの講義動画を国語研公式YouTubeにて公開した。(12月)

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLZfZgVvFbh1aZB9ByasQOpSm5qQFLWVWb>

(2) コーパス検索ツール「中納言」講習会を、コーパス構築に関わる所内共同研究プロジェクトと共催で4回開催した。

①『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』『中納言』講習会【初級編】(9月6日、於国語研) ※「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」と連携

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230906a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230906a/)

②『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』『中納言』講習会【初級編】(9月12日、オンライン) ※「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」と連携

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230912a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230912a/)

③オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】(11月5日、オンライン) ※「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」「学習者辞書用語彙資源の構築」と連携

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20231105b/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105b/)

④NINJALチュートリアル『日本語日常会話コーパス』の活用 —『中納言』の使い方—(12月2日、オンライン) ※「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」「学習者辞書用語彙資源の構築」と連携

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20231202a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231202a/)

#### データベース等を使った研究成果・利用実績(アウトカム)

(1) 講習会などを通して「中納言」の利用を促進したことにより、利用者(延べ)が昨年度より69,454名増加し316,851名となった。

<https://clrd.ninjal.ac.jp/data.html>

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 教員6名が総研大の授業「言語資源学」「言語資源学演習」「日本語情報処理」「日本語情報処理演習」を担当した(併任教員による)。

(2) 教員3名が連携大学院(一橋大学言語社会研究科)においてコーパスに関する指導を行った(併任教員による)。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト非常勤研究員3名を雇用し、テキスト、音声に関するデータ整備を行った。

### 若手研究者への発表の機会の提供

(1) 「言語資源ワークショップ2023」を国立情報学研究所後援によりオンライン開催した(8月28～29日)。**【重出、「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照】**

#### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) プロジェクト非常勤研究員が学会発表をする際の参加費・旅費の補助を行った（海外1回，国内1回）。

#### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) コーパス検索ツール「中納言」講習会を，コーパス構築に関わる所内共同研究プロジェクトと共催で4回開催した。【重出，「データベース等に関する講習会・講演会」参照】

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

#### 地域・社会との連携

- (1) コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために，授業用アカウントを発行した（131件，対象者（受講者）は4,019名）。
- (2) 中納言ユーザグループを運用し，ユーザー間の情報交換を図った。  
<https://groups.google.com/g/chunagon-users>

### 4. グローバル化に関する計画

#### 英語による研究成果の発信等

- (1) 各コーパス特設サイトについて，英文ページ未設置のサイトについて，英文ページの作成を行った。「名大会話コーパス」英文ページを公開し（3月），他は次年度以降順次公開する。  
<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/en/index.html>

# 「言語資源開発センター」評価結果

## 令和5年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

共同利用・共同研究、教育・人材育成、社会連携・社会貢献の各分野で着実な成果を上げている。特に、コーパス検索ツール「中納言」の運用・改善と利用促進は高く評価できる。利用者数の大幅増加は、センターの取り組みが研究コミュニティに広く受け入れられていることを示している。

共同利用型共同研究の実施や「言語資源ワークショップ2023」の開催は、所外研究者との交流促進に寄与している。また、総研大や連携大学院での教育活動、若手研究者への発表機会の提供や支援は、次世代の言語資源研究者育成に貢献している。

社会連携面では、「中納言」の教育現場での活用促進が注目される。一方、国際連携・国際発信については、英文ページの作成に着手したものの、活動が限定的である点が課題として挙げられる。

今後は、国際的なプレゼンス向上のための取り組み強化や、言語資源の社会実装・一般社会への還元をより積極的に進めることが望まれる。

総じて、言語資源開発センターは言語資源の整備・開発とその活用を通じて言語資源学の発展に貢献しており、その役割を十分に果たしていると評価できる。今後も、これらの活動をさらに発展させ、言語資源学の中心的な役割を担うことが期待される。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

形態素解析用辞書UniDicの整備や、コーパス検索ツール「中納言」の運用・改善は特筆に値する。新規データの公開や既存データの追加・修正により、「中納言」の利用者数が大幅に増加したことは、その有用性と需要の高さを示している。

また、9件の共同利用型共同研究(C)の実施や、「言語資源ワークショップ2023」の開催は、所外研究者との交流を促進し、言語資源研究の発展に貢献している。さらに、「中納言」講習会や音声生成に関するハンズオンセミナーの開催は、言語資源に関する知識・技術の普及に寄与している。

センター専任職員・研究員による研究発表11件、論文刊行2件は、センターの研究活動の活発さを示している。今後も、言語資源の整備・開発とその活用を通じて、言語資源学の発展に貢献することが期待される。

#### 2. 教育・人材育成について

総研大や連携大学院での授業・演習を通じて、言語資源に関する知見・技術の普及に努めている。特に、6名の教員が総研大で言語資源学関連の授業を担当し、3名が連携大学院でコーパスに関する指導を行っていることは評価できる。

若手研究者の育成にも力を入れており、プロジェクト非常勤研究員3名の雇用や、「言語資源ワークショップ2023」の開催を通じて、若手研究者に発表の機会と研究交流の場を提供している。

また、プロジェクト非常勤研究員の学会発表に対する参加費・旅費の補助は、若手研究者の研究活動を支援する重要な取り組みである。

「中納言」講習会の開催は、若手研究者を含む幅広い層に向けた言語資源活用のスキル向上に貢献していると考えられる。これらの活動を通じて、次世代の言語資源研究者の育成に寄与していると評

価できる。

### 3. 社会連携・社会貢献について

コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用促進が主な取り組みとなっている。特に、授業用アカウントの発行（131件、対象者4,019名）は、言語資源の教育現場での活用を大きく後押ししており、高く評価できる。

また、中納言ユーザグループの運用を通じて、ユーザー間の情報交換を促進していることも、「中納言」の効果的な利用と普及に寄与している。これらの取り組みは、言語資源の社会実装と教育への応用を推進する上で重要な役割を果たしている。

しかし、報告書からは一般社会向けの取り組みが見えにくいため、今後は研究成果の一般向け発信や、言語資源を活用した社会課題解決への貢献など、より広範な社会連携・社会貢献活動を検討することが望ましい。

### 4. 国際連携・国際発信について

各コーパス特設サイトの英文ページ作成に着手したことが主な取り組みとして挙げられる。「名大会話コーパス」の英文ページ公開は具体的な成果であり、他のコーパスについても次年度以降順次公開予定とのことで、着実に進展していると評価できる。

しかし、報告書からは国際連携や国際発信に関する活動が限定的に見える。例えば、国際的な共同研究プロジェクトの実施、海外の研究機関との連携、国際会議での発表や英語での論文発表などの活動は見られない。

グローバル化が進む言語研究の分野において、言語資源開発センターの国際的なプレゼンスを高めるためには、より積極的な国際連携・国際発信の取り組みが必要である。今後は、海外の研究者や機関との共同研究の推進、国際シンポジウムの開催、英語での成果発信の強化などを検討することが望ましい。

### 5. その他特記事項

報告書の「その他」の項目には特記事項がないとされているが、全体を通して見ると、言語資源開発センターの活動は着実に進展していると評価できる。特に、コーパス検索ツール「中納言」の利用者数が大幅に増加したことは、センターの取り組みが研究コミュニティに広く受け入れられていることを示している。また、複数の研究プロジェクトと連携してデータ整備や講習会を実施していることから、センターが研究所内外の協力関係を構築し、効果的に機能していることがわかる。

# 「共同利用推進センター」自己点検評価報告

センター名：共同利用推進センター

センター長：石黒 圭

## 令和5年度自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

## I. 令和5年度活動概要

令和5年度予算額 69,850 千円

### 令和5年度 成果の概要

#### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

- (1) オープンアクセス方針に沿って「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での研究成果の登録・公開を推進した。今年度追加183件、総数3,203件となった。
- (2) 日本語研究・日本語教育研究分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備した。「日本語研究・日本語教育文献データベース」に、6,409件を追加登録した。また、詳細検索等の項目追加の改修を行った。
- (3) 研究図書室収蔵図書資料の整備を進め、「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した。今年度の図書の受入数は冊子のみで2,318件、電子ブックを含めると2,477件となった。
- (4) 貴重図書等のデジタル化を進め、「日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]」に18件追加公開した。
- (5) 研究資料室収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は13件、収蔵資料目録試行版の追加登録は5,469件となった。
- (6) 音声・映像資料の媒体変換（デジタル化）を進め、『日本言語地図』調査票等の紙媒体資料のデジタル撮影（37,955枚）と音声・映像資料の媒体変換（129点）を行った。また、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡張した（音声505点、映像7点）。
- (7) 媒体変換したデジタルデータについて長期保存用LTO（6点）を作成した。
- (8) 人間文化研究機構の「令和5年度 社会との共創によるデジタル・ヒューマニティーズ（DH）の推進」公募事業（データ構築補助）に申請し、研究資料室収蔵資料の目録データ「収蔵資料群概要」「収蔵資料目録」「言語地図草稿目録」の3種について、nihuBridgeの統合検索用メタデータを構築し、nihuBridgeに登録した。
- (9) 国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し、国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍204冊を貸出している。画像データ化は2024年度に行われる予定。
- (10) 併任教員4名を配置し、言語資源開発センターとの連携のもと、有償版コーパスの管理・公開体制の整備を進め、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』の増刷（複製）、及びウェブページの更新を行った。
- (11) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」と連携し、国立国語研究所デジタルアーカイブサイト（NINDA）の構築を進めた。

- (12) 「BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス」「教育基本語彙データベース・日本語教育基本語彙データベース」を公開した。
- (13) 「鳩間方言辞典データセット整備」など、第3期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料（新規5件、補遺6件、追加11件）を受け入れ、研究資料室に来室利用ができるよう資料整備を行った。
- (14) 情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で、2023年9月8日に2023年度共同利用セミナーをWeb開催で行い、「幼児の言語資料」「諸鈍方言辞典」「国立国語研究所研究資料室所蔵音声・映像データベース」の紹介を行った。参加者は77名であった。
- (15) 2023年7月22日開催の、インドネシア共和国・ジャカルタ国立大学言語芸術学部日本語教育科主催研修会、および、2023年9月25日に同大学で開催した2023年度NINJAL日本語教師セミナー（海外）において、国立国語研究所日本語教育映像教材シリーズについての紹介を行った。
- (16) 2023年11月、「図書館総合展2023」に、国立国語研究所研究図書室がオンライン出展し、蔵書を利用した共同研究、「日本語研究・日本語教育文献データベース」、研究図書室について紹介を行った。
- (17) 2024年1月19日、第37回「東洋学へのコンピュータ利用」研究セミナーに共同利用推進センターも共催し、研究資料室資料に関する発表および資料展示を行った。
- (18) 2023年8月31日・9月1日、「第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」に共同利用推進センターも共催し、音声生成に関する計測技術の体験機会を提供した。
- (19) データベース等に多くのアクセスを得た。
- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ ダウンロード回数45.3万  
※2023年6月30日からWEK03に移行したため、前年度と集計方法が異なる。
  - ・日本語研究・日本語教育文献データベース セッション数9.2万
  - ・日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕 セッション数2.4万
  - ・国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベース セッション数6,700
  - ・共同利用推進センター配布コンテンツ セッション数8.0万
  - ・雑誌「国語学」全文データベース セッション数4,200
  - ・研究資料室の閲覧利用者 62名

## 2. 大学院教育・若手育成に関する計画

- (1) 「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発、研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進のため、プロジェクト非常勤研究員を6名雇用した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

- (1) 『国立国語研究所論集』（オンラインジャーナル）を2回（25号、26号）発行した。25号より、関連データに加えて論文についても、クリエイティブ・コモンズのライセンスを付けて公開開始した。

## 4. グローバル化に関する計画

- (1) 韓国日語教育学会、韓国日本語學會と連携し、韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。
- (2) コーパスを活用した国際的な日本語研究促進のために、ELDAによる「日本語話し言葉コーパス（CSJ）」（有償版コーパス）の配付を開始した。

## 5. その他

- (1) 研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し、2023年度共同利用型共同研究の採択課題（共同利用型共同研究（A）8件、同（B）2件）に対して、研究資料及び研究情報を提供した。
- (2) 言語系学会連合との覚書に基づき、同連合加盟の日本語学会機関誌『日本語の研究』に対し、展望記事執筆のために研究文献データの先行提供を行った。

## II. 令和5年度の項目ごとの状況

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 国立国語研究所の研究成果のオープンアクセスを加速するため、オープンアクセス方針に沿って研究成果の公開を推奨し、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での登録・公開を推進した。今年度追加183件、総数3,203件となった。今年度はJAIRO CloudのWEK03移行のため2か月ほど新規登録を停止した。【オープンアクセス】

<https://repository.ninjal.ac.jp/>

- (2) 日本語研究・日本語教育研究の共同利用に供するため、当該分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し、「日本語研究・日本語教育文献データベース」に6,409件を追加登録し、総データ件数は、286,835件となった。大学学術機関リポジトリ及び学協会誌公開プラットフォームに掲載された論文本文PDFへのリンク件数は40,968件である。また、詳細検索等の項目追加の改修を行った。【オープンアクセス】

- (3) 研究図書室収蔵図書資料の利活用のため、図書資料の整備を進め、「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した。今年度の図書の受入数は冊子のみで2,318件、電子ブックを含めると2,477件となった。

<https://libgw.ninjal.ac.jp/drupal/>

- (4) 国立国語研究所が所蔵する貴重図書等のデジタル化を進め、「日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]」に18件追加公開した。【オープンデータ】

<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/>

- (5) 研究資料室収蔵資料の利活用のため、収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は13件、収蔵資料目録試行版の追加登録は5,469件となった。

<https://rnr.ninjal.ac.jp/>

- (6) 研究資料室収蔵資料の保全と再利用のため、「『日本言語地図』調査票」等の紙媒体資料のデジタル撮影（37,955枚）と音声・映像資料の媒体変換（129点）を行った。また、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡張し（音声505点、映像7点）、共同利用環境を整備した。

<http://mereco/>

- (7) 媒体変換したデジタルデータについて長期保存用LT0（6点）を作成した。

- (8) 人間文化研究機構の「令和5年度 社会との共創によるデジタル・ヒューマニティーズ（DH）の推進」公募事業（データ構築補助）に申請し、研究資料室収蔵資料の目録データ「収蔵資料群概要」「収蔵資料目録」「言語地図草稿目録」の3種について、nihuBridgeの統合検索用メタデータを構築し、nihuBridgeに登録した。

[https://bridge.nihu.jp/integrated\\_search](https://bridge.nihu.jp/integrated_search)

### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し、国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍 204 冊を貸出している。画像データ化は 2024 年度に行われる予定。

### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 併任教員 4 名を配置し、言語資源開発センターとの連携のもと、有償版コーパスの管理・公開体制の整備を進め、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』の増刷（複製）、及びウェブページの更新を行った。
- (2) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」と連携し、国立国語研究所デジタルアーカイブサイト（NINDA）の構築を進めた。

### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 「BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス」「教育基本語彙データベース・日本語教育基本語彙データベース」を公開した。

<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/btsj/>

<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/brfvpe/>

- (2) 「鳩間方言辞典データセット整備」など、第 3 期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料（新規 5 件、補遺 6 件、追加 11 件）を受け入れ、研究資料室に入室利用ができるよう資料整備を行った。
- (3) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」と連携し、国立国語研究所デジタルアーカイブサイト（NINDA）の構築を進めた。

### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で、2023 年 9 月 8 日に 2023 年度共同利用セミナーを Web 開催で行った。参加者は 77 名（うち海外機関所属者数 10 名、学生数 15 名）であった。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230908a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230908a/)

### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 上記共同利用セミナーにおいて、「幼児の言語資料」「諸鈍方言辞典」「国立国語研究所研究資料室所蔵音声・映像データベース」の紹介を行った。
- (2) 2023 年 7 月 22 日開催の、インドネシア共和国・ジャカルタ国立大学言語芸術学部日本語教育科主催研修会において、国立国語研究所日本語教育映像教材シリーズについての紹介を行った。
- (3) 2023 年 9 月 25 日にインドネシア・ジャカルタ国立大学で開催した 2023 年度 NINJAL 日本語教師セミナー（海外）において、国立国語研究所日本語教育映像教材シリーズについての紹介を行った。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230925a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230925a/)

- (4) 2023 年 11 月、「図書館総合展 2023」に、国立国語研究所研究図書室がオンライン出展し、蔵書を利用した共同研究、「日本語研究・日本語教育文献データベース」、研究図書室について紹介を行った。

<https://www.libraryfair.jp/poster/2023/181>

- (5) 2024 年 1 月 19 日、第 37 回「東洋学へのコンピュータ利用」研究セミナーに共同利用推進センターも共催し、研究資料室資料に関する発表および資料展示を行った。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20240119b/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240119b/)

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/seminars/oricom/2024-1.html>

- (6) 2023 年 8 月 31 日・9 月 1 日、「第 2 回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」に共同利用推進センターも共催し、音声生成に関する計測技術の体験機会を提供した。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230831a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230831a/)

## データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

### (1) アクセス数等

国立国語研究所学術情報リポジトリ ダウンロード回数 45.3 万

※2023 年 6 月 30 日から WEK03 に移行したため、前年度と集計方法が異なる。

日本語研究・日本語教育文献データベース セッション数 9.2 万

日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵] セッション数 2.4 万

国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベース セッション数 6,700

共同利用推進センター配布コンテンツ セッション数 8.0 万

雑誌「国語学」全文データベース セッション数 4,200

### (2) 研究資料室の閲覧利用者 62 名

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発，研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進のため，プロジェクト非常勤研究員を 6 名雇用した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 研究成果の社会への還元

- (1) 『国立国語研究所論集』（オンラインジャーナル）を 2 回発行した（25 号は 2023 年 7 月，26 号は 2024 年 1 月）。25 号より，関連データに加えて論文についても，クリエイティブ・コモンズのライセンスを付けて公開開始した。【オープンアクセス】

<https://www.ninjal.ac.jp/info/publication/papers/25/>

<https://www.ninjal.ac.jp/info/publication/papers/26/>

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の大学との連携等

- (1) 韓国日語教育学会，韓国日本語學會と連携し，韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。
- (2) コーパスを活用した国際的な日本語研究促進のために，ELDA による「日本語話し言葉コーパス（CSJ）」（有償版コーパス）の配付を開始した。

## 5. その他

- (1) 研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し，2023 年度共同利用型共同研究の採択課題（共同利用型共同研究（A）8 件，同（B）2 件）に対して，研究資料及び研究情報を提供した。
- (2) 言語系学会連合との「日本語研究・日本語教育文献データベース」掲載データの Web 公開前の先行提供に関する覚書に基づき，同連合加盟の日本語学会機関誌『日本語の研究』に対し，展望記事執筆のために研究文献データの先行提供を行った。

# 「共同利用推進センター」評価結果

## 令和5年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

センターの主目的である共同利用・共同研究の基盤整備に関して顕著な成果を上げている。特に、各種データベースの拡充、資料のデジタル化、研究成果のオープンアクセス化など、研究基盤の強化に大きく貢献した点は高く評価できる。

一方で、教育・人材育成、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信の面では、一定の取り組みは見られるものの、さらなる発展の余地がある。特に、大学院生や若手研究者向けの体系的な教育プログラムの充実、地域社会や一般市民との直接的な連携活動の強化、国際的な共同研究プロジェクトの拡大などを検討しても良いのではないかと。

総じて、センターは日本語学・言語学分野の研究基盤整備において重要な役割を果たしているが、その機能と資源を最大限に活用し、より広範な影響力を持つ組織へと発展していくことが期待される。センターの活動や所蔵資料の認知度向上、利用促進に向けた広報戦略の強化、デジタル技術の更なる活用による新たな研究支援サービスの開発などが今後の課題と思われる。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

「国立国語研究所学術情報リポジトリ」への183件の追加登録や「日本語研究・日本語教育文献データベース」への6,409件の追加など、データベースの拡充が着実に進められている。また、音声・映像資料のデジタル化や所蔵資料のデータベース化も進展し、研究資料へのアクセシビリティが大幅に向上した。

共同利用セミナーの開催や他機関との連携によるデジタルアーカイブの構築など、研究コミュニティへの貢献も顕著である。特に、人間文化研究機構の公募事業への参加やnihuBridgeへのメタデータ登録は、機関を越えた研究資源の共有化に寄与している。

このような取り組みは、日本語学・言語学分野の共同研究を促進し、研究基盤の強化に大きく貢献していると高く評価できる。これらのリソースの利用状況や研究成果への影響を詳細に分析し、さらなる改善につなぐことが期待される。

#### 2. 教育・人材育成について

プロジェクト非常勤研究員6名を雇用した。これらの研究員は実践的な研究スキルを養う機会を得ており、若手研究者のキャリア形成に寄与していると考えられる。共同利用セミナーの開催や「第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」の共催など、研究者や学生が最新の研究手法や技術を学ぶ機会を提供している点も評価できる。

しかし、大学院生を対象とした具体的な教育プログラムや、若手研究者向けの体系的な育成計画は明確には読み取れない。データベース構築や資料整理のスキルを体系的に学ぶ機会の提供、共同研究プロジェクトへの大学院生の積極的な参加促進、若手研究者向けのメンタリングプログラムの導入などを考えてはどうか。

### 3. 社会連携・社会貢献について

オンラインジャーナル『国立国語研究所論集』を2回発行した。特に、論文および関連データにクリエイティブ・コモンズライセンスを付与してオープンアクセス化したことは、研究成果の社会還元という観点から高く評価できる。

また、「図書館総合展 2023」へのオンライン出展を通じて、研究図書室の活動や日本語研究・日本語教育文献データベースの紹介を行ったことも、一般社会への情報発信として意義がある。

しかし、地域社会や一般市民を対象とした直接的な連携活動や、研究成果の社会実装に関する取り組みは明確には読み取れない。今後の課題としては、研究成果をより分かりやすく一般社会に還元する方法の開発、地域社会のニーズに応じた言語関連の支援活動の展開、企業や自治体との連携強化などが考えられる。

### 4. 国際連携・国際発信について

韓国の学会との連携による日本語学関連文献情報の継続的な収集は、国際的な研究ネットワークの維持・強化に貢献していると考えられる。また、ELDAを通じた「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」の国際配布開始は、日本語研究の国際的な普及に大きく寄与する取り組みとして高く評価できる。さらに、ジャカルタ国立大学での日本語教師セミナー開催や日本語教育映像教材シリーズの紹介など、海外での日本語教育支援活動も注目に値する。

一方で、国際的な共同研究プロジェクトの実施や、海外の研究機関との組織的な連携、国際シンポジウムの開催などについては明確な記述が見られない。より多くの国・地域との連携拡大、国際共同研究プロジェクトの立ち上げ、海外の研究者との人材交流プログラムの実施などが今後の課題と思われる。

### 5. その他特記事項

2023年度共同利用型共同研究の採択課題に対して研究資料および研究情報を提供するなど、研究支援体制の整備に努めている点は高く評価できる。これは、センターが積極的に研究活動を支援・促進する機関として機能していることを示している。

また、言語系学会連合との覚書に基づく研究文献データの先行提供など、学術コミュニティへの貢献も注目に値する。さらに、人間文化研究機構の公募事業への参加や nihubridge へのメタデータ登録など、他機関との連携も積極的に進めている点も評価できる。

# 令和5年度管理業務に関する評価

## 業務運営の改善及び効率化に関する取組

### 1. 組織運営の改善に関する取組

- ・研究所の管理運営に関する重要事項について審議する運営会議については、毎回（年3回開催）議事要旨を国語研ウェブサイトに掲載するとともに、研究所の教員に関する業績評価の基準について、運営会議の外部委員からの意見を踏まえた修正を行うなど、組織運営の改善に活かした。
- ・外部評価委員会委員からいただいた研究所ホームページについてのご意見を踏まえて、共同利用推進センターのページを新設したほか、言語資源開発センターのページに同センターのミッションなどの記載を行った。
- ・多様なライフスタイルへの対応、ワークライフバランスの実現および時間の有効利用による生産性向上に資することを目的として、新型コロナウイルス感染症の5類移行後も引き続き、週あたりの勤務日数の半分以上の在宅勤務を可能とすることとし、運用にかかる規程等の改訂・整備を行った。

### 2. 教育研究組織の見直し（強化）に関する取組

- ・言語科学と統計科学の融合を主眼においた新しいセンター「次代言語科学研究センター」の設置に向けて準備を進めた。
- ・総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」を令和5年4月に新たに開設した。また、新入学生を確保するためにコース案内冊子を作成し、国内の関連分野の修士課程を設置している国公私立の184大学に送付するとともに、令和5年9月18・19日に所内で大学院説明会、及び言語処理学会などの学会で配布を行うなど、積極的に広報活動に取り組んだ結果、募集人員を上回る4名が入学した（募集人員：3名程度）。
- ・機関拠点型基幹研究プロジェクトについては、各班の進捗状況を管理するために「共同研究プロジェクト推進会議」を毎月開催し、各班の活動報告、データベース構築計画・公開状況、合同シンポジウムの企画などを行い、相互に連携して研究活動を進めるとともに、自己点検・評価委員会を設置し、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。
- ・機関拠点型プロジェクト各班の連携を促進するため、研究発表としてNINJALシンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」を令和5年11月5日にオンラインで開催した。
- ・言語資源開発センターを中核とする体制のもと、コーパス構築を担当する各班のメンバーが参加する「プロジェクト横断コーパス会議」を毎月開催し、コーパス構築法の共有化や問題の検討、コーパス講習会の企画など、計画的・体系的に言語資源開発を進めた。
- ・国際発信力を高めるために、国際連携室が支援して、東呉大学と共催で海外におけるチュートリアル授業（台湾）を東呉大学にて令和6年3月9日に開催した。
- ・既存の協定32件（国外16件、国内16件）に加え、消滅危機にある宮古島の言語の整備および地域文化の保全・振興に関わる活動を推進するために沖縄県宮古島市と学術交流協定を、日本語学習者の談話・作文調査を進めるために福建師範大学外国語学院（中国）・ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）・フエ大学外国語大学（ベトナム）・ドンア大学（ベトナム）と学術交流協定を新たに締結し、連携体制を強化した。また、コーパスを活用した産学連携研究として、SB Intuitions株式会社、株式会社リクルート、ホンダリサーチインスティテュート社（HRI）など、6社と共同研究を行った。
- ・IR推進室では、研究力向上に資するために研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行うとともに、自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また収集したデータに基づき国立国語研究所年報を編集・刊行した。また、「2023年度国立国語研究所IRシンポジウム」を令和6年3月7日に本研究所で開

催し、機構本部や他機関と積極的に情報交換・議論を行い、より適切な評価指標の開発を目指すなど、評価分野にも活かすべく IR 機能の強化を図った。

### 3. 事務等の効率化・合理化に関する取組

(1) 研究所における事務組織の見直し、事務等の効率化・合理化について

- ・勤務時間管理の効率化を目的として、勤怠管理システムの導入に向けて検討を行い、令和6年度から常勤職員に適用するための体制を整えた。
- ・事務の効率化を図るため、給与明細及び年末調整手続の電子化を行い、ペーパーレス化を進めた。

(2) 機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施について

- ・コピー用紙の調達について、機構内3機関（本部・国文研・国語研）と2機構6機関の計9機関で共同調達を実施した。
- ・立川地区（人間文化研究機構国文研、国語研及び情報システム研究機構極地研、統数研の2機構4機関）で、自販機設置運營業務を実施し、156千円の手数料収入を得た。（5年契約4年目）

### 財務内容の改善に関する取組

#### 1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する取組

- ・令和5年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者27名のうち25名が参加した（参加率92.6%、新規課題採択率44.0%）。
- ・4機関合同（国文研、国語研、極地研、統数研）科研費説明会（R5.6.9）に教職員22名、人間文化研究機構科学研究費助成事業（科研費）説明会（R5.7.7）に14名が参加した。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、科学研究費助成事業の採択率向上のために、申請者が他の研究分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行う「科研費申請準備会議」（R5.5.19、7.27-28）を実施し、更に申請準備会議前に複数の教員によるプレレビューを行い、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した（令和6年度分申請32件）。（令和5年12月末現在）
- ・令和6年1月に書籍『日本語の大疑問2』（幻冬舎新書、初版発行部数10,000部）を刊行した。これは令和3年11月に刊行した『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（累計発行部数74,000部）の続編にあたるもので、既刊の増刷分及び電子書籍分を含めて、約172万円の印税収入があった。
- ・「日本語話し言葉コーパス」、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、「日本語日常会話コーパス」及び「日本語諸方言コーパス」の有償頒布を行い、総額2,152万円の収入を得た。
- ・施設使用料について、外部への施設貸出しにより、令和5年度は全体で125万円の収入を得た。

#### 2. 経費の抑制に関する取組

経費の抑制については、契約方法の見直しや、外部委託等の促進を以下のとおり実施した。

- ・所内各室廊下やエレベータ前、トイレに電力節減、夏期には軽装励行のポスターを掲示し、教職員に対してコスト削減・省エネ推進の啓発を図った。また、例年どおり4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し省エネを図った。
- ・警備業務、施設常駐管理業務の期間満了に伴い、前回同様複数年契約による入札を実施し、経費の抑制及び業務の効率化を図った。

- ・会議のペーパーレス化については、コロナ禍を機とした所内会議のオンライン化と、ハイブリッド開催時のタブレット端末の活用により、印刷等消耗品の削減と労務の軽減を図った。
- ・入札基準に満たない調達について、ホームページ上で広く募ることにより競争性を高め、経費の抑制及び業務の効率化を図った。
- ・給与明細及び年末調整手続を電子化することにより、印刷費、用紙代、郵便費等、経費の抑制と事務の効率化を図った。【再掲】

## 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する取組

### 1. 評価の充実に関する取組

- ・所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会（委員9人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議を連携して開催し、PDCAサイクルを管理している。
- ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家9名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。
- ・IR推進室では、研究力向上に資するために研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行うとともに、自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また、「2023年度国立国語研究所IRシンポジウム」を令和6年3月7日に開催し、機構本部や他機関と積極的に情報交換・議論を行い、より適切な評価指標の開発を目指すなど、評価分野にも活かすべくIR機能の強化を図った。【再掲】

### 2. 情報公開や情報発信等の推進に関する取組

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて、外部評価委員会による研究系・センターの令和4年度における実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。
- ・研究成果を分かりやすく一般に向けて発信するため、第18回NINJALフォーラム「国語研の言語生活研究の75年：生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」を令和5年12月16日に一橋講堂にてハイブリッド開催し、対面・オンライン併せて190名の参加があった。また大学共同利用機関協議会主催の大学共同利用機関シンポジウム2023「現代の社会問題に挑む日本の科学」（令和5年10月22日、日本科学未来館）の主担当機関として、シンポジウムの企画・運営を実施した。各大学共同利用機関に所属する10名のパネリストが登壇したシンポジウムであり、対面で68名、ニコニコ動画によるオンライン視聴者数延べ31,352名（コメント数3,218件）の参加があった。
- ・令和6年1月に書籍『日本語の大疑問2』（幻冬舎新書、初版発行部数10,000部）を刊行した。これは令和3年11月に刊行した『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（累計発行部数74,000部）の続編にあたり、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した「ことばの疑問」の記事を改訂の上、書籍化したものである。
- ・国語研ポータルサイト「ことば研究館」において、ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」25本および各種催し物、メディア掲載情報など、ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また、研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』Vol.13を3月に刊行した。

## その他業務運営に関する取組

### 1. 施設設備の整備・活用等に関する取組

- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定や伐採、通路の補修等）により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。

- ・研究所内の事務室内，廊下やエレベータ前，トイレに電力節減，夏期の軽装励行のポスターを掲示し，職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他，4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し，昨年度に引き続き省エネを図った。【再掲】

## 2. 安全管理に関する取組

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等の実施

- ・危機管理委員会を開催した。委員会では，令和5年度防災訓練の受講状況について報告があり，併せて，研究所内の避難経路及び防災備蓄品について確認を行った。また，1月1日に発生した能登半島地震への対応として1月2日に全所員宛に送信した緊急時安否確認メールの返信状況について報告が行われ，「事業継続計画(BCP)」の定期的な見直しの一環として管理部の「災害時優先業務(優先すべき通常業務)」を更新した。
- ・東京消防庁立川都民防災教育センターにおいて，令和6年1月16日，17日の両日に，VR防災体験や応急救護訓練等4種類の防災体験及び救護訓練を実施し16名が参加した。

## 3. 法令遵守等に関する取組

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等の実施，受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督，情報セキュリティに関する研修の実施。

- ・ハラスメント防止策として，啓発用のリーフレットを新規採用の教職員へ配布し周知するとともに，機構本部主催のハラスメント防止研修(令和5年12月13日，オンライン形式)を実施し，職場において問題となる各種ハラスメントのうち，特に研究指導の場に関する事例紹介を通じて，ハラスメントを起こさないための注意点等について啓発を行い，管理監督の立場の職員を中心に47名(録画配信受講者を含む)が本研修に参加した。
- ・日本学術振興会が提供している研究倫理eラーニングコース[eL CoRE]を，令和4年度より研修受講済みの研究者についても3年毎に再受講することとしており，令和5年度も引き続き実施した。また，eラーニングシステムを利用したコンプライアンス研修及び研究倫理研修(機構主催)を合同で実施し，140名が参加した。
- ・研究不正行為の告発に関する事案の調査結果による再発防止策の一つとして，研究公正研修「ケーススタディ」を研究所において企画し，令和5年12月11日にハイブリッド形式で実施した。なお，受講対象は全職員とし，当日受講できない職員については，後日録画視聴で受講することとした。
- ・イベントにおける迷惑行為等への対応のため，「国立国語研究所のイベントにおけるアンチハラスメントポリシー」を策定し，研究所ホームページにおいて周知を行った。
- ・情報セキュリティインシデント(個人情報762名分のデータが保存されたノートPCの紛失事案)が発生したことの再発防止策として，関連規定の見直し及び全利用者対象の情報セキュリティ対策のための研修会(令和6年3月～4月にかけて合計2回開催及び録画配信)を実施した。また，人間文化研究機構本部主催の各情報セキュリティ研修・訓練を対象者に受講させた。
- ・令和6年度以降も公開継続予定のほぼ全てのウェブサーバ(21件)及び動的コンテンツ(25件)を対象として，専門業者による脆弱性診断を実施した。

## 《管理業務に関する取組の評価結果》

管理業務はきわめて良好に行われており、すべての項目で高い評価に値する努力が見られた。

組織運営の改善及び効率化に関しては、運営会議の外部委員からの意見を踏まえて組織運営の改善に活かす、また既存の学術協定に加えて、新たに国内・国外の学術協定を締結して連携を強化するなど、(1) 組織運営の改善に関する取組、(2) 教育研究組織の見直し（強化）に関する取組、(3) 事務等の効率化・合理化に関する取組、のいずれの項目でも高い評価に値する努力が見られた。

財務内容の改善に関しては、科研費採択率の向上のための「科研費申請準備会議」を行い、書籍刊行で約 172 万円、コーパスの有償配布で 2152 万円の収入をあげ、会議のペーパーレス化などで労務・経費の削減を図るなど、(1) 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する取組、(2) 経費の抑制に関する取組、のいずれの項目でも高い評価に値する努力が見られた。

教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する取組に関しては、自己点検・評価委員会や共同研究プロジェクト推進会議により PDCA サイクルを管理し、外部評価委員会による外部評価を実施し、外部評価報告書を公開するなど、(1) 評価の充実に関する取組、(2) 情報公開や情報発信等の推進に関する取組、のいずれの項目においても高い評価に値する努力が見られた。

その他の業務運営に関する取組では、適切な施設・設備の維持管理による職員・利用者の予防安全に努め、さまざまな工夫により省エネを図り、情報セキュリティ対策のための研修会や研究倫理教育などを実施するなど、(1) 施設設備の整備・活用等に関する取組、(2) 安全管理に関する取組、(3) 法令遵守等に関する取組、のいずれの項目でも高い評価に値する努力が見られた。

## 資 料

## 国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 片桐 恭弘 産業技術総合研究所人工知能研究センター長  
専門： 情報科学, 社会言語学
- 坂原 茂 東京大学名誉教授  
専門： フランス語学, 認知言語史
- 上山 あゆみ 九州大学人文科学研究院長/教授  
専門： 生成文法・日本語統語論
- 岡島 昭浩 大阪大学大学院人文学研究科教授  
(令和6年4月1日～) 専門： 国語史, 日本語学史
- 砂川 裕一 群馬大学名誉教授  
専門： 哲学, 比較文化基礎論, 言語文化教育論, 日本語日本事情教育論
- 陳 力衛 成城大学経済学部教授  
専門： 日本語史, 日中言語交渉史
- 橋田 浩一 理化学研究所革新知能統合研究センター 社会における人工知能研究  
グループ グループディレクター  
専門： 自然言語処理
- 日比谷 潤子 国際基督教大学名誉教授  
専門： 社会言語学
- 米田 信子 大阪大学大学院人文学研究科教授  
専門： 言語学, フィールド言語学, 対照言語学, バントゥ諸語

任期：令和5年4月1日～令和7年3月31日（2年）

◎委員長 ○副委員長

## 国立国語研究所令和5年度業務の実績に関する評価の実施について

### 1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、基幹型共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトリーダー・センター長が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

### 2. 評価の実施方法

評価は、各プロジェクトリーダー・センター長が作成した自己点検評価報告書・実績報告書を踏まえて、書面審査を行った。「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目は次のとおりである。

点検項目	下位項目
共同利用・共同研究	フィールド調査・実験等（アクティビティ）
	データベース等の構築（アクティビティ）
	国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）
	他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）
	異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）
	調査データ・データベース等公開（アウトプット）
	公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）
	書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）
	データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）
	データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）
大学院教育・若手研究者育成	特別共同利用研究員の受け入れ
	総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等
	プロジェクト非常勤研究員の雇用
	大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加
	若手研究者への発表の機会の提供
	若手研究者への研究費・発表旅費の支援
	若手研究者向けのチュートリアル等

地域・社会との連携	産業界との連携
	地域・社会との連携
	一般向け講義・講演会・フォーラム等
	社会人を対象とするスキルアップの計画等
	研究成果の社会への還元
グローバル化	海外の研究者の受入
	海外の大学との連携等
	国際シンポジウムの開催
	英語による研究成果の発信等
その他特記事項	

# 国立国語研究所外部評価委員会規程

平成 21 年 10 月 1 日

国語研規程第 7 号

改正 平成 28 年 4 月 1 日

改正 平成 31 年 4 月 1 日

## (趣旨)

第 1 条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第 1 号）第 16 条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

## (任務)

第 2 条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

## (組織)

第 3 条 委員会は、10 名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

## (任期)

第 4 条 委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

## (委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

## (議事)

第 6 条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

## (意見の聴取)

第 7 条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は，研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は，評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は，管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか，外部評価の実施に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

附 則

この規程は，平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は，平成28年4月1日から施行する。

附 則

この規程は，平成31年4月1日から施行する。

## 国立国語研究所外部評価委員会【令和5年度実績評価】（第1回）

日 時： 令和6年9月19日（木） 14:00～16:30

場 所： オンライン会議（ZOOM）

### 議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和5年度共同研究プロジェクト評価について
4. 令和5年度「言語資源開発センター」及び「共同利用推進センター」の評価について
5. 令和5年度「管理業務」の評価について
6. その他
  - ・人間文化研究機構 第4期中期計画に係る自己点検・評価結果（令和5年度）について

### 資 料：

- |                      |   |
|----------------------|---|
| 資料 1                 | 国立国語研究所外部評価委員名簿（令和6年9月1日現在）                 |
| 資料 2                 | 国立国語研究所外部評価委員会規程                            |
| 資料 3                 | 前回議事概要（案）（令和5年10月26日）                       |
| 資料 4                 | 国立国語研究所令和5年度実績に係る外部評価 担当一覧                  |
| 資料 5-1               | 機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告書                        |
| 資料 5-2               | 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書                        |
| 資料 6-1               | 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価シート                |
| 資料 6-2-1～<br>6-2-7   | 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検報告書              |
| 資料 7-1               | 「実証的な理論・対照言語学の推進」評価シート                      |
| 資料 7-2-1～<br>7-2-7   | 「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検報告書                    |
| 資料 8-1               | 「消滅危機言語の保存研究」評価シート                          |
| 資料 8-2               | 「消滅危機言語の保存研究」自己点検報告書                        |
| 資料 9-1               | 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」評価シート              |
| 資料 9-2               | 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検報告書            |
| 資料 10-1              | 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」評価シート              |
| 資料 10-2              | 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検報告書            |
| 資料 11-1              | 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」<br>評価シート   |
| 資料 11-2-1～<br>11-2-7 | 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」<br>自己点検報告書 |
| 資料 12-1              | 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価シート               |
| 資料 12-2              | 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検報告書             |

資料 13-1	言語資源開発センター 評価シート
資料 13-2	言語資源開発センター 自己点検報告書
資料 14-1	共同利用推進センター 評価シート
資料 14-2	共同利用推進センター 自己点検報告書
資料 15	令和5年度「管理業務」に関する自己点検シート
資料 16-1	令和5年度の実績に関する外部評価報告書の構成について
資料 16-2	国立国語研究所 令和5年度実績に係る外部評価スケジュール
資料 17-1	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 第4期中期計画に係る自己点検・評価結果（令和5年度）
資料 17-2	第4期中期計画 自己点検報告書【計画（3）】